調査研究

朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告

渡　辺　　誠*
田　中　禎　子**

1．はじめに

1986年度に引き続き、1987年度も朝日遺跡の貝層ブロック・サンプリング資料を調査することになった。今年度は地区・層位を相談の上、サンプリング自体は愛知県埋文センターで実施して、名古屋大学考古学研究室に搬入して頂いた。それらは**第1表**に示した38件で、B～Hは搬入日と地区の違いを示している。なお前年度分はAで示すことにした。それらの資料は昨年度の年報に報告したが（渡辺1987）、若干残された資料は本報文中にあわせて報告することにする。

資料の所属時期は前年度と同様に、弥生時代中期前葉の朝日式期より同後葉の高蔵式期までである。これらを時期別に整理すると、次のとおりである。

朝日式期（前葉）　No.B７……１件（ 2.6%）
貝田町式期（中葉）　No.B１～６．C１・２．F１～３．H15～19.……16件（42.1%）
高蔵式期（後葉）　No.D１・２．E１～３．G１・２．H１～14.……21件（55.3%）

前年度は、朝日式期・３件・13.0%、貝田町式期・９件・39.1%、貝田町～高蔵式期・７件・30.4%、高蔵式期・３件・13.0%、であり、中期中葉の貝田町式期に主体があったのに対し、今年度は前年度少なかった同後葉・高蔵式期の資料が主体となった点に特徴がみられる。

水洗選別の結果検出された遺物名は、**第2表**に示すとおりである。そのほとんどは自然遺物であり、人工遺物はごく少量である。自然遺物の主体をなすものは貝類であり、他に少量の動物遺体と植物遺体がある。これらの調査結果は、以下に記すとおりである。

2．人工遺物

土器片：ほとんどのブロックから検出されたが、いずれもごく少量の細片のみである。
石錐：Ｂ６（貝田町式期）より破片１点が検出された。チャート製？（**写真１－１**）。
石鏃：Ｈ５（高蔵式期）より完形の無茎石鏃１点が検出された。下呂石製（同２）。
フレイク：すべて細片であるが、石質はほとんど黒雲母石英安山岩（いわゆる下呂石）である。

＊　名古屋大学文学部助教授
＊＊名古屋大学文学部学生

第1表　ブロック・サンプリング一覧表

ブロック名	サイズ（タテ・ヨコ・厚さ）	地区	層位	構成	時期
B 1	30×30×10	IAS61E・F（Ⅵ）	8	混土貝層	貝田町
B 2	30×30× 5	〃	9	〃	〃
B 3	30×30× 8	〃	11	〃	〃
B 4	30×30× 5	〃	12	混貝土層	〃
B 5	30×30× 5	〃	13	〃	〃
B 6	30×30×10	〃	17	混土貝層	〃
B 7	30×30×10	〃	18	〃	朝日
C 1	30×30× 5	IAS 61G　SD01.03.05セクション	10	破砕貝層	貝田町(古)
C 2	30×30× 5	〃	11	〃	〃
D 1	30×30×10	IAS 61I　河道トレンチ（西）セクション	24	混貝土層	高蔵
D 2	30×30×10	〃	48	〃	〃
E 1	30×30× 5	IAS 61I　河道トレンチ（中央）セクション	44	〃	〃
E 2	30×30×10	〃	45	〃	〃
E 3	30×30×10	〃	48	〃	〃
F 1	30×30× 5	IAS 61J Ⅶ J 13b～cセクションベルト		〃	貝田町
F 2	30×30× 5	〃		〃	〃
F 3	30×30× 5	〃		〃	〃
G 1	30×30× 8	IAS 61H　河道セクション	38	混貝土層	高蔵
G 2	30×30× 8	〃	42	〃	〃
H 1	30×30×10	IAS61KL　ⅦJ20e～Ⅷ2e セクションベルト	10	混土貝層	〃
H 2	30×30×10	〃	11	〃	〃
H 3	30×30× 5	〃	12	〃	〃
H 4	30×30×10	〃	14	〃	〃
H 5	30×30×10	〃	16	〃	〃
H 6	30×30×10	〃	17	混貝土層	〃
H 7	30×30× 4	〃	18	混土貝層	〃
H 8	30×30× 4	〃	19	〃	〃
H 9	30×30× 5	〃	21	〃	〃
H10	30×30× 5	〃	23	混貝土層	〃
H11	30×30× 5	〃	25	〃	〃
H12	30×30×10	〃	26	〃	〃
H13	30×30× 5	〃	30	〃	〃
H14	30×30× 5	〃	72	〃	〃
H15	30×30× 5	〃	31	混貝土層	貝田町
H16	30×30× 5	〃	38	〃	〃
H17	30×30× 3	〃	32	混土貝層	〃
H18	30×30× 8	〃	42	混貝土層	
H19	30×30× 5	〃	49	〃	〃

第2表　ブロック・サンプリング別遺物名一覧表

種類	人工遺物							自然遺物																	
ブロック名	土器片	石錐	石鏃	フレイク	骨製ヤス	加工痕のある獣骨	貝輪	貝類	真珠	微小貝	フジツボ類	カニ類	ウニ類	魚骨	魚鱗	カエル類	ヘビ類	鳥・獣骨	炭化米	豆類	ヒョウタン類	ウリ類	オニグルミ	不明堅果類	微細種子
A 1	○							○		○				○		○		○	○						○
A 2	○							○		○	○			○			○		○						○
A 3	○							○		○				○	○		○		○						○
A 4	○							○		○				○	○			○	○						○
A 5	○							○		○		○	○	○	○			○	○						○
A 6	○							○		○	○			○	○				○						○
A 7	○							○		○				○				○	○						○
A 8	○							○		○	○	○	○	○	○				○						○
A 9	○							○		○			○	○	○	○		○	○						○
A10	○							○		○			○	○	○			○	○						○
A11	○			○		○		○			○		○	○	○		○	○	○						○
A12	○							○		○	○		○	○	○			○	○						○
A13	○							○		○			○	○	○	○			○	○					○
A14	○							○		○	○		○	○	○	○			○						○
A15	○			○				○		○	○		○	○	○				○						○
A16	○							○		○				○	○			○	○						○
A17	○							○			○			○	○				○						○
A18	○							○		○	○			○	○			○	○						○
A19	○			○				○		○	○			○	○			○	○		○	○			○
A20	○							○			○			○				○	○			○	○		○
A21	○							○		○	○		○	○	○				○			○			○
A22	○			○				○		○	○		○	○	○				○		○	○			○
B 1	○			○				○		○				○	○		○		○						○
B 2	○							○		○				○					○						○
B 3	○				○			○		○			○	○	○				○						○
B 4	○							○		○			○	○	○			○	○						○
B 5	○							○		○				○	○		○		○						○
B 6	○	○		○				○		○	○		○	○	○		○	○	○	○					○
B 7	○			○				○		○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○			○
C 1	○							○			○			○	○		○		○		○	○			○
C 2	○							○			○			○	○				○		○	○			○
D 1	○			○				○		○	○		○	○	○				○		○	○	○		○
D 2	○			○				○		○	○		○	○	○		○		○	○		○	○		○
E 1								○						○											○

種類	人工遺物							自然遺物																			
ブロック名	土器片	石錐	石鏃	フレイク	骨製ヤス	加工痕のある獣骨	貝輪	貝類	真珠	微小貝	フジツボ類	カニ類	ウニ類	魚骨	魚鱗	カエル類	ヘビ類	鳥・獣骨	炭化米	豆類	ヒョウタン類	ウリ類	オニグルミ	不明堅果類	微細種子
E 2				○				○			○	○		○	○						○	○			○
E 3								○			○				○				○		○	○			○
F 1	○							○			○			○	○				○						○
F 2	○			○				○		○	○			○	○				○						○
F 3	○							○		○				○	○	○		○	○						○
G 1	○			○				○		○	○		○	○	○		○	○	○		○	○	○		○
G 2	○			○				○		○	○			○	○				○			○			○
H 1	○							○		○	○			○	○		○	○	○				○		○
H 2	○			○				○		○				○	○	○		○	○						○
H 3	○			○				○	○	○	○		○	○	○			○	○						○
H 4	○			○				○		○	○			○	○			○	○						○
H 5	○		○			○		○		○			○	○	○		○	○	○						○
H 6	○			○				○		○	○			○	○	○	○	○	○						○
H 7	○			○				○		○	○		○	○	○	○	○	○	○						○
H 8	○							○		○	○		○	○	○				○						○
H 9	○							○		○	○		○	○	○		○	○	○						○
H10	○			○				○		○	○			○	○	○		○	○					○	○
H11	○							○		○	○			○	○	○	○		○		○	○			○
H12	○			○				○		○				○	○	○		○	○						○
H13	○			○				○		○	○			○	○	○		○	○						○
H14	○							○		○	○			○	○			○	○						○
H15	○			○			○	○		○				○	○			○	○						○
H16	○			○				○		○				○	○			○	○						○
H17	○							○		○	○			○	○			○	○						○
H18	○			○	○			○		○	○			○	○		○	○	○						○
H19	○			○				○			○			○	○			○							○
件数	57	1	1	25	2	2	1	60	1	50	39	3	23	59	54	12	17	34	57	4	9	14	2	2	60

骨製ヤス：細片２点が検出された。第１例はＢ３（同３）、第２例はH18（同４）からであり、ともに貝田町式期に属す。

加工痕のある獣骨：刃物による切截痕のみられる２点が検出された。第１例はA11（貝田町式期）からで、シカの右中手骨近位端（同５）、第２例はＨ５（高蔵式期）からで不明

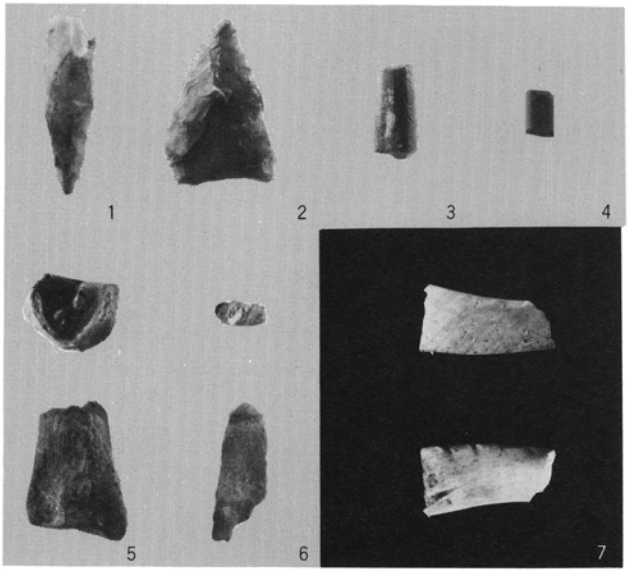


写真1　人工遺物(実大)
1：石錐、2：石鏃、3・4：骨製ヤス、
5・6：加工痕のある獣骨、7：貝輪.

管状骨片（同6）である。これらは本遺跡に多い骨製ヤスの製作に当って生じたものである。

貝輪：H15（貝田町式期）より破片1点が検出された。ベンケイガイ製（同7）。ベンケイガイ製腕輪はきわめて縄文時代的であるばかりでなく、この貝自体が本例以外には出土しておらず、下呂石同様交易によってもたらされたことを示していて興味深い。

3．貝の種類と構成

前年度および今年度において検出された貝類は、43種である（**第3表**、**写真2**）。前年度資料では24種であり若干の増加（○印）がみられるが、逆に前年度に検出されていながら、今年度には検出されていない種（●印）が7種ある。これらのいずれかの年度にのみ検出された種は、G1のチリメンカワニナを除き、すべて5％以下の少量にすぎない。

これらの大部分は食用に供せられたものとみられるが、なかには幼貝も含まれていて、食用価値の乏しいものもある。なお微小貝については次項において記すこととする。

また、ベンケイガイが貝輪として1点検出されたにすぎないことは、上に記したとおりである。

今年度検出の34種の各ブロックにおける構成比は、**第4表**にしめすとおりである。

第3表　貝類種名一覧表

A．腹足綱　GASTROPODA

・1．ツタノハガイ科ヨメガカサ	*Cellana toreuma* Reeve
◦2．ユキノカサ科ヒメコザラ	*Patelloida (Asteracmea) pygmaea* Dunker
3．ニシキウズガイ科キサゴ	*Umbonium (Suchium) costatum* Kiener
・4．リュウテン科ササエ	*Turbo (Batillus) cornutus* Solander
◦5．リュウテン科サンショウスガイ	*Neocollonia piluda* Kiener
・6．アマオブネ科アマオブネ	*Nerita (Theliostyla) albicilla* Linnaeus
◦7．アマオブネ科アマガイ	*Puperita (Heminerita) japonica* Dunker
8．タニシ科オオタニシ	*Cipangopaludina japoncia* Martens
9．タニシ科マルタニシ	*Cipangopaludina malleata* Reeve
10．タニシ科	Cipangopaludina sp.
11．カワニナ科カワニナ	*Semisulcospira bensoni* Philippi
◦12．カワニナ科チリメンカワニナ	*Semisulcospira reiniana* Brot
13．ウミニナ科ウミニナ	*Batillaria multiformis* Lischke
14．ウミニナ科イボウミニナ	*Batillaria zonalis* Bruguiere
15．ウミニナ科ヘナタリ	*Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata* Bruguiere
16．ウミニナ科フトヘナタリ	*Cerithidea* (S.S)
17．ウミニナ科カワアイ	*Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis* K.Martin
18．ウミニナ科	Potamididae sp.
◦19．タマガイ科ツメタガイ	*Neverita (Glossaulax) didyma* Röding
◦20．アクキガイ科アカニシ	*Rapana thomasiana* Grosse
・21．アクキガイ科イボニシ	*Purpura clavigera* Küster
22．アクキガイ科レイシ	*Thais bronni* Dunker
◦23．エゾバイ科シワホラダマシ	*Pollia mollis* Gould
・24．エゾバイ科オガイ	*Cantharus cecillei* Philippi
25．オリイレヨウバイ科アラムシロ	*Triria (Hinia) festivas* Powys
・26．イトマキボラ科イトマキボラ？	*Pleuroploca trapezium* Linnaeus
◦27．オカミミガイ科オカミミガイ	*Ellobium chinense* Pfeiffer

B．斧足綱　PELECYPODA

◦1．フネガイ科サルボウ	*Anadara (Scapharca) subcrenata* Lischek
◦2．タマキガイ科ベンケイガイ	*Glycymeris (Veletuceta) albolineata* Lischke
・3．イタボガキ科イタボガキ	*Ostea (s.s) denselamellosa* Lischke
4．イタボガキ科マガキ	*Grassostrea gigas* Thunberg
・5．カワシンジュガイ科カワシンジュガイ	*Margaritifera magaritifera* Linnaeus
◦6．イシガイ科イシガイ	*Unio (s.s) douglasiae nipponensis* Martens
7．フナガタガイ科ウネナシトマヤガイ	*Trapezium (Neotrapezium) liratum* Reeve
8．シジミ科ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime
9．マルスダレガイ科ハマグリ	*Meretrix lusoria* Röding
10．マルスダレガイ科カガミガイ	*Dosinia (Phacosoma) japonica* Reeve
11．マルスダレガイ科オキシジミ	*Cyclina sinensis* Gmelin
12．バカガイ科シオフキ	*Mactra veneriformis* Reeve
◦13．リュウキュウマスオ科ムラサキガイ	*Soltellina (s.s) diphos* Linnaeus
◦14．サラガイ科サラガイ	*Peronidia venulosa* Schrenck
◦15．マテガイ科マテガイ	*Solen strictus* Gould
16．エゾオオノガイ科オオノガイ	*Mya (Arenomya) arenaria oonogai* Makiyama

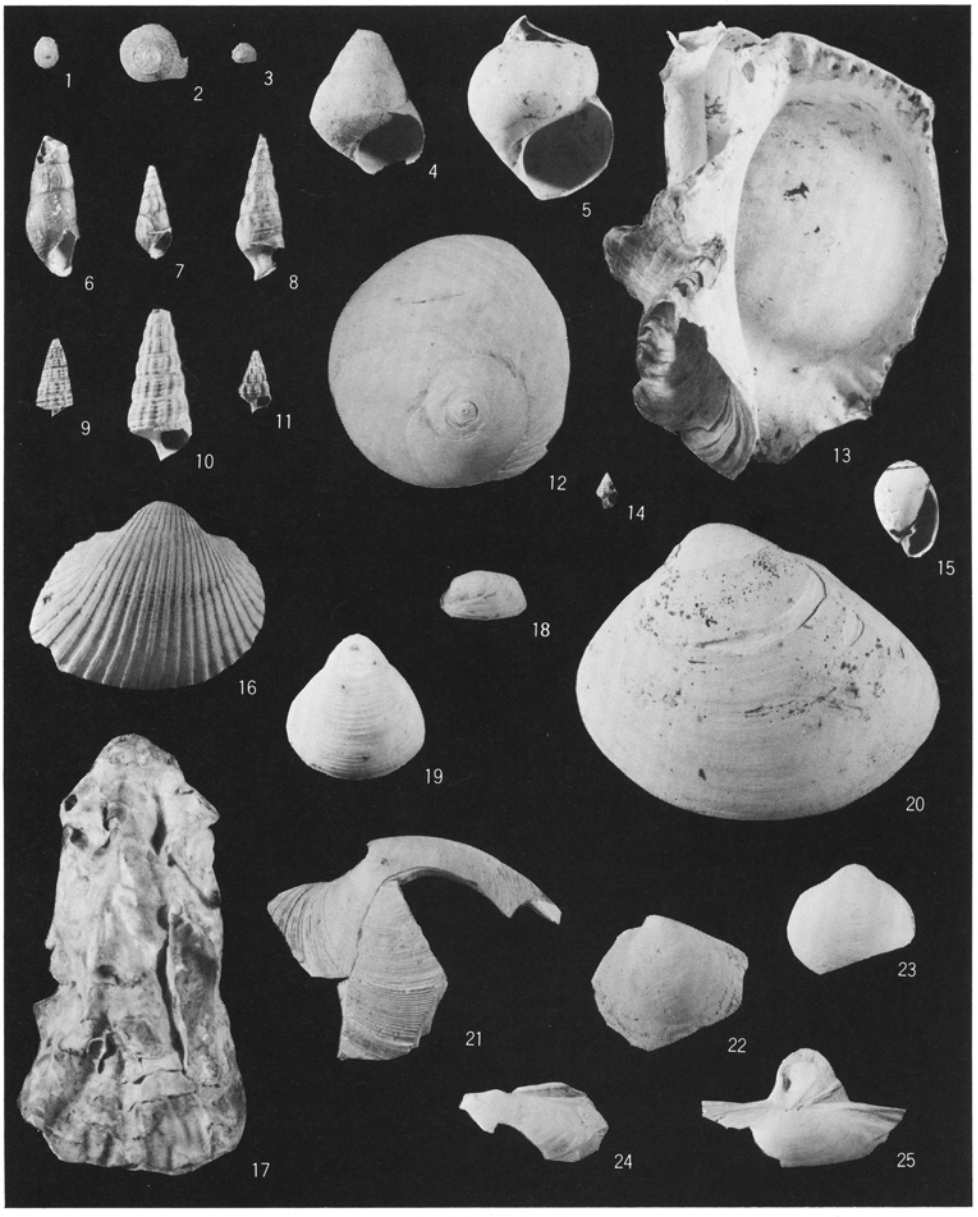


写真２　貝類（縮尺３分の２）

１：ヒメコザラ、２：キサゴ、３：サンショウスガイ、４：オオタニシ、５：マルタニシ、６：カワニナ、７：チリメンカワニナ、８：イボウミニナ、９：ヘナタリ、10：フトヘナタリ、11：カワアイ、12：ツメタガイ、13：アカニシ、14：アラムシロ、15：オカミミガイ、16：サルボウ右殻、17：マガキ左殻、18：ウネナシトマヤガイ左殻、19：ヤマトシジミ左殻、20：ハマグリ左殻、21：カガミガイ左殻、22：オキシジミ左殻、23：シオフキ左殻、24：ムラサキガイ左殻、25：オオノガイ左殻．

第4表　貝類構成比一覧表

種名	ブロック番号 / 構成比	B1 左殻/右殻	B1 最少個体数	B1 %	B2 左殻/右殻	B2 最少個体数	B2 %	B3 左殻/右殻	B3 最少個体数	B3 %	B4 左殻/右殻	B4 最少個体数	B4 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		10	5.21		1	0.93		3	1.91		1	1.41
	カワニナ		0	0		0	0		1	0.64		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		1	1.41
	イボウミニナ		11	5.73		3	2.80		8	5.10		1	1.41
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		0	0		0	0		1	1.41
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		1	0.64		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	0.52		0	0		3	1.91		2	2.82
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		22	11.46		4	3.73		16	10.20		6	8.46
斧足綱	サルボウ	1/0	1	0.52		0	0		0	0		0	0
	マガキ	11/5	11	5.73	13/4	13	12.15	4/2	4	2.55		0	0
	イシガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	26/26	26	13.54	7/8	8	7.48	16/17	17	10.83	3/5	5	7.04
	ハマグリ	117/122	122	63.54	64/68	68	63.55	53/65	65	41.40	49/53	53	74.65
	カガミガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ	2/0	2	1.04		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ	0	0	0		0	0		0	0	0/1	1	1.41
	マテガイ	0	0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	8/6	8	4.17	11/14	14	13.08	42/55	55	35.03	6/16	6	8.45
	小計		170	88.54		103	96.26		141	89.81		65	91.55
	総計		192	100.00		107	99.99		157	100.01		71	100.01

種名	ブロック番号 / 構成比	B5 左殻/右殻	B5 最少個体数	B5 %	B6 左殻/右殻	B6 最少個体数	B6 %	B7 左殻/右殻	B7 最少個体数	B7 %	C1 左殻/右殻	C1 最少個体数	C1 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		1	0.74		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		10	7.41		0	0		0	0
	マルタニシ		1	2.78		1	0.74		0	0		0	0
	タニシ科		0	0		6	4.44		2	3.64		0	0
	カワニナ		0	0		1	0.74		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		6	4.44		0	0		0	0
	ヘナタリ		0	0		0	0		1	1.82		0	0
	フトヘナタリ		1	2.78		4	2.96		0	0		0	0
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	2.78		1	0.74		3	5.45		1	1.00
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		1	0.74		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		3	8.34		31	22.95		6	10.91		1	1.00
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ		0	0	2/1	2	1.48	5/1	5	9.09	98/38	98	98.00
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	9/10	10	27.78	17/10	17	12.59	4/4	4	7.27	1/0	1	1.00
	ハマグリ	20/16	20	55.56	79/83	83	61.48	30/40	40	72.73		0	0
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	2/3	3	8.33	2/1	2	1.48		0	0		0	0
	小計		33	91.67		104	77.03		49	89.09		99	99.00
	総計		36	100.01		135	99.98		55	100.00		100	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	C2			D1			D2			E1		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		1	0.41		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		0	0		2	0.49		1	0.40		0	0
	カワニナ		0	0		0	0		1	0.40		0	0
	チリメンカワニナ		1	5.00		7	1.72		11	4.44		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		3	0.74		3	1.21		0	0
	ヘナタリ		0	0		1	0.25		2	0.81		0	0
	フトヘナタリ		0	0		1	0.25		0	0		0	0
	カワアイ		0	0		1	0.25		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	5.00		8	1.97		4	1.61		0	0
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		2	10.00		23	5.67		23	9.27		0	0
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	18/8	18	90.00	333/83	333	82.02	208/98	208	83.87	87/37	87	100.00
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0	5/6	6	1.48		0	0		0	0
	ヤマトシジミ		0	0	25/34	34	8.37	2/4	4	1.61		0	0
	ハマグリ		0	0	9/5	9	2.22	11/10	11	4.44		0	0
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ		0	0	0/1	1	0.25	1/2	2	0.81		0	0
	小計		18	90.00		383	94.34		225	90.73		87	100.00
	総計		20	100.00		406	100.01		248	100.00		87	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	E2			E3			F1			F2		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		0	0		0	0		9	5.63		20	20.62
	カワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		0	0		2	1.25		0	0
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		0	0		1	9.63		0	0
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		1	0.43		1	0.62		0	0		1	1.03
	レイシ		0	0		0	0		1	0.63		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		1	0.43		1	0.62		13	8.14		21	21.65
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		1	1.03
	マガキ	229/120	229	99.57	165/89	165	99.40	95/57	95	59.38	26/10	26	26.80
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0	0/1	1	0.63		0	0
	ヤマトシジミ		0	0		0	0	2/1	2	1.25		2	2.06
	ハマグリ		0	0		0	0	22/24	24	15.00	34/20	34	35.05
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ		0	0		0	0	14/25	25	15.63	5/13	13	13.40
	小計		229	99.57		165	99.40		147	91.89		76	78.34
	総計		230	100.00		166	100.02		160	100.03		97	99.99

種名	ブロック番号 / 構成比	F3 左殻/右殻	F3 最少個体数	F3 %	G1 左殻/右殻	G1 最少個体数	G1 %	G2 左殻/右殻	G2 最少個体数	G2 %	H1 左殻/右殻	H1 最少個体数	H1 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		1	0.43
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		1	0.48		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		16	10.19		7	3.37		0	0		14	5.98
	カワニナ		0	0		9	4.33		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		47	22.60		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		2	1.27		4	1.92		0	0		3	1.28
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		2	0.96		0	0		4	1.71
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		3	1.91		2	0.96		5	6.49		3	1.28
	レイシ		0	0		0	0		0	0		1	0.43
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		1	0.48		0	0		1	0.43
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		21	13.37		73	53.10		5	6.49		27	11.54
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	45/36	45	28.66	61/23	61	29.33	69/43	69	89.61	61/14	61	26.07
	イシガイ		0	0		0	0		0	0	0/1	1	0.43
	ウネナシトマヤガイ	0/1	1	0.64	8/4	8	3.85		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	9/12	12	7.64	18/26	26	12.50	1/3	3	3.90	19/18	19	8.12
	ハマグリ	49/51	51	32.48	38/36	38	18.27		0	0	101/117	117	50.00
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ		0	0		0	0		0	0	2/1	2	0.85
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	8/27	27	17.20	0/2	2	0.96		0	0	5/7	7	3.00
	小計		136	86.62		135	64.91		72	93.51		207	88.47
	総計		157	99.99		208	100.01		77	100.00		234	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	H2 左殻/右殻	H2 最少個体数	H2 %	H3 左殻/右殻	H3 最少個体数	H3 %	H4 左殻/右殻	H4 最少個体数	H4 %	H5 左殻/右殻	H5 最少個体数	H5 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		1	0.58
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		1	0.56		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		12	6.78		28	13.33		2	1.28		7	4.09
	カワニナ		0	0		1	0.48		4	2.56		1	0.58
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		2	1.17
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		1	0.56		3	1.43		1	0.64		5	2.92
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		1	0.58
	フトヘナタリ		5	2.82		2	2.38		0	0		12	7.02
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		4	2.26		2	0.95		1	0.64		2	1.17
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		23	12.98		39	18.57		8	5.12		31	18.11
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	25/12	25	14.12	16/8	16	7.62	4/14	14	8.97	32/30	32	18.71
	イシガイ	0/1	1	0.56		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	2/2	2	1.13	3/1	3	1.43		0	0	1/0	1	0.58
	ヤマトシジミ	17/12	17	9.60	30/23	30	14.29	4/1	4	2.56	17/21	21	12.28
	ハマグリ	102/78	102	57.63	89/101	101	48.10	101/125	125	80.13	66/77	77	45.03
	カガミガイ	1/0	1	0.56	1/1	1	0.48		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シオフキ	1/0	1	0.56	1/1	1	0.48	3/1	3	1.92	1/0	1	0.58
	ムラサキガイ		0	0	1/0	1	0.48		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0	1/0	1	0.48		0	0		0	0
	オオノガイ	2/5	5	2.82	14/17	17	8.10	2/1	2	1.28	6/8	8	4.68
	小計		154	86.98		171	81.46		148	94.86		140	81.86
	総計		177	99.96		210	100.03		156	99.98		171	99.97

種名	ブロック番号 / 構成比	H6 左殻/右殻	H6 最少個体数	H6 %	H7 左殻/右殻	H7 最少個体数	H7 %	H8 左殻/右殻	H8 最少個体数	H8 %	H9 左殻/右殻	H9 最少個体数	H9 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		2	1.18
	サンショウスガイ		0	0		1	0.58		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		15	9.32		36	20.81		7	4.79		17	10.06
	カワニナ		1	0.62		0	0		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		6	3.73		8	4.62		1	0.68		0	0
	ヘナタリ		0	0		1	0.58		0	0		0	0
	フトヘナタリ		0	0		8	4.62		1	0.68		6	3.55
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		3	1.86		2	1.16		0	0		2	1.18
	レイシ		0	0		0	0		1	0.68		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		1	0.59
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		26	16.15		52	30.06		9	6.15		28	16.56
斧足綱	サルボウ	0/1	1	0.62		0	0		0	0		0	0
	マガキ	35/12	35	21.74	21/12	21	12.14	23/20	23	15.75	32/14	32	18.93
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	1/0	1	0.62		0	0	2/0	2	1.37	0/2	2	1.18
	ヤマトシジミ	9/7	9	5.59	22/17	22	12.72	11/9	11	7.53	15/9	15	8.88
	ハマグリ	80/47	80	49.69	42/60	60	34.68	91/83	91	62.33	72/75	75	44.38
	カガミガイ	1/0	1	0.69		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ	1/0	1	0.62		0	0		0	0	0/1	1	0.59
	シオフキ		0	0	3/2	3	1.73	1/3	3	2.05	4/2	4	2.37
	ムラサキガイ		0	0	3/1	3	1.73		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0	0/1	0	0.58		0	0		0	0
	オオノガイ	4/7	7	4.35	11/5	11	6.36	6/7	7	4.79	12/12	12	7.10
	小計		135	83.85		121	69.94		137	93.82		141	83.43
	総計		161	100.00		173	100.00		146	99.97		169	99.99

種名	ブロック番号 / 構成比	H10 左殻/右殻	H10 最少個体数	H10 %	H11 左殻/右殻	H11 最少個体数	H11 %	H12 左殻/右殻	H12 最少個体数	H12 %	H13 左殻/右殻	H13 最少個体数	H13 %
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		6	5.56		5	4.67		12	10.62		7	7.95
	カワニナ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		2	1.87		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		0	0		1	0.93		3	2.65		1	1.14
	ヘナタリ		0	0		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		3	2.78		1	0.93		2	1.77		0	0
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	アカニシ		1	0.93		1	0.93		0	0		1	1.14
	レイシ		0	0		0	0		0	0		1	1.14
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		1	0.93		0	0		0	0
	小計		10	9.27		14	13.05		17	15.04		10	11.37
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	21/9	21	19.44	17/14	17	15.89	15/6	15	13.27	21/8	21	23.86
	イシガイ		0	0	0/1	1	0.93		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	3/5	5	4.63	3/10	10	9.35	6/8	8	7.08	7/9	9	10.23
	ハマグリ	68/64	68	62.96	57/54	57	53.27	69/57	69	61.06	43/43	43	48.46
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0	0/1	1	0.93		0	0		0	0
	シオフキ	1/0	1	0.93	0/2	2	1.87		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0	2/1	2	1.87		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	3/2	3	2.78	3/3	3	2.80	4/3	4	3.54	5/1	5	5.68
	小計		98	90.74		93	86.91		96	84.95		78	88.63
	総計		108	100.01		107	99.96		113	99.99		88	100.00

種名	ブロック番号 / 構成比	H14			H15			H16			H17		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0		0	0		0	0
	キサゴ		1	1.11		0	0		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	タニシ科		2	2.22		3	4.84		10	12.82		9	10.23
	カワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	チリメンカワニナ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ		1	1.11		0	0		0	0		0	0
	イボウミニナ		5	5.56		5	8.06		5	6.41		7	7.95
	ヘナタリ		1	1.11		0	0		0	0		0	0
	フトヘナタリ		1	1.11		0	0		1	1.28		1	1.14
	カワアイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アカニシ		3	3.33		2	3.23		1	1.28		3	3.41
	レイシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	シワホラダマシ		0	0		0	0		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0		0	0		1	1.14
	オカミミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	小計		14	15.55		10	16.13		17	21.79		21	23.87
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マガキ	22/4	22	24.44	8/3	8	12.90	9/3	9	11.54	8/3	8	9.09
	イシガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ	0/1	1	1.11		0	0		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	12/9	12	13.33	5/14	14	22.58	10/8	10	12.82	11/15	15	17.05
	ハマグリ	34/33	34	37.78	28/23	28	45.16	31/35	35	44.87	40/23	40	45.45
	カガミガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0	0/1	1	1.61		0	0		0	0
	シオフキ	1/0	1	1.11		0	0	0/1	1	1.28		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0		0	0		0	0
	オオノガイ	6/2	6	6.67	1/0	1	1.61	6/16	6	7.69	4/4	4	4.55
	小計		76	84.44		52	83.86		61	78.20		67	76.14
	総計		90	99.99		62	99.99		78	99.99		88	100.01

種名	ブロック番号 / 構成比	H18			H19		
		左殻/右殻	最少個体数	%	左殻/右殻	最少個体数	%
腹足綱	ヒメコザラ		0	0		0	0
	キサゴ		0	0		0	0
	サンショウスガイ		0	0		0	0
	アマガイ		0	0		0	0
	オオタニシ		0	0		0	0
	マルタニシ		0	0		0	0
	タニシ科		3	3.23		1	1.45
	カワニナ		1	1.08		1	1.45
	チリメンカワニナ		0	0		0	0
	ウミニナ		0	0		0	0
	イボウミニナ		4	4.30		4	5.80
	ヘナタリ		0	0		0	0
	フトヘナタリ		2	2.15		2	2.90
	カワアイ		0	0		0	0
	ウミニナ科		0	0		0	0
	ツメタガイ		0	0		0	0
	アカニシ		2	2.15		2	2.90
	レイシ		0	0		0	0
	ツワホラダマシ		0	0		0	0
	アラムシロ		0	0		0	0
	オカミミガイ		0	0		0	0
	小計		12	12.91		10	14.50
斧足綱	サルボウ		0	0		0	0
	マガキ	32/21	32	34.41	23/14	23	33.33
	イシガイ		0	0		0	0
	ウネナシトマヤガイ		0	0		0	0
	ヤマトシジミ	14/15	15	16.13	13/10	13	18.84
	ハマグリ	30/14	30	32.26	17/7	17	24.64
	カガミガイ		0	0		0	0
	オキシジミ		0	0	0/1	1	1.45
	シオフキ		0	0		0	0
	ムラサキガイ		0	0		0	0
	サラガイ		0	0		0	0
	マテガイ		0	0		0	0
	オオノガイ	3/4	4	4.30	5/1	5	7.25
	小計		81	87.10		59	85.51
	総計		93	100.01		69	100.01

第5表　貝層類型と時期の関係

時期　類型	A	B	C	D	E	F
朝日式期			B7			
貝田町式期	C1	F1	B4	A9.A16.A20. B1.B2.B5. B6	A8.A18	A7.A17.B3. F2.F3.H15. H16.H17.H18. H19
貝田町～ 高蔵式期			A4	A5.A12.A14		A6.A13
高蔵式期	D1.D2.E1. E2.E3.G2		H4	A1.A2.A3. H1.H2.H3. H5.H6.H8. H10.H11.H12		G1.H7.H9. H13.H14

34種のうち腹足綱（巻貝）は21種みられ62%を占めるが、個体数は少なく、G1の53%、H7の30%を除き、他はすべて全体の24%以下である。これに対し斧足綱（二枚貝）は13種で38%にすぎないが、個体数においてはG1・H7を除き、圧倒的に腹足綱を上回っている。

そのなかでももっとも多いのはハマグリであり、発育のよい大型品が多い。これに次いで多いのはマガキ・ヤマトシジミ・および腹足綱のタニシ類である。

このタニシ類（オオタニシ・マルタニシ）と、カワニナ・チリメンカワニナ・カワシンジュガイ・イシガイの6種が淡水産で、ヤマトシジミは汽水産であるが、他はすべて鹹水産である。そしてこれら鹹水産貝類のうちでも主体をなすハマグリ・マガキは、典型的な内湾の砂質～砂泥質底に棲む種類であり、他の多くの種類も同様である。そのなかにあってごく少量ではあるが、ヨメガカサ・ヒメコザラ・サザエ・サンショウスガイ・アマオブネ・アマガイ・イボニシ・レイシ・シワホラダマシ・イトマキボラ？などの岩礁性貝類も含まれることは、後に記す少量のウニ類とともに注目されることである。

これらの貝類の構成比からみると、貝層は次の6群に大別される。

A．ほぼマガキのみの貝層

B．マガキ主体の貝層

C．ほぼハマグリのみの貝層

D．ハマグリ主体の貝層

E．ヤマトシジミ主体で、ハマグリの比重も高い貝層

F．単独優先種をもたない貝層

Fで多いのはマガキ・ハマグリ・ヤマトシジミなどであるが、稀にタニシ類・オオノガイの多い場合もある。

そしてこれらと時期の関係を整理すると、**第5表**のとおりである。なお個体の絶対数の少ないA10・A11・A15・C2については、省いて検討することにする。

第6表　微小貝種名一覧表

A．陸産	
1．ケシガイ科ニホンケシガイ	*Carychium nipponense* Pilsbry & Hirase
2．キバサナギガイ科スナガイ	*Gastrocopla (Sinalbinula) armigerella* Reinhardet
3．キセルガイ科	*Clausiliidae sp.*
4．オカチョウジガイ科オカチョウジガイ	*Allopeas clavulinum kyotoensis* Pilsbry & Hirase
5．オカチョウジガイ科ホソオカチョウジガイ？	*Allopeas pyrgula* Schmacker & Boettger
6．コハクガイ科ヒメコハクガイ	*Hawaiia minuscula* Reinhardet
7．ベッコウマイマイ科ヒメベッコウガイ	*Discoconulus sinapidium* Reinhardet
8．ベッコウマイマイ科	Helicarionidae sp.
B．淡水産	
1．ヒラマキガイ科ヒラマキミズマイマイ	*Cyraulus heimantium* Westerlund
2．ヒラマキガイ科ヒラマキガイモドキ	*Polypylis hemisphaerula* Benson
C．汽水産	
1．ミズゴマツボ科ミズゴマツボ	*Stenothyra glabra* A. Adams
2．カワサンショウガイ科ムシヤドリカワサンショウガイ？	*Angustassiminea parasitologica* Kuroda

これによれば、朝日式期のマガキ主体の貝層から始まり、貝田町式期にはハマグリ主体の貝層が出現し、同時にヤマトシジミ主体の貝層や、単独優先種をもたない貝層が出現する。これらをさらに巨視的にみれば、マガキに加えてハマグリおよびヤマトシジミ・タニシ類など汽水・淡水産貝類の増加傾向があるとみなされる。そしてこれらの諸類型が並存した状態で、本遺跡の貝層は消滅している。ただし朝日式期の貝層資料が他時期に比べて少ないことも、留意しておくべきであろう。

4．微小貝と貝層の堆積環境

前項に記した貝類の他に、微小貝も多数検出されている。前者は主として食料資源、後者は主として堆積環境の研究上重要である。なおこれらの微小貝について前年度には報告していないので、本年度分とあわせて報告することにする。

検出された微小貝は12種である（**第6～8表、写真3**）。淡水・汽水産微小貝も含まれているが、大部分は陸産微小貝である。堆積環境の研究上特に検討を加えたいのは、この陸産微小貝である。

まず第8表をみてみると、A・B・H群に対し、C～G群ではほとんど陸産微小貝は検出されていない。第1表に記されているように、これらはほとんど河道における水中堆積層中資料であり、発掘現場での観察の正しさを確認することができた。そして第7表においてもA15～22では検出されていない。このうちA20～22についても当初より水中堆積と

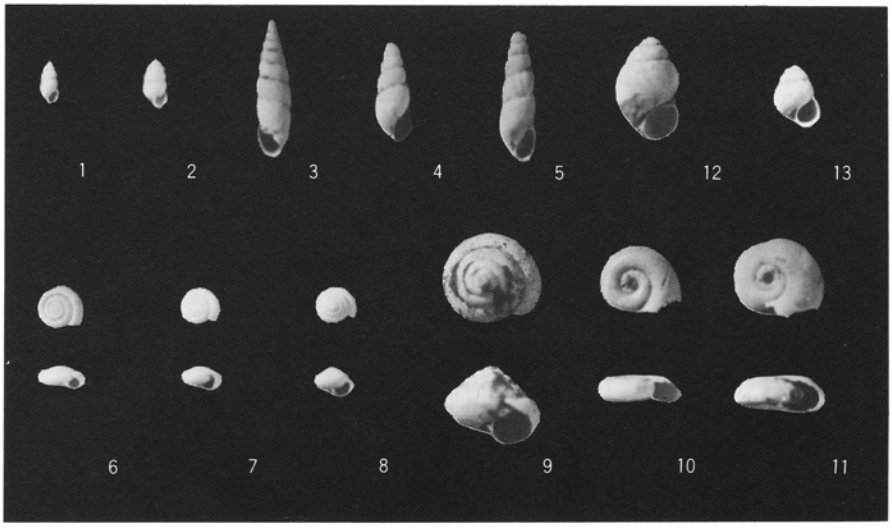


写真３　微小貝（３のみ2.5倍、他は５倍）
１：ニホンケシガイ、２：スナガイ、３：キセルガイ科、４：オカチョウジガイ、５：ホソオカチョウジガイ？、６：ヒメコハクガイ、７：ヒメベッコウガイ、８・９：ベッコウマイマイ科、10：ヒラマキミズマイマイ、11：ヒラマキガイモドキ、12：ミズゴマツボ、13：ムシヤドリカワザンショウガイ．

みられていたのであり、陸産微小貝が堆積環境の研究上きわめて有効であることが分かる。

またその含有率にも差があり、さらに詳細な検討も可能である（**第９表**）。ただしこれは総合的に行われるべきであり、ここでは可能性を指摘するに留めたい。

陸産微小貝８種のうち主体を占めるのは、オカチョウジガイとヒメコハクガイである。前者は人家庭園の地表、後者は平地の准木の根元や落葉下に棲む種類であり、貝層形成期の環境復元に示唆する点が多いのである。

５．魚類

魚類についても、前年度分を本年度分とあわせて報告することとする。

検出された魚類は16種である（**第10･11表、写真４**）。それらはニシン科（多くはマイワシであろう、上野輝弥先生御教示）などの海産魚類の他に、ウナギ・ドジョウ科・フナ属などの淡水産魚類も、かなり含まれていることに大きな特徴がみとめられる。

水田の拡大に伴って哺乳類の生息域が後退し、縄文時代のようにはシカやイノシシなどによる動物質蛋白の確保が難しくなり、淡水産魚類の比重が高まってきたのであろう。北集落環濠中に検出されたヤナは、このような新しい農村型漁業を典型的に示すものである。

第７表　ブロック別微小貝構成比一覧表（ただしA11・17・20、C１・２、D２、E１～３、F１、H19では検出なし）

種名			ブロック番号 / 構成比	A１		A２		A３		A４		A５	
				個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ		4	44.44	1	20.00	11	27.50	0	0	0	0
		スナガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ		0	0	0	0	1	2.50	0	0	14	25.00
		ホソオカチョウジガイ？		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ		5	55.56	4	80.00	20	50.00	18	90.00	42	75.00
		ヒメベッコウガイ		0	0	0	0	8	20.00	2	10.00	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計		9	100.00	5	100.00	40	100.00	20	100.00	56	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ		0		0		1		0		0	
		ヒラマキガイモドキ		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		1		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ		0		0		0		0		0	
		ムシヤドリカワザンショウガイ？		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		0		0		0	
	不　明			0		0		1		0		2	
	総　計			9		5		42		20		58	
斧足綱	不　明			0		0		0		0		0	

種名			ブロック番号 / 構成比	A６		A７		A８		A９		A10	
				個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ		0	0	0	0	0	0	1	2.08	0	0
		スナガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ		1	33.33	2	50.00	0	0	14	29.17	0	0
		ホリオカチョウジガイ？		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ		2	66.67	1	25.00	1	100.00	30	62.50	0	0
		ヒメベッコウガイ		0	0	1	25.00	0	0	2	4.17	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明		0	0	0	0	0	0	1	2.08	0	0
		小　計		3	100.00	4	100.00	1	100.00	48	100.00	0	0
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ		0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ		0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？		0		0		0		1		0	
		小　計		0		0		0		1		0	
	不　明			7		2		0		7		5	
	総　計			10		6		1		56		5	
斧足綱	不　明			0		0		0		0		0	

種名			ブロック番号 / 構成比	A12		A13		A14		A15		A16	
				個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ		25	8.50	0	0	4	13.79	0	0	0	0
		スナガイ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ		11	3.74	3	23.08	2	6.90	0	0	1	100.00
		ホリオカチョウジガイ？		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ		237	80.61	9	69.23	21	72.41	3	100.00	0	0
		ヒメベッコウガイ		21	7.14	1	7.69	2	6.90	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計		294	99.99	13	100.00	29	100.00	3	100.00	1	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ		1		0		1		0		0	
		ヒラマキガイモドキ		0		0		0		0		0	
		小　計		1		0		1		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ		0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？		0		0		0		0		0	
		小　計		0		0		0		0		0	
	不　明			3		7		4		1		2	
	総　計			298		20		34		4		3	
斧足綱	不　明			0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	A18		A19		A21		A22		B 1	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6.25
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	0	0	0	0	0	0	2	66.67	8	25.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	0	0	0	0	0	0	1	33.33	16	50.00
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3.13
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	5	15.63
		小　計	0	0	0	0	0	0	3	100.00	32	100.01
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		2		1		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		2		1		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
		不　明	0		9		1		35		5	
		総　計	3		9		3		39		37	
斧足綱		不　明	3		0		0		ℓ5 r3		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	B 2		B 3		B 4		B 5		B 6	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	1	6.67	1	3.70	2	6.45	0	0	0	0
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	1	3.22	0	0	1	25.00
		オカチョウジガイ	5	33.33	9	33.33	6	19.35	3	42.86	1	25.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	7	46.67	17	62.96	15	48.39	4	57.14	2	50.00
		ヒメベッコウガイ	2	13.33	0	0	5	16.13	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	2	6.45	0	0	0	0
		小　計	15	100.00	27	99.99	31	99.99	7	100.00	4	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
		不　明	0		1		0		3		1	
		総　計	15		28		31		10		5	
斧足綱		不　明	0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	B 7		D 1		D 2		F 2		F 3	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	4	36.36
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	0	0	1	100.00	0	0	0	0	0	0
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	1	100.00	0	0	0	0	1	100.00	7	63.64
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	1	100.00	1	100.00	0	0	1	100.00	11	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	1		0		0		0		0	
		小　計	1		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		4		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		7		0		0		0	
		小　計	0		11		0		0		0	
		不　明	2		16		8		1		1	
		総　計	4		28		8		2		12	
斧足綱		不　明	0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	G 1		G 2		H 1		H 2		H 3	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	1	33.33	0	0	0	0	0	0	1	1.03
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	1	1.05	1	1.03
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	1	33.33	0	0	21	35.00	28	29.47	18	18.56
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	1	50.00	2	3.33	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	1	33.33	1	50.00	37	61.67	60	63.16	76	78.35
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	4	4.21	1	1.03
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	2	2.11	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	3	99.99	2	100.00	60	100.00	95	100.00	97	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ヒラマキガイモドキ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
	汽水産	ミズゴマツボ	6	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ムシラドリカワザンショウガイ？	1	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	7	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		不　明	76		0		1		8		2	
		総　計	86		2		61		103		99	
斧足綱		不　明	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−

種名		ブロック番号 / 構成比	H4		H 5		H 6		H 7		H 8	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		スナガイ	0	0	0	0	2	1.31	1	1.14	2	8.00
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	1	1.14	0	0
		オカチョウジガイ	13	23.21	43	44.79	66	43.14	28	31.82	4	16.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	41	73.21	50	52.08	84	54.90	55	62.50	17	68.00
		ヒメベッコウガイ	2	3.57	3	3.13	1	0.65	3	3.41	2	8.00
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	56	99.99	96	100.00	153	100.00	88	100.01	25	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ヒラマキガイモドキ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
	汽水産	ミズゴマツボ	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		小　計	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−
		不　明	3		6		4		3		1	
		総　計	59		102		157		91		26	
斧足綱		不　明	0	−	0	−	0	−	0	−	0	−

種名		ブロック番号 / 構成比	H 9		H10		H11		H12		H13	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	3	1.22	2	2.56	1	20.00	0	0	2	7.14
		スナガイ	25	10.20	0	0	0	0	1	2.17	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	97	39.59	49	62.82	1	20.00	13	28.26	14	50.00
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	108	44.08	23	29.49	3	60.00	32	69.57	12	42.86
		ヒメベッコウガイ	8	3.27	4	5.13	0	0	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	4	1.63	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	245	99.99	78	100.00	5	100.00	46	100.00	28	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		1		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		1		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
		不　明	13		1		2		0		0	
		総　計	258		79		8		46		28	
斧足綱		不　明	0		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	H14		H15		H16		H17		H18	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	1	25.00	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	4	57.14	1	100.00	1	100.00	1	25.00	29	61.70
		ホリオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		ヒメコハクガイ	3	42.86	0	0	0	0	1	25.00	18	38.30
		ヒメベッコウガイ	0	0	0	0	0	0	1	25.00	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小　計	7	100.00	1	100.00	1	100.00	4	100.00	47	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	0		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		0		0		0	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		0		0		0		0	
		小　計	0		0		0		0		0	
	不　明		0		0		1		0		2	
	総　計		7		1		2		4		49	
斧足綱	不　明		0		0		0		0		0	

第８表　地区別微小貝構成比一覧表（ただしＣ・Ｅ群では検出なし）

種名		ブロック番号 / 構成比	A		B		D		F		G	
			個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	46	8.70	6	5.13	0	0	4	33.33	1	20.00
		スナガイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		キセルガイ科の一種	0	0	2	1.71	0	0	0	0	0	0
		オカチョウジガイ	51	9.64	32	27.35	1	100.00	0	0	1	20.00
		ホソオカチョウジガイ？	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20.00
		ヒメコハクガイ	394	74.48	62	52.99	0	0	8	66.67	2	40.00
		ヒメベッコウガイ	37	6.99	8	6.84	0	0	0	0	0	0
		ベッコウマイマイ科の一種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不明	1	0.20	7	5.98	0	0	0	0	0	0
		小　計	529	100.01	117	100.00	1	100.00	12	100.00	5	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	6		0		0		0		0	
		ヒラマキガイモドキ	0		1		0		0		0	
		小　計	6		1		0		0		0	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		0		4		0		6	
		ムシヤドリカワザンショウガイ？	1		0		7		0		1	
		小　計	1		0		11		0		7	
	不　明		89		12		24		2		76	
	総　計		625		130		36		14		88	
斧足綱	不　明		ℓ5　r3		0		0		0		0	

種名		ブロック番号 / 構成比	H		総計	
			個体数	%	個体数	%
腹足綱	陸産	ニホンケシガイ	9	0.80	66	3.67
		スナガイ	34	3.00	34	1.89
		キセルガイ科の一種	1	0.09	3	0.17
		オカチョウジガイ	431	38.07	516	28.73
		ホリオカチョウジガイ？	2	0.18	3	0.17
		ヒメコハクガイ	620	54.77	1086	60.47
		ヒメベッコウガイ	29	2.56	74	4.12
		ベッコウマイマイ科の一種	6	0.53	6	0.33
		不明	0	0	8	0.45
		小　計	1132	100.00	1796	100.00
	淡水産	ヒラマキミズマイマイ	1		7	
		ヒラマキガイモドキ	0		1	
		小　計	1		8	
	汽水産	ミズゴマツボ	0		10	
		ムシラドリカワザンショウガイ？	0		9	
		小　計	0		19	
	不　明		47		250	
	総　計		1180		2073	
斧足綱	不　明		0		ℓ5　r3	

第９表　陸産微小貝の含有率（1000㎤当りの個体数）

ブロック番号	体積(㎤)	個体数	含有率	ブロック番号	体積(㎤)	個体数	含有率
A 1	18000	9	0.50	C 2	4500	0	0
A 2	4500	5	1.11	D 1	9000	1	0.11
A 3	4500	40	8.89	D 2	9000	0	0
A 4	18000	20	1.11	E 1	4500	0	0
A 5	9000	56	6.22	E 2	9000	0	0
A 6	4500	3	0.67	E 3	9000	0	0
A 7	4500	4	0.89	F 1	4500	0	0
A 8	3000	1	0.33	F 2	4500	1	0.22
A 9	9000	48	5.33	F 3	4500	11	2.44
A10	4500	0	0	G 1	7200	3	0.42
A11	1800	0	0	G 2	7200	2	0.28
A12	9000	294	32.67	H 1	9000	60	6.67
A13	4500	13	2.89	H 2	9000	95	10.56
A14	4500	29	6.44	H 3	4500	97	21.56
A15	4500	3	0.67	H 4	9000	56	6.22
A16	4500	1	0.22	H 5	9000	96	10.67
A17	2700	0	0	H 6	9000	153	17.00
A18	2700	0	0	H 7	3600	88	24.44
A19	2700	0	0	H 8	3600	25	6.94
A20	7200	0	0	H 9	4500	245	54.44
A21	9000	0	0	H10	4500	78	17.33
A22	9000	3	0.33	H11	4500	5	1.11
B 1	9000	32	3.56	H12	9000	46	5.11
B 2	4500	15	3.33	H13	4500	28	6.22
B 3	7200	27	3.75	H14	4500	7	1.56
B 4	4500	31	6.89	H15	4500	1	0.22
B 5	4500	7	1.56	H16	4500	1	0.22
B 6	9000	4	0.44	H17	2700	4	1.48
B 7	9000	1	0.11	H18	7200	47	6.53
C 1	4500	0	0	H19	4500	0	0

6．その他の動物遺体

真珠：H３（高蔵式期）より１点検出された。直径0.9㎜（写真４－20）。

フジツボ類：各時期のブロックより検出されているが、いずれも細片のみである。

カニ類：A５・８、E２（貝田町～高蔵式期）より爪が数点検出されている。

ウニ類：各時期のブロックより検出されているが、その種名は次の３種と不明種である。

ラッパウニ科アカウニ　*Pseudocentrotus depressus* A.AGASSIZ

オオバフンウニ科バフンウニ　*Hemicentrotus pulcherrimus* A.AGASSIZ

ナガウニ科ムラサキウニ　*Anthocidaris crassispina* A.AGASSIZ

その部位・数量は**第12表**に示すとおりであり、ごく少量である。

第10表　魚類種名一覧表

A．軟骨魚綱　CHONDRICHTHYES

1．サメ目	Pleurotremata sp.

B．硬骨魚綱　OSTEICHTHYES

1．ニシン科	Clupeidae sp.
2．アユ科アユ	*Plecoglossus altivelis* Temminck et Schllegel
3．ウグイ属	Tribolodon sp.
4．フナ属	Carassius sp.
5．コイ属コイ	*Cyprinus carpio* Linnaeus
6．ドジョウ科	Cobitididae sp.
7．ウナギ科ウナギ	*Anguilla japonica* Temminck et Schlegel
8．スズキ科スズキ	*Lateolabrax japonicus* Cuvier
9．キス科	Sillaginidae sp.
10．アジ科	Carangidae sp.
11．サバ科	Scombridae sp.
12．タイ科クロダイ	*Acanthopagrus schlegeli* Bleeker
13．ハゼ科	Gobiidae sp.
14．カレイ科	Pleuronnectidae sp.
15．不明	

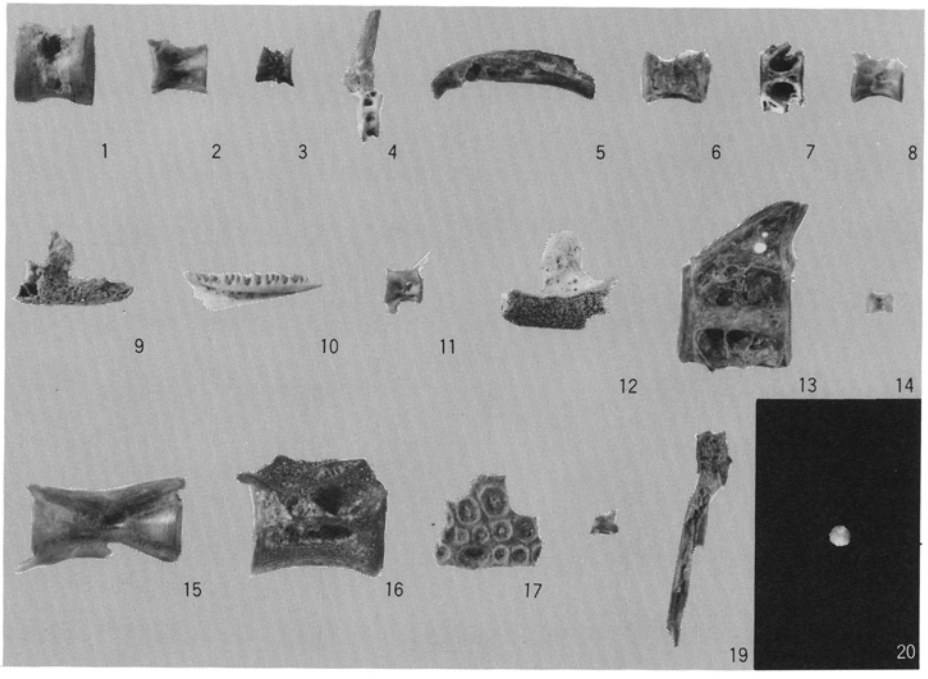


写真4　魚骨他（7・12：実大、4：2.5倍、他は5倍）

1：サメ目脊椎骨、2：ニシン科脊椎骨、3：アユ脊椎骨、4：ウグイ属脊椎骨、5：フナ属下顎歯骨r、6：同脊椎骨、7：コイ脊椎骨、8：ドジョウ科脊椎骨、9：ウナギ上顎骨r、10：同下顎歯骨l、11：同脊椎骨、12：スズキ前上顎骨、13：同脊椎骨、14：キス科脊椎骨、15：アジ科脊椎骨、16：サバ科脊椎骨、17：クロダイ前上顎骨r、18：ハゼ科脊椎骨、19：カレイ科脊椎骨、20：真珠．

第11表　ブロック別魚骨数量表

種　名	番号 / 部位	A1	A4	A5	A6	A8	A9	A10	A11	A12	A13	A14	A15	A16	A22	小計	B1	B2	B3	B4	B5
サメ目	脊椎骨						1						2			3				1	
ニシン科	脊椎骨		1	1			3			1	2	2	1		2	13		1	4		2
アユ	脊椎骨																			1	1
ウグイ属	脊椎骨						1									1					
フナ属	下顎歯骨 r				1											1					
	脊椎骨	1		2	6		5	1		2		2	1			20		3	4	2	1
コイ	脊椎骨			1				1								2					
ドジョウ科	脊椎骨			1			1									2	2		4		
ウナギ	上顎骨 r				1											1	1				
	下顎歯骨 l																				
	下顎歯骨 r																				
	脊椎骨			2	1		6			1	3		1			14	4	2	5	1	
スズキ	前上顎骨 l							1								1					
	脊椎骨							1	1					1		3					
キス科	脊椎骨						1									1					
アジ科	脊椎骨			1						1	1					3					
サバ科	脊椎骨				1											1					
クロダイ	前上顎骨 r																				
ハゼ科	脊椎骨																				
カレイ科	脊椎骨											1				1					
不　明	咽頭骨 l										2					2		1			
	咽頭骨 r							1								1	1		1		
	脊椎骨	2		6		1	5	2	0	0	2		2		1	21	1	3	7	1	7

種　名	番号 / 部位	B6	小計	C1	C2	小計	D2	小計	E1	E2	小計	F1	F2	F3	小計	H1	H2	H3	H4	H5	H6
サメ目	脊椎骨	1	2																		
ニシン科	脊椎骨	5	12				1	1				5	1		6	4	4	4	8	13	4
アユ	脊椎骨		1													1		1	1		
ウグイ属	脊椎骨																				
フナ属	下顎歯骨 r																				
	脊椎骨	2	12									1			1	4	12	10	5	4	3
コイ	脊椎骨				1	1										1	2		1		
ドジョウ科	脊椎骨	1	7	1		1	3	3								2	8	2	1	1	3
ウナギ	上顎骨 r		1																1		
	下顎歯骨 l																		1		
	下顎歯骨 r																				
	脊椎骨	3	15		1	1			3	1	4	2	6		8	4	17	8	7	9	6
スズキ	前上顎骨 l																				
	脊椎骨	1	1													1					
キス科	脊椎骨																				
アジ科	脊椎骨																				
サバ科	脊椎骨																				
クロダイ	前上顎骨 r															1	1				
ハゼ科	脊椎骨																				
カレイ科	脊椎骨																				
不　明	咽頭骨 l	1	2													1	2	1	1		1
	咽頭骨 r		2														1	2	1	1	
	脊椎骨	6	25		1	1	2	2				1	4	1	6	2	6	11	9	5	7

種　名	番号 部位	H７	H８	H９	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	小計	総計
サメ目	脊椎骨										1			1	6
ニシン科	脊椎骨	3		3				1		1	2			47	79
アユ	脊椎骨													3	4
ウグイ属	脊椎骨						1							1	2
フナ属	下顎歯骨ｒ														1
	脊椎骨	1		2	1								2	44	77
コイ	脊椎骨	1												5	8
ドジョウ科	脊椎骨	2		1	1			1						22	35
ウナギ	上顎骨ｒ	1												2	4
	下顎歯骨ｌ													1	1
	下顎歯骨ｒ	1												1	1
	脊椎骨	198		5	8		1	1	1		1		6	272	314
スズキ	前上顎骨ｌ														1
	脊椎骨			1								1	1	4	8
キス科	脊椎骨														1
アジ科	脊椎骨														3
サバ科	脊椎骨														1
クロダイ	前上顎骨ｒ													2	2
ハゼ科	脊椎骨	1												1	1
カレイ科	脊椎骨														1
不　明	咽頭骨ｌ													6	10
	咽頭骨ｒ	1												6	9
	脊椎骨	9	1	2	3	2	1	2	1	1	1	1	3	67	122

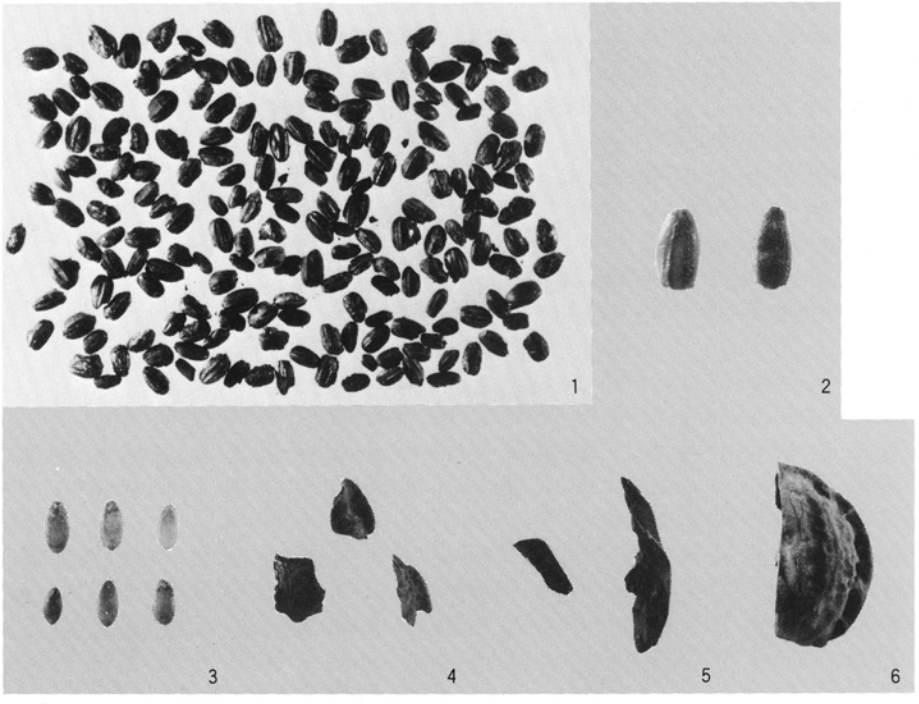


写真５　植物遺体（実大）

１：炭化米、２：ヒョウタン類、３：ウリ類、４～６：オニグルミ．

魚鱗：各時期のブロックより検出されているが、いずれも細片のみであり、種の同定は困難である。

カエル類：各時期のブロックより、脊椎骨が少量検出されている。

ヘビ類：各時期のブロックより、脊椎骨が少量検出されている。

鳥・獣類：各時期のブロックより検出されているが、いずれも細片のみで、種の同定は困難である。

7．植物遺体

炭化米：ほぼ全ブロックにわたって、多量に検出されている（**第13表**）。いずれも短粒型である。（**写真5－1**）。

豆類：各時期のブロックより、種子が少量検出されている。

ヒョウタン類：各時期のブロックより、種子および果皮の細片が少量検出されている（同2）。

ウリ類：各時期のブロックより、種子が少量検出されている（同3）。

オニグルミ：A20、D1（同4）、D2（同5）、G1（同6）などから、核破片が少量検出されている（貝田町～高蔵式期）。

以上の他に、若干の不明堅果類と多量の微細種子も検出されている。後者には水田雑草などが多量に含まれている可能性が高い。炭化米をはじめとするこれら各種の植物遺体は、それぞれの専門家の調査に委ねる必要がある。

8．おわりに

濃尾平野における弥生時代の代表的な遺跡である朝日遺跡の貝層には、縄文時代のそれとは異なるいくつかの特徴のあることを、前年度の報告に記しておいた。今年度の調査においても、それらの特徴をさらに明確に確認することができた。

その第1は人工遺物があまり含まれないこと、第2は埋葬人骨がみられないこと、第3は獣骨がきわめて少ないことである。

これらの背景には、単に方形周溝墓が発達したばかりでなく、貝塚が霊の送り場から単なるゴミ捨て場へと変質しつつあることが示唆されている。また水田の発達による平野部における狩猟活動の衰退も示唆されている。汽水・淡水産貝類や魚類の比重の増加やヤナの存在などは、このような新時代に適応した農村型漁業によって、動物質蛋白の欠乏を補おうとする姿勢の反映である。

第12表　ウニ類数量表（単位 g、＋印は微量を示す）

種名＼ブロック名	部位	A 5	A 8	A 9	A10	A11	A12	A13	A14	A15	A21	A22	B 3
アカウニ	殻板						0.02						
	棘						＋		0.01				
バフンウニ	殻板				0.02	＋		0.04				0.06	
ムラサキウニ	殻板	0.03	0.12	0.07					0.02	0.10		0.13	0.02
	棘		0.03	0.01						0.01	0.01		
不明	殻板						0.01	0.01			0.04	0.02	0.01
	棘											1.15	
同定不可	殻板							0.01	0.01				

種名＼ブロック名	部位	B 4	B 6	B 7	D 1	D 2	G 1	H 3	H 5	H 7	H 8	H 9
アカウニ	殻板						0.04	0.02				
	棘		＋									
バフンウニ	殻板	0.01	0.01	0.01								
ムラサキウニ	殻板				0.04	0.03	0.06					
	棘						0.01					
不明	殻板				0.01				0.02	0.01		0.01
	棘											
同定不可	殻板	＋									＋	

第13表　炭化米数量表

残存状態＼番号	完形	破片	残存状態＼番号	完形	破片	残存状態＼番号	完形	破片
A 1	0	○	A20	4	○	G 2	2	○
A 2	0	○	A21	0	○	H 1	19	○
A 3	0	○	A22	2	○	H 2	25	○
A 4	2	○	B 1	1	○	H 3	5	○
A 5	8	○	B 2	8	○	H 4	9	○
A 6	7	○	B 3	6	○	H 5	31	○
A 7	33	○	B 4	2	○	H 6	49	○
A 8	14	○	B 5	29	○	H 7	2	○
A 9	14	○	B 6	58	○	H 8	3	○
A10	42	○	B 7	212	○	H 9	7	○
A11	13	○	C 1	0	○	H10	23	○
A12	15	○	C 2	1		H11	39	○
A13	32	○	D 1	5	○	H12	4	○
A14	24	○	D 2	3	○	H13	7	○
A15	22	○	E 3	1		H14	2	○
A16	1	○	F 1	5	○	H15	1	○
A17	2	○	F 2	3	○	H16	1	○
A18	1		F 3	2	○	H17	2	○
A19	1	○	G 1	21	○	H18	6	○

ただしこのような本遺跡の生活の復元に当っては、小体積のブロック・サンプリングでは把握しがたい獣骨・魚骨の資料の問題もある。またこれらの縄文時代の延長上に位置づけられる食料とは別に、コメなどの弥生時代を特徴づける栽培植物などもさらに重要であるが、これらの検出には、貝層以外でのブロック・サンプリングも重要な作業である。

そして最後に今後の課題として、貝層内の遺物の分析ばかりでなく、住居址群との関係において、貝層の形成プロセスを検討する必要のあることを強調しておきたい。

謝　辞

本稿をまとめるに当っては多くの方々の御教示と御協力を仰いだが、特に下記の方々に負うところが大である。末尾ながら御名前を銘記して深謝の意を表する次第である。

上野輝弥（国立科学博物館）、山田耕治・石黒立人・松田　訓（愛知県埋文センター）、久保和士（名古屋大学考古学研究室）

引用文献

渡辺　誠、1987：朝日遺跡61Ｂ区貝層のブロック・サンプリング。愛知県埋蔵文化財センター年報、昭和61年度．87～94頁。名古屋。

勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境

森　勇一

Ⅰ．はじめに

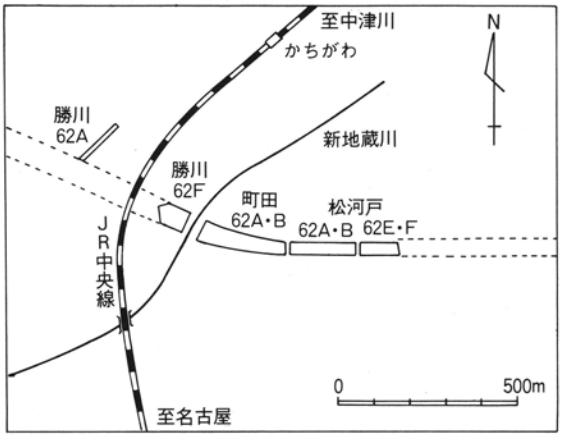
昆虫は、すべての生物群のなかでもっとも多い種類数を誇り、全世界のあらゆる環境に適応して生息している。そのため、昆虫化石（昆虫遺体ともいう）を調べることによって得られる情報はすこぶる多い。

遺跡を取りまく古環境の復元にあたって、昆虫化石は微化石以上に重要な役割を果たすことがあるのにもかかわらず、これまでほとんど考古学に寄与することなく、うち捨てられてきた。

今回、愛知県春日井市勝川遺跡周辺の低地性の遺跡を発掘するにあたって、赤塚次郎氏をはじめ現場担当者の協力によって、昆虫化石を計画的、組織的に採集することができた。昆虫化石の出土点数は約4000点（個体数ではなく節片ないし破片数である）に達し、検出された昆虫化石は、まだクリーニングすら行なわれていないものも多く、同定・分類作業も未完成ではあるが、ここにこれまでの調査結果の概要をその第一報として報告する。

研究を進めるにあたり、大阪市立自然史博物館の宮武頼夫・那須孝悌の両氏には、博物館所蔵の現生昆虫標本を借用させていただき、文献の手配をはじめ有益な助言をいただいた。また、岡崎国立共同研究機構・生理学研究所の太平仁夫博士には、コメツキムシの同定と、昆虫化石の電子顕微鏡下における検鏡の便宜を計っていただき、合わせて写真撮影





第１図　遺跡位置図

をしていただいた。野尻湖昆虫グループの春沢圭太郎・桂孝次郎の両氏には、糞虫及びネクイハムシの同定や生態について、国立科学博物館の藤山家徳博士には、ヒメカンショコガネの同定にあたってご教示いただいた。

昆虫化石の抽出・分類作業にあたっては、愛知教育大学研究生の伊藤隆彦・永草康次両君及び整理・現場作業員の皆さんに大変お世話になった。これらの方々に心よりお礼申し上げる。

II．層位と検出方法

A．層　位

昆虫化石を検出した遺跡の層位とその相対年代は、以下のとおりである。相対年代はいずれも土器編年であり、一部放射性炭素年代値を加味した。

勝川遺跡62Ｆ区の弥生時代中期の試料は、木製品の生産に関連した貯蔵施設及びその周辺の堆積物、弥生時代後期～平安時代までの試料は、すべて庄内川水系に属する旧地蔵川の自然流路ないし溝状遺構内の堆積物から産したものである。

また、勝川遺跡62Ａ区の試料は、低位段丘（鳥居松面）上に立地した江戸後期の遺構に沿った溝中の堆積物から産した。

松河戸遺跡62Ｅ区とＡ区の縄文時代中期及び後・晩期の試料は、町田遺跡62Ｂ区同様、遺跡の基盤層直上に堆積した泥炭質シルト中のものである。町田遺跡62Ａ・Ｂ区の平安時代及び松河戸遺跡62Ａ区の古墳時代の試料は、それぞれその時代の包含層中から産した。

B．検出方法

発掘現場の進行に合わせて、層序が明確になった時点で、地層断面及びトレンチ穴から分析用試料を採取した。合わせて地層断面図を記入し、試料の採取地点を記録した。

昆虫化石の試料採取地点では、同時により詳細な古環境の復元をめざして、大型植物遺

	勝川遺跡(62Ｆ・62Ａ)	町田遺跡(62Ａ・Ｂ)	松河戸遺跡(62Ａ・62Ｅ)
江戸時代(後期)	灰白色シルト		
平安時代	植物片まじり腐植質シルト	灰白色砂質シルト	
奈良時代	黒灰色シルト		
古墳時代	腐植質シルト		黒灰色シルト質粘土
弥生時代後期	植物片まじり腐植質シルト		
弥生時代中期	黒灰色シルト質粘土		
縄文時代後・晩期			黒灰色泥炭質シルト
縄文時代中期		泥炭質シルト	泥炭質シルト

体と微化石用サンプル（珪藻及び花粉）も採取し、可能な限り、放射性年代測定用の有機物のサンプリングも行なった。

持ち帰った試料は冷暗所に保管し、できるだけ早い期間に主にブロック割り法によって分離し、昆虫化石を検出した。なお、昆虫化石の検出にあたっては、アサヒペンタックス20倍単眼顕微鏡を利用した。昆虫化石が発見されると、土の小片ごと一つずつプラスチックのケースに納め、遺跡名・産出層準・採取年月日のラベルをつけて仮保存した。この際、ケース底部に不織布と脱脂綿をしき、これに50%エチルアルコールをそそいで、乾燥とカビの防止に努めた。

その後、実体顕微鏡下で面相筆を使って、昆虫化石のクリーニングを実施し、同時に周囲の土から新たな部位の検出を行なった。

昆虫化石の同定は、筆者の採集による現生標本及び大阪市立自然史博物館所蔵の標本の各部位と顕微鏡下で比較・検討しながら、一つずつの節片について行なった。

Ⅲ．記載と同定

以下に、同定上及び古環境を考察するうえで重要な若干の種について述べる。

ミヤマカマキリ　*Massicus raddei* (Blessig)〈第２図－４〉

奈良時代（IKK62F、SX04・CD境界ベルト）

右鞘翅（上部を欠く）。全長34.0㎜、最大幅10.8㎜。化石から推定される鞘翅長約37㎜、体長約53㎜。

黒褐～黒色。鞘翅上面に黄灰色の微毛が密生する。翅端はまるく、会合線角付近に短刺を有する。翅端がまるく、鞘翅上半部に黒色の顆粒状の点紋を配しないことで近似種のクワカミキリと、鞘翅が赤褐色を呈しないこと及び鞘翅上に３本の隆起する条線を持たないことでウスバカミキリと区別し、本種と同定した。

暖帯樹林帯のクリ・クヌギ・コナラなどの木に集まり、幼虫はこれらの木のほか、アラカシ・ウバメガシ・キリ・イチジク・クワなどの樹皮の下や材部に住み、食害する。

名のとおり、比較的深山性である。

オオセンチコガネ　♂　*Geotrupes auratus* Motschulsky〈第２図－７〉

弥生時代後期（IKK62F、SX03・D－１）

右前脛節前半部。化石の全長3.5㎜、最大幅1.6㎜。

黒色。４個の鋸歯状の歯（外歯）を有し、裏面に下側を向く数本の突起（ただし本標本

では脱落）があるので、オオセンチコガネと同定した。

第一外歯が突出し、下向きに曲がる特徴からオスの前脛節である。

大型獣たとえばウシやウマ、ヒトなどの糞に集まり、ときに動物の死骸にも来る。やや山地性である。

コブマルエンマコガネ　♀　*Onthophagus atripennis* Waterhouse〈第2図－5〉

弥生時代中期（IKK62F、SX01）

前胸背板。最大幅4.9㎜、縦3.8㎜。

黒色。マルエンマコガネに似るが、現生標本と比較検討の結果、前胸背板上の点刻が小円形で疎であることから、本種と同定した。

前胸背板上にコブ状の隆起を欠くので、♀である。本標本には、食糞生昆虫にしばしば見られるキチン質表面の損耗が認められる。

犬の糞によく集まり、獣や人糞にも来る。

ツヤマルエンマムシ　*Atholus pirithous*（Marseul）

縄文時代中期（IKC62B、黒バンドⅠ下位泥炭）　〈第2図－6〉

右鞘翅。全長2.0㎜。黒色で弱い光沢がある。鞘翅の6条の背条のうち、第1～第4背条は完全、第5背条は基半部を欠き、第6背条はそれより少し長いという特徴を有する。外副肩条、内副肩条は不明瞭で、破線状となる。

鞘翅から推定される体長が約3.6㎜と小型であることと、背条及び肩条の特徴から本種と同定した。

腐敗した動植物や糞に集まり、ウジなどの小動物を捕食する。

オオミズスマシ　*Dineutus orientalis*（Modeer）〈第2図－3〉

奈良時代（IKK62F、SX04）

左鞘翅。全長6.7㎜、最大幅3.2㎜、化石から推定される体長10㎜。

黒色で、金銅色～緑色の金属光沢を呈する。鞘翅側縁部は黄褐色を帯びる。鞘翅上面は、全体に微細な印刻におおわれ、光沢の違いによって縞模様が観察される。鞘翅先端と、鞘翅後部に、黒色の2本の顕著な刺状突起を有すること、鞘翅会合部に縁どりが見られないことから本種と同定した。

ふつう止水域から流れのゆるやかな水域に住む。

イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire〈第2図－9〉

弥生時代後期（IKK62F、SX03・D-1)

前胸背板。最大幅1.3㎜、縦1.0㎜。

光沢を帯びた黒緑色。中央背板上に細かいちり目状のしわが見られる。前角突起が発達し、中央縦溝が不明瞭であることによって、本種と同定した。

ジュンサイ・ヒツジグサ・ヒシ・コウホネなどの浮葉を食害する。また、幼虫がイネ科植物、とくにイネの根を加害することで古くから文献に登場し、有名である。

低地の周辺が開けた池沼、ため池、廃田などに多い。近縁種のガガブタネクイハムシと生態・食性ともに似るが、野外では住み分けがみられ、本種はガガブタネクイハムシより人里に近く、水田付近の水路にふつう。現在は、農薬の影響で個体数が激減した。

イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire〈第2図－10〉

平安時代（IKK62F、SX03)

右鞘翅。全長4.0㎜、最大幅1.5㎜。

やや青味を帯びた緑色で、光沢を有する。点刻は、基部近くではほぼ円形で、翅端に近づくにつれてやや楕円形から長柱状になる。鞘翅は、ガガブタネクイハムシのそれと酷似し、実体顕微鏡下での識別は困難である。鞘翅全体が薄く弱いこと、点刻がやや小型であることなどによって見分けることが可能である。

電子顕微鏡下では、点刻はすり鉢状を呈し、先端部は細まって深い。点刻の直径は、鞘翅上半部では30～40 μm、鞘翅縁辺部の間室には、個体によってわずかに横じわが伴われる。

ガガブタネクイハムシ　*Donacia lenzi* Schonfeldt〈第2図－11〉

弥生時代後期（IKK62F、SX03・D－1）

右鞘翅。全長5.5㎜、最大幅1.5㎜。

黒色で金緑色の光沢がある。

鞘翅には、11条の点刻列が認められる。点刻は、鞘翅上半部及び第9条、第10条では円形だが、他の点刻はやや楕円形を呈する。間室には、実体顕微鏡下においても、細かな横じわが伴われる。

電子顕微鏡下では、点刻は円形ないし楕円形の陥没状を呈し、平底で浅い。点刻の直径は、鞘翅上半部では50～60 μmである。

野尻湖昆虫グループ（1985）によれば、本種はやや丘陵性で、周囲に林を伴う自然度の

高い池や沼に住み、成虫はジュンサイ・ヒツジグサ・コウホネ・ヒルムシロ属などの浮葉を加害し、幼虫はジュンサイの根やヒツジグサの水中茎及び葉を食べるという。

キンイロネクイハムシ　*Donacia japana* Chujo and Goecke〈写真２－３a，b，c〉

奈良時代（IKK62F、SX04・CD境界ベルト）

右鞘翅。全長6.1㎜、最大幅1.7㎜。

金銅色。翅の基部と会合部に沿って、縦長の赤斑が見られる。点刻に伴うしわは明瞭で、深く、斜めにつながる。点刻は粗く、点刻列の配列はやや不規則である。

電子顕微鏡下では、点刻は長円形の陥没状を呈し、平底である。点刻の直径は、鞘翅上半部では50～60μmである。

成虫、幼虫とも挺水植物帯のミクリなどを食害する。

野尻湖昆虫グループ（1985）によれば、低地の、林を伴う開水面の狭い湿地や池沼に生息し、丘陵の水田脇の酸性度の高い小さなため池に見られることもあるという。

ツヤネクイハムシ　*Donacia nitidior*（Nakane）　〈第２図－12〉

奈良時代（IKK62F、SX04・CD境界ベルト）

右鞘翅。全長5.1㎜、最大幅1.3㎜。

暗銅色で、細かな長柱状の点刻を配する。点刻列には浅い横じわを伴い、鞘翅全体に強い光沢がある。翅端部は、やや切断状に終わる。第１間室及び第11間室には希薄な横じわが認められる。

丘陵地、山地の林を伴う小湿地や廃田に多い。成虫は、岸辺に近いところに生える挺水植物帯のスゲ科植物を多く訪れ、イネネクイハムシやガガブタネクイハムシとは明瞭に住み分けている。

科及び属レベルまで同定できた昆虫化石

昆虫の科及び属名	時代	縄文時代			弥生時代		古墳		奈良	平安		江戸
		中期		後・晩期	中期	後期						
	遺跡名	町田	松河戸	松河戸	勝川	勝川	勝川	松河戸	勝川	勝川	町田	勝川
		62B	62E	62A	62F	62F	62F	62A	62F	62F	62B	62A
水生	カワトンボ科 CALOPTERYGIDAE					1	1		1			
水生	ガムシ科 HYDROPHILIDAE				1	1	2	3	5	1		
水生	ゲンゴロウ科 DYTISCIDAE	1	1			2	10	1	24	1		
水生	マメゲンゴロウ属 *Agabus* sp.		43									
水生	ミズスマシ属 *Gyrinus* sp.		2					1	1			
湿地性	ネクイハムシ亜科 DONACIINAE	3	1	1	1	4	2	1	23			
食糞性	エンマコガネ属 *Onthophagus* spp.		7		3	2						2
食糞性	マグソコガネ亜科 APHODIINAE		1		1	1						
地表性	ゴミムシ科 HARPALIDAE	11	35	1	13	23	11	16	26	18	2	37
地表性	アオゴミムシ属 *Chlaenius* spp.	1					5		6			
地表性	ハネカクシ科 STAPHYLINIDAE				1		1					
食植性	コメツキムシ科 ELATERIDAE	6	13						5		1	
食葉性	ハムシ科 CHRYSOMELIDAE		7		1	5	2	1	17	6		
食葉性	オトシブミ科？ ATTELABIDAE					2			1			
食葉性	コガネムシ科 SCARABAEIDAE	24	59*	1	11	16	21	3	58	4	1	384
食葉性	スジコガネ亜科 RUTELINAE		2		3	2		1				12
食葉性	サクラコガネ属 *Anomala* spp.								20	1		
食葉性	ハナムグリ亜科 CETONIINAE	7	3		3				3			2
食葉性	カメムシ科 PENTATOMIDAE						1					
森林性	クワガタムシ科？ LUCANIDAE	1		1					1			
所属不明及び未分類の甲虫目		262	488	9	17	237	13	29	236	8	5	242

＊　雑木林や森林の樹液に集まる昆虫群で大部分が占められる。

種レベルまで同定できた昆虫化石（その1）

昆虫種名	時代	縄文時代			弥生時代		古墳		奈良	平安		江戸
		中期		後・晩期	中期	後期						
	遺跡名	町田	松河戸	松河戸	勝川	勝川	勝川	松河戸	勝川	勝川	町田	勝川
	生態	62B	62E	62A	62F	62F	62F	62A	62F	62F	62B	62A
ハグロトンボ *Calopteryx atrata*	水生 食肉性								W2			
ガムシ *Hydrophilus acuminatus*	水生 食植性				W1	W1 H1 P1	W2 T2 F2		W3 L2	P1	W1	
コガタガムシ *Hydrophilus cashimirensis*	水生 食植性								W1			
コガムシ *Hydrochara affinis*	水生 食植性											W3
ゲンゴロウ *Cybister japonicus*	水生 食肉性				W1				W5 T4 A2	W1		
コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus*	水生 食肉性						W1		W1 H1 B1			
オオミズスマシ *Dineutus orientalis*	水生 食肉性					W1	W2		W5			
ミズスマシ *Gyrinus japonicus*	水生 食肉性	W1	W5									
コミズスマシ？ *Gyrinus curtus*	水生 食肉性				W1							
ガガブタネクイハムシ *Donacia lenzi*	水生 食植性					W6 B1	W2		W20 H1 P4	W4	W1	
イネネクイハムシ *Donacia provosti*	水生 食植性					W10 P3 B1	W2 P2		W8 P2	W19 T1	W7 P1	
キンイロネクイハムシ *Donacia japana*	水生 食植性					W4 P1	W4		W21 P2	W1		
ツヤネクイハムシ *Donacia nitidior*	水生 食植性						W4		W1	W4		
フトネクイハムシ？ *Donacia fukiensis*	水生 食植性			W1								
オオセンチコガネ *Geotrupes auratus*	地表性 食糞性					L1						
コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*	地表性 食糞性		P1		P1							
クロマルエンマコガネ *Onthophagus ater*	地表性 食糞性					W1						
ツヤマルエンマムシ *Atholus pirithous*	地表性 食屍性	W1										
オオトックリゴミムシ？ *Oodes vicarius*	地表性 雑食性								P1			
クロナガオサムシ？ *Leptocarabus procerulus*	地表性 食肉性								P1			
ミカワオサムシ？ *Carabus arrowianus*	地表性 食肉性					H1						

種レベルまで同定できた昆虫化石（その２）

昆虫種名	時代	縄文時代			弥生時代		古墳		奈良	平　安		江戸
		中期		後・晩期	中期	後期						
	遺跡名	町田	松河戸	松河戸	勝川	勝川	勝川	松河戸	勝川	勝川	町田	勝川
	生態	62B	62E	62A	62F	62F	62F	62A	62F	62F	62B	62A
アカガネサルハムシ *Acrothinium gaschkevitchii*	陸　生 食植性								W4			
イモサルハムシ *Colasposoma dauricum*	陸　生 食植性							W1				
トゲアシクビボソハムシ *Lema coronata*	陸　生 食植性					W1						
ヒメアカホシテントウ *Chilocorus kuwanae*	陸　生 食肉性											W1
ミヤマカミキリ *Massicus raddei*	森林性 食植性								W1 F1			
タマムシ *Chrysochroa fulgidissima*	森林性 食植性		F1		F5	F3			F4			
クシコメツキ *Melanotus legatus*	陸　生 食植性				P1		W1		P1			
アカアシオオクシコメツキ *Melanotus cete*	陸　生 雑食性	W2							W1 P1			
ゲンジボタル *Luciola cruciata*	半水生 食肉性								W1			
ホソセスジムシ *Yamatosa nipponensis*	陸　生 食植性					W1						
コガネムシ *Mimela splendens*	陸　生 食植性						W1	P1	W3			
ドウガネブイブイ *Anomala cuprea*	陸　生 食植性		P1				W1		W1 A1			W23 A2 P16 T1
ヒメコガネ *Anomala rufocuprea*	陸　生 食植性					L1			W1			W181 S1 P57 H5
ハンノヒメコガネ *Anomala puncticollis*	陸　生 食植性							P2	P1			
ヒラタアオコガネ *Anomala otiescostata*	陸　生 食植性						F1		W6			W1
ヒメカンショコガネ *Apogonia amida*	陸　生 食植性		W2			W1	W3	W3	W15 P5			
コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*	陸　生 食植性	W4 S2 T1 F3	W5 P1		W1 P1	W2	S1	L1	W11	W1		
アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi*	陸　生 食植性	W1	W8 F3				W1		W1	W3		
カナブン *Rhomborrhina japonica*	森林性 食植性		F5						W1 S1			W1
カブトムシ *Allomyrina dichotoma*	森林性 食植性								P1			
コカブトムシ *Eophileurus chinensis*	森林性 雑食性					W1 H1			W1			W1
ヒラタクワガタ？ *Serrognathus platymelus*	森林性 食植性					T1						

【検出部位凡例】
W；鞘翅　H；頭部　T；胸部　A；腹部　P；前胸背板　S；小楯板　L；腿脛節
B；ほぼ一体分　F；破片
（例：W12－鞘翅12点が検出されたことを示す）

Ⅳ．指標性昆虫と古環境の復元

A．昆虫化石の指標性

昆虫はあらゆる生物のなかでも、環境による住み分けと種の分化が顕著にみられる生物の一つである。また、微化石にくらべて死後の移動が少ないので、遺跡を取りまく特殊な微環境の復元に示相化石として重要な役割を果たす。

「タデ食う虫も好きずき」のことわざにあるように、昆虫は種によって食草や食べ物を異にしている。そのため、昆虫化石の種レベルの同定が進めば、当時の植物相や遺跡の性格を推定するのに役立つ。

日浦ら（1984）は、昆虫化石の指標性について、次の５項目をあげている。ここでは、それにならって勝川遺跡周辺から産した昆虫化石の中から、古環境の復元に役立つ指標昆虫の可能性について述べる。

１．水域環境の指標昆虫

昆虫化石を産した地層の多くは、泥炭及び腐植質シルト・粘土などの低湿地性水成層である。これらの地層が堆積した水域が遺跡の立地していた当時、どういう環境下にあったのかを推定するために、ネクイハムシ亜科に属する昆虫群が有効である。ネクイハムシは、日本に19種類生息していて、種による住み分けが最も顕著にみられる昆虫として知られている。体長が約７㎜前後と大変小さいこと、及び体全体がキチン質でおおわれてこわれにくいので、遺跡からの検出例も多い。とくにイネネクイハムシとガガブタネクイハムシの湿地帯における住み分けは、人間による低湿地の自然改変の程度を知るうえで重要である。

ゲンゴロウ科及びガムシ科、ミズスマシ科などの水生昆虫も出現頻度が高い。これらの水生昆虫のなかには、池や水たまりなどの止水を好むものや流水性のもの、自然度の高い水域を好むものなどがあり、分析方法を工夫すれば水域環境の把握に貢献できる。

２．植生環境の指標昆虫

人間の居住によって森林が伐採され、そこに人為的空間が出現する。それとともに裸地が拡大して、二次林や帰化植物（史前帰化植物）が侵入することになる。こうした植生の変遷にともなって、昆虫相も変化する。

甲虫目、なかでもコガネムシ科の多くは食植性昆虫群であり、これらを調べることによって、遺跡のまわりの植生の理解に役立つ。コアオハナムグリやスジコガネ亜科に属するヒメコガネなどの食葉性昆虫は、人里に近い草木や果樹などの葉を食害する。また、カナ

ブンやカブトムシ、ヒラタクワガタなどは、クヌギやカシ類の樹液に集まる昆虫として有名である。

しかし、これら大型の食植性昆虫は、大部分広食性であり、昆虫化石のデータだけから植物の種類を特定することは難しい。さらに詳細な植生環境の復元には大型植物遺体の検出に努める一方、狭食性の昆虫の特定とその同定システムを確立しなければならない。

3．栽培及び農耕の指標昆虫

人間が農作物の栽培をはじめて以来、昆虫のうちの何種類かは農業害虫として、人類の敵にまわることになった。しかし、現在知られている農業害虫が、栽培植物の出現というインパクトに対してどのように反応し、害虫化したのか、そのプロセスはまだほとんどわかっていない。

日本土着の種が、栽培植物の出現によって食性を変え、害虫化したというのが一般的な考えだが、イネを食害する害虫のなかには、稲作の伝播とともに日本に渡ってきて帰化したということも考えられる（史前帰化昆虫）。古くから、イネの害虫として知られるイネネクイハムシの場合は、本来、イネネクイハムシが生息していた場所に人類が水田開発を行なったために、やむなくイネを食草として選ぶようになった、ということも考えられる。

ヒメカンショコガネやイモサルハムシは、現在はイモ類などの畑作物の葉を食べる害虫として知られ、ドウガネブイブイは人間が植栽した果樹などの葉を加害する。

これらの昆虫を、現在の食性とともに詳しく分析することによって、先史農耕や人類の生産活動の跡を考察することも可能である。

4．汚物集積の指標昆虫

人間生活の営みによって、自然に放出される汚物は少なくない。人間そのものの糞尿はもとより、生活に伴うゴミや腐敗物、家畜の糞、屍体など、これらの処理に一役買っているのもまた昆虫である。

食糞性昆虫と呼ばれる一群がそれに当たる。オオセンチコガネは主に大型草食獣の糞に集まり、コブマルエンマコガネは犬などの糞、ツヤマルエンマムシは腐肉や動物の死骸に多い。このように、食糞性昆虫を調べることによって得られる情報は考古学上重要である。

また、ゴキブリやゴミムシの仲間には、人間の居住空間に近接したところに住むものも多く、これらの種群もまた指標昆虫として有効である。

5．地表環境の指標昆虫

地表歩行性の昆虫のなかには、砂地を好むものや湿地に多いもの、落ち葉や枯れ草がないと住めないものなど、地表環境を特定できる昆虫も少なくない。

その多くはゴミムシ科やオサムシ科などに属する種群である。しかし、これらの仲間は遺跡からの出現個体数がもっとも多いものの、単一節片による種の同定が難しく、しかも成虫のまま土中にもぐって越冬することがあり常に混入のおそれを含んでいて、指標昆虫としての取り扱いに注意が必要である。

B．古環境の復元

勝川遺跡及びその周辺から産した昆虫化石は、現時点での集約数で3253点である。遺跡の現場からの出土点数としては、これまでに例のない数に達した。そのうち174点がネクイハムシ類で、ネクイハムシをのぞく水生昆虫159点、食糞性及び食屍性昆虫22点、食植性昆虫1142点、地表性歩行虫210点、所属不明及び未分類の甲虫目1546点である。うち種レベルまで同定できた昆虫43種633点、科及び属レベルまで同定できた昆虫11科903点・4亜科77点・5属94点であった。これらをもとに、古環境の復元を試みた。

1．江戸時代（後期）　勝川A区

ヒメコガネ（244点）、ドウガネブイブイ（42点）及びコガネムシ科の多産によって特徴づけられる。コガネムシ科の昆虫は、詳細に検討すればそのほとんどがサクラコガネ属に分類されるべきものである。これらはいずれも陸生の食葉性昆虫である。

ヒメコガネは、マメ科植物やブドウ・クリなどの草木の葉を加害し、ドウガネブイブイは植栽されたカキやブドウなどの果樹の葉を好んで食べる。水生昆虫は、コガムシの鞘翅3点だけであった。これはおそらく灯火に飛来したものであろう。

この結果から、果樹等が植えられた人家の近く、あるいは人里に近い村はずれの草地や林縁などが推定され、きわめて人の気配の濃い環境といえる。

なお、考古学的な発掘成果から、下街道に沿った勝川宿の跡が復元されている。

2．平安時代　　勝川F区　町田A・B区

イネネクイハムシを多く産した。イネネクイハムシの全出土点数56点のうち、半数の28点が勝川F区及び町田A・B区の平安時代の試料から得られている。ネクイハムシ亜科として、他にガガブタネクイハムシ、ツヤネクイハムシ及びキンイロネクイハムシを伴う。少数の水生昆虫と食葉性昆虫のアオハナムグリ及びコアオハナムグリも得られた。科のレ

ベルでは、ゴミムシ科とハムシ科、コガネムシ科を産した。

人工改変の進んだ低湿地、開発された水田の姿が想定される。考古学的には、町田A・B区でこの時期のものと推定される水田遺構が検出されている。

3．奈良時代　　勝川F区

カナブンやカブトムシなどのクヌギ・カシ類の樹液に集まる昆虫やミヤマカミキリ、タマムシ、コカブトムシ、クシコメツキ、アカアシオオクシコメツキなどの主に広葉樹の木や葉を食害する昆虫を多く産した。

ネクイハムシ亜科ではガガブタネクイハムシ、キンイロネクイハムシ、その他の水生昆虫ではゲンゴロウ、コガタガムシ、オオミズスマシ、ゲンジボタルなどを産出した。現在では、イモ類などの畑作物の葉を害するヒメカンショコガネの産出点数も多い。大型植物遺体では、クヌギやマテバシイ、アカガシ亜属などの堅果類とヒシの実及びカボチャの仲間の種子（?）を産した。

このことから周囲に林を伴う自然度の高い低湿地が推定される。低湿地には、ジュンサイやヒツジグサ、コウホネなどの浮葉植物が浮かび、流れのゆるやかな水域の存在が考えられる。

考古学的には、この時期の木製品を多く産した旧地蔵川水系の自然流路ないし溝状遺構が検出されている。

4．古墳時代　　勝川F区　松河戸A区

全体に昆虫化石の出土点数が少なく、資料不足である。ネクイハムシ亜科では、ガガブタネクイハムシ、イネネクイハムシ、キンイロネクイハムシ、ツヤネクイハムシの4種がそろって見つかる。ヒメカンショコガネ、コアオハナムグリをはじめとしたコガネムシ科の食葉群と地表性のゴミムシ科が比較的多く産出した。それに止水域や流れのゆるやかな水域を好むオオミズスマシなどの水生昆虫も産した。

環境要因が多様化していたことが推定され、自然度の高い止水性の水域の存在が考えられる。

考古学的な成果では、この時期の溝状遺構から木製品と土器類が発見されている。

5．弥生時代後期　　勝川F区

イネネクイハムシが多く出現した。ほかにゴミムシ科やコガネムシ科の出現点数も多い。オオセンチコガネ、クロマルエンマコガネをはじめ、計5点の食糞性昆虫が発見された。

水生昆虫ではガムシ、オオミズスマシなど。ほかにコカブトムシ、タマムシが見つかった。大型植物遺体では、ヒメビシ、ヒシモドキの実が多数検出された。

水田開発に伴う自然の改変が進行した。オオセンチコガネの発見から、当時大型草食獣がいたことが推定される。

考古学的には、昆虫化石を産した土と同層準の堆積物から弥生時代後期の木製品が大量に出土している。

6．弥生時代中期　　勝川Ｆ区

種レベルまで同定できた昆虫化石７種12点、科及び属レベルまで同定できた昆虫化石５科・４亜科・１属38点、不明17点の計67点であった。昆虫化石の資料が少なく、昆虫化石のデータだけからは環境復元は困難である。コブマルエンマコガネなど５点の食糞性昆虫と13点のゴミムシ科及び５点のタマムシが発見された。

発掘時に土坑中の土から、大量のモモやクルミ（オニグルミ）の種子が発見された。これは人間が食べて捨てたものであろうと推定される。同じ土より史前帰化植物の可能性の高いオナモミやジュズダマなどの水田雑草、コメ粒、ウリやヒョウタンの種子が見つかった。また、並行して調査を進めた珪藻遺骸の分析結果から、止水性種や水質汚濁に耐性のある種群が高い頻度で検出された。

これらの結果を総合すると、汚れた水たまり的様相の止水域、人及び犬などの動物の気配、近くにエノキやサクラなどの樹木が生えていた状況が推定される。

昆虫化石を産した土の付近から、考古学的には、木製品の貯蔵施設とその生産に関連した建物群が検出された。

7．縄文時代後・晩期　　松河戸Ａ区　町田Ｂ区

昆虫化石では、まったく資料不足である。松河戸Ａ区から、種レベルでは現在のところ、フトネクイハムシに同定される昆虫化石１点と、科及び亜科のレベルではネクイハムシ亜科を含む３科３点、１亜科１点と、不明種９点が見つかったのみである。

この時期に、山陰起原と考えられるテフラ（詳しくは別稿の予定）の降灰があり、環境が変化した様子が珪藻遺骸の分析結果から明らかになった。(この結果の詳細についても、近く「町田遺跡」報告書にて報告の予定)

好アルカリ性の種群が減少し、変わって好酸性種が増加した。珪藻の水流性・生態性についても、それまでの好止水性種から不定性種へ、浮遊生種から底生・付着生種へ変化している。

この結果から、自然度の高い湿地帯と、ゆるやかな流れを伴った清澄な酸性水域が存在したことが伺われる。

考古学的には、これまでのところ縄文時代後・晩期にあたる土器及び遺構は検出されていない。

8．縄文時代中期　　松河戸Ｅ区　町田Ｂ区

主として、山間の渓流や流れの付近に住むマメゲンゴロウ属の一種のクロマメゲンゴロウ（?）を多産した。ほかに雑木林や森林の樹液に集まるカナブンなどのコガネムシ科の種群、及びアオハナムグリ、コメツキムシ科を多く産した。ネクイハムシはほとんど検出されなかった。珪藻遺骸の分析結果は、pHについては好アルカリ性から不定性種、水流性については止水性種でほとんどが占められた。

これらの結果から、木立に囲まれた止水域、水辺にはハンノキや広葉樹が茂り、開水面は閉ざされていた。池のまわりには、ヨシやマコモなどの湿地性植物はなく、水底に落ち葉が静かに堆積するような林床内のやや薄暗い環境が推定される。

考古学的な発掘成果からは、昆虫化石を産した泥炭質シルト中から縄文時代中期の土器、及び近接した微高地上で同じく縄文時代中期の石器生産に関連した住居跡、配石遺構などが検出されている。

Ⅴ．あとがき

発掘作業のかたわら、昆虫化石や植物遺体の採集を心がけるようになって10ヶ月余。当初は、現場から新しい昆虫化石が発見されるたびに喜んだものである。昆虫化石の出土点数がふえるにつれて、ことの重大性をヒシヒシと痛感するようになった。

2000年、3000年の長いときを越えて出土した昆虫化石は、小さいながらどれも美しい輝きを放っている。しかし、時間の経過とともに、その色は見る見る退色し、標本も劣化する。昆虫化石の保存の方法すら、まだ確立されていない。同定の方法も、これまでの分類は、一個体まとまった状態で種を決定するのが昆虫分類学の基本とされてきた。顕微鏡下における単一節片、とくに鞘翅による同定と分類のシステム化がいそがれるところである。

浅学にもかかわらず、調査研究と発表の機会を与えてくださった愛知県埋蔵文化財センターの皆さんに感謝するとともに、多くの未分類の昆虫化石に正しい名前を与えるべく、これからも努力していきたく思う。

補　遺

松河戸遺跡A区の火山灰層直下の黒灰色泥炭質シルトの放射性年代値がこのほど明らかになった。その結果は3120±120年B.P.ということであり、このことからテフラの降灰はほぼ3120年B.P.直後か、少なくともそれ以降ということになり、縄文後・晩期という相対年代をよく裏づけた。

放射性年代は、学習院大学理学部の木越邦彦研究室で測定していただいた。また、テフラの給源火山を山陰地方と推定するにあたって、群馬大学の新井房雄先生にずいぶんお世話になった。詳しい火山灰のデータとその年代論については、別の機会に述べる予定である。

参考文献

日浦　勇（1980）昆虫遺体．鬼虎川遺跡調査概要，1，44．（東大阪市遺跡保護調査会）

日浦　勇・宮武頼夫・那須孝悌（1983）　昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学，昭和57年度年次報告書，文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班，467—479

日浦　勇・宮武頼夫・那須孝悌（1984）　昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究．古文化財の自然科学的研究，古文化財編集委員会編，同朋舎，411—429

森本　桂ほか（1986）　原色日本甲虫図鑑（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）・（Ⅳ）保育社

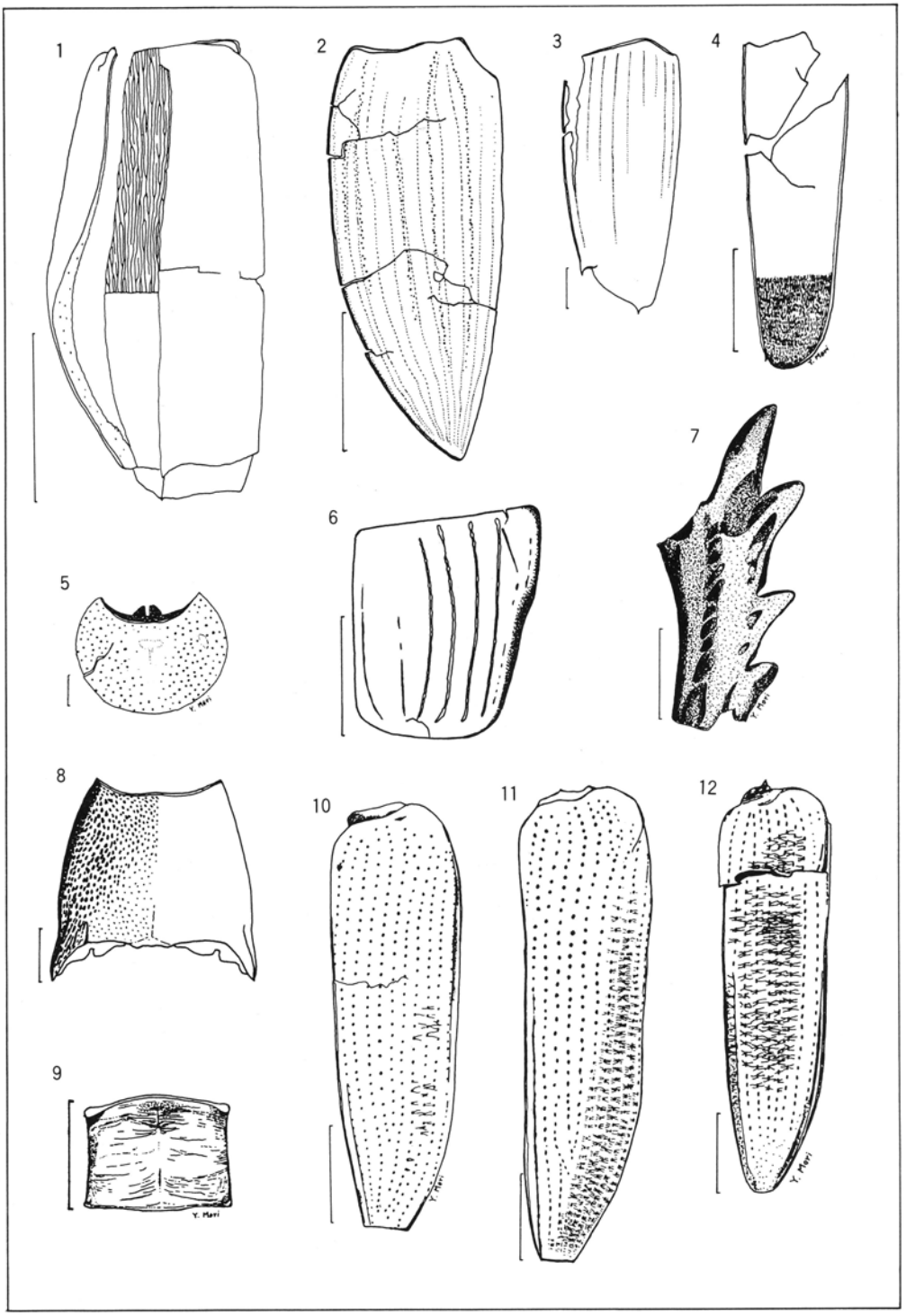
中根猛彦ほか（1975）　学研中高生図鑑．昆虫Ⅱ・甲虫，学習研究社

中根猛彦ほか（1975）　原色日本昆虫図鑑（上）・（下）保育社

野尻湖昆虫グループ（1984）　野尻湖発掘（1978～1982）で産出した昆虫化石．地団研専報，27，137—156

野尻湖昆虫グループ（1985）　アトラス・日本のネクイハムシ——化石同定の手びき．——182pp

野尻湖昆虫グループ（1987）　第9次野尻湖発掘および第4回陸上発掘で産出した昆虫化石．地団研専報，32，117—136



第2図

第2図の説明

1．ゲンゴロウ　*Cybister japonicus* Sharp　♀　左鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
2．ガムシ　*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky　左鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
3．オオミズスマシ　*Dineutus orientalis*（Modeer）　左鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
4．ミヤマカマキリ　*Massicus raddei*（Blessig）　右鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）
5．コブマルエンマコガネ　*Onthophagus atripennis* Waterhouse　♀　前胸背板（勝川遺跡：弥生時代中期）
6．ツヤマルエンマムシ　*Atholus pirithous*（Marseul）　右鞘翅（町田遺跡：縄文時代中期）
7．オオセンチコガネ *Geotrupes auratus* Motshulsky　♂　右前脛節前半部（勝川遺跡：弥生時代後期）
8．アカアシオオクシコメツキ　*Melanotus cete* Candeze　前胸背板（勝川遺跡：奈良時代）
9．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　前胸背板（勝川遺跡：弥生時代後期）
10．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　右鞘翅（勝川遺跡：平安時代）
11．ガガブタネクイハムシ *Donacia lenzi*（Schonfeldt）　右鞘翅（勝川遺跡：弥生時代後期）
12．ツヤネクイハムシ　*Donacia nitidior*（Nakane）　右鞘翅（勝川遺跡：奈良時代）

（スケールは1・2・4は1㎝、あとはすべて1㎜）

写真1の説明（すべて勝川遺跡産）

1．カナブン　*Rhomborrhina japonica* Hope　左鞘翅（奈良時代）　標本の長さ22㎜
2．コアオハナムグリ　*Oxycetonia jucunda*（Faldermann）　左鞘翅（古墳時代）　標本の長さ12㎜
3．コカブトムシ　*Eophileurus chinensis*（Faldermann）　左鞘翅（弥生時代後期）　標本の長さ14㎜
4．コガネムシ　*Mimela splendens* Gyllenhal　右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ13㎜
5．ドウガネブイブイ　*Anomala cuprea* Hope　左鞘翅上半部（奈良時代）　標本の長さ8㎜
6．ヒメカンショコガネ　*Apogonia amida* Lewis　左右鞘翅（弥生時代後期）　標本の長さ6㎜
7．アオゴミムシ属　*Chlaenius* sp.　左右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ13㎜
8．ゴミムシ科　Harpalidae　右鞘翅（弥生時代中期）　標本の長さ15㎜
9．オオトックリゴミムシ属　*Oodes* sp.　前胸背板（弥生時代後期）　標本の最大幅6㎜
10．サクラコガネ属　*Anomala* sp.　右後腿節及び脛節（奈良時代）　腿節3㎜、脛節2.8㎜
11．クシコメツキ　*Melanotus legatus* Candeze　前胸背板（奈良時代）　標本の長さ6㎜
12．トゲアシクビボソハムシ　*Lema coronata* Bary　右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ3.5㎜
13．ハグロトンボ　*Calopteryx atrata* Selys　右後翅（奈良時代）　標本の長さ16㎜
14．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　前胸背板（弥生時代後期）　標本の長さ1.3㎜
15．イネネクイハムシ　*Donacia provosti* Fairmaire　右鞘翅（古墳時代）　標本の長さ6.0㎜
16．ガガブタネクイハムシ　*Donacia lenzi*（Schonfeldt）　右鞘翅（奈良時代）　標本の長さ6.1㎜

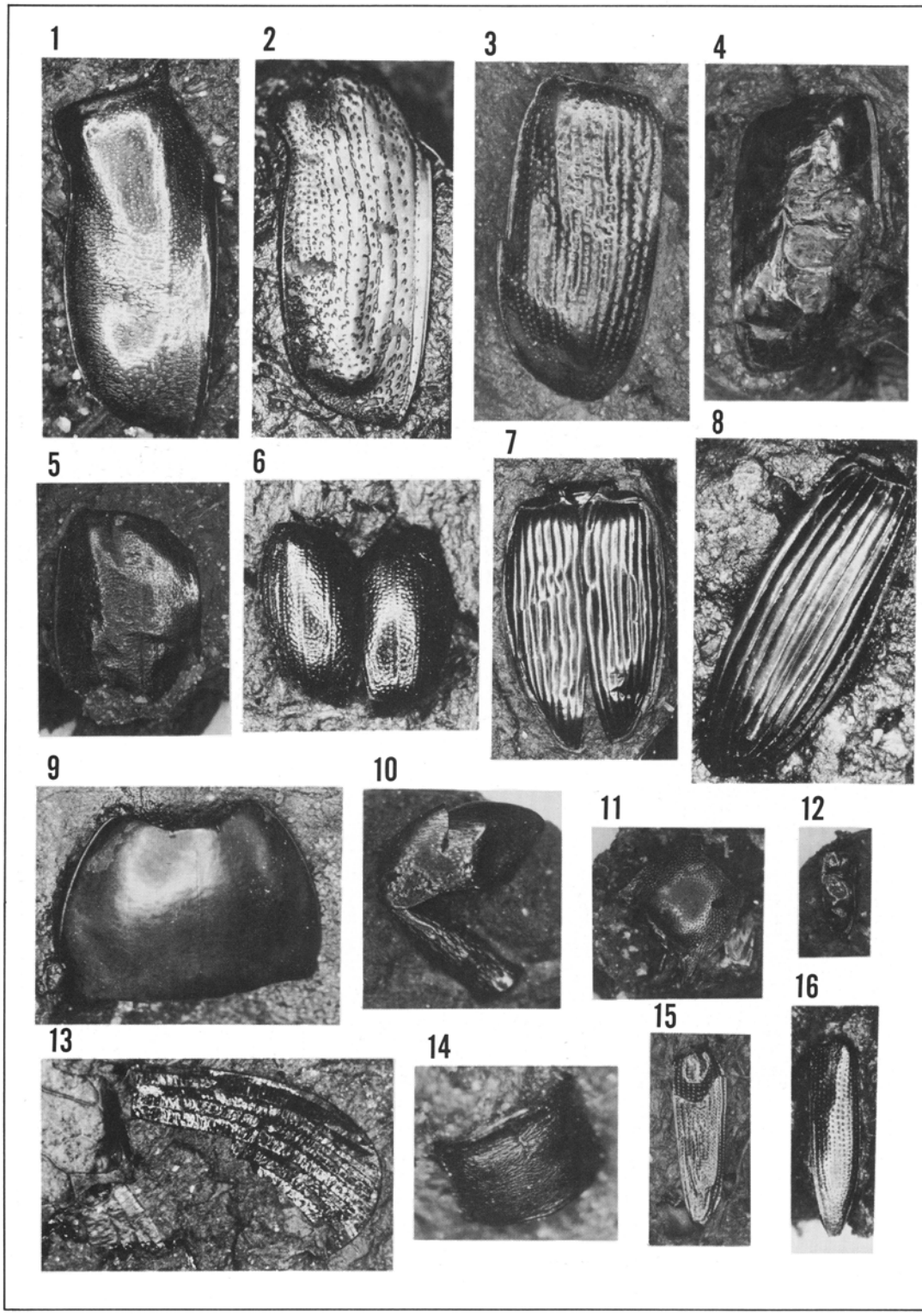


写真 1

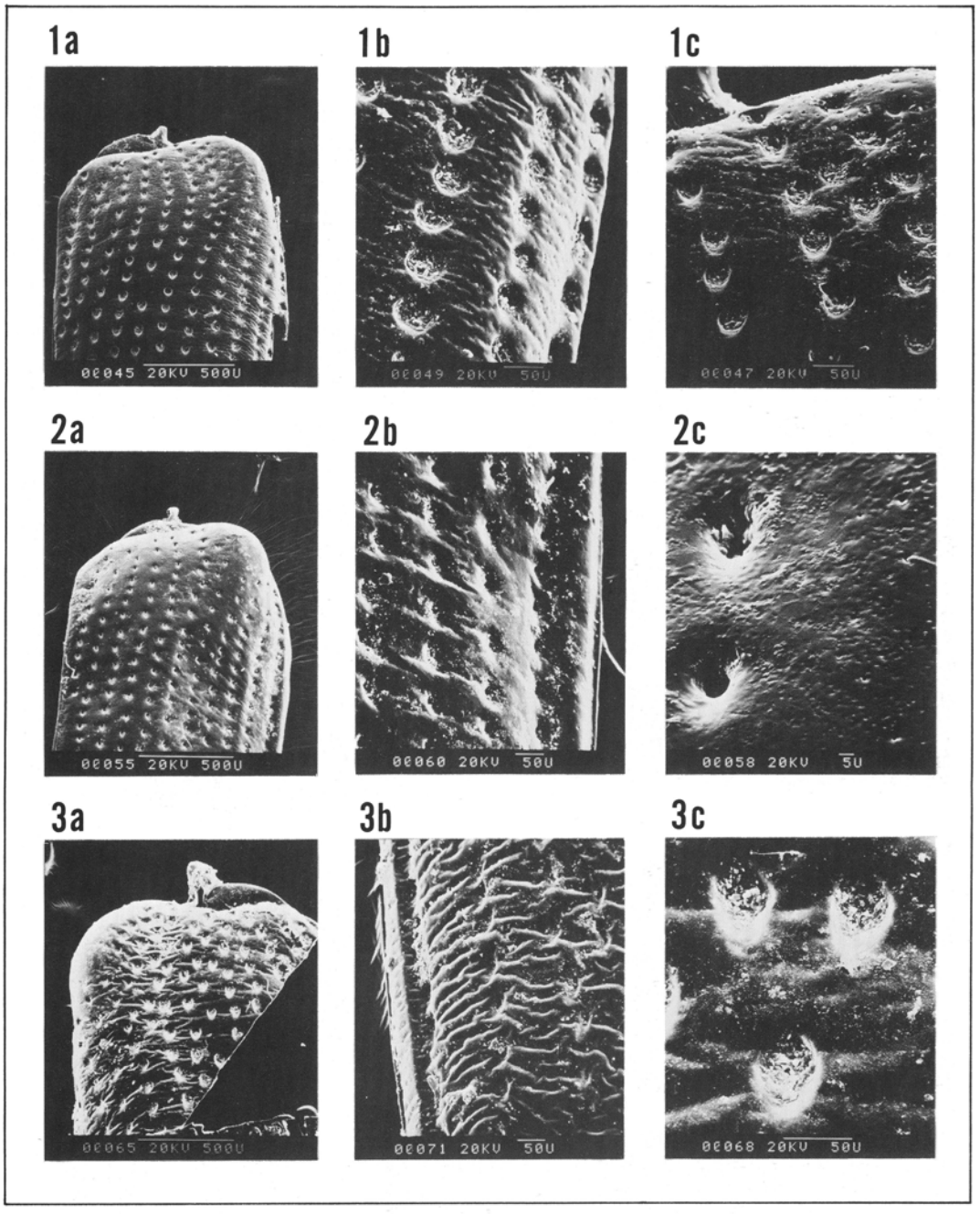


写真２　ネクイハムシ３種の走査型電子顕微鏡写真

１ａ・１ｂ・１ｃ　ガガブタネクイハムシ（勝川遺跡：弥生時代後期）

２ａ・２ｂ・２ｃ　イネネクイハムシ（勝川遺跡：平安時代）

３ａ・３ｂ・３ｃ　キンイロネクイハムシ（勝川遺跡：奈良時代）

伊勢湾地方から見た近江系土器

—とくに弥生中期をめぐっての断想—

石　黒　立　人

I

畿内地方にはあまり見られないある特徴をもった土器が、近江地方の土器であるとして「近江型」あるいは「近江系」と呼称されるようになってからすでに久しい。にも拘らず、そうした名称付与以後の年月とは裏腹に、「近江系」あるいは「近江型」土器の何たるかは、未だもって茫漠とした感がある。それは、近江地方の土器としての「近江（系）型」土器と、畿内地方とは異質な型式学的特徴をもって近江地方に多く分布する土器としての「近江（系）型」土器が、区分の曖昧なるままに一括されてきたことに因る。すなわち、製作地の問題と、そうした土器を作り出した集団の技術的・精神的基盤の問題が峻別されなかったのである。換言するなら、地理的区分のアプリオリな適用の妥当性の評価と、地域性の歴史的把握ということ。このことが、土器を理解する上で最も重要であるにも拘らず、便宜性を優遇したためにあまり考慮されることがなかったのである。

ところで最近、弥生時代中期の「近江（系）型」土器について幾つかの論述がなされている。従来見ることのなかった滋賀県の研究者によるものもある。以下、そうした諸論の比較検討をとおして、また伊勢湾地方で出土したいわゆる「近江（系）型」土器と思われるものを取り上げ、問題の一端を明らかにできればと考えている。(以下、近江系と単純表記する。)

II

伊勢湾地方で出土する近江系は、甕の場合外観上から大きく２類に分けることができる。すなわち、口縁部は厚手で二段口縁といった形状をなして上端が波状（「山形状口縁」とも呼称される）をなすもの－**A類**、口縁部が単に受け口状をなすもの－**B類**である。壺については、近江地方での型式確定ができていない現状において積極的に提示することはできないが、とりあえず議論に供するために敢えて２、３挙げておく。

さて、甕A類は、伊勢：納所遺跡・亀井遺跡、尾張：朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡、などで出土し、共伴土器は中期２を中心とする。口縁部の屈曲部分外面の稜には連続した刻みを、

波頂部には単独の刻みを施す例が多い。また、紋様は口縁部直下外面に直線紋といった趣の横ハケメ、口縁部内面にハケメと同一原体による波状紋が施される。それに対し、甕B類は、上記遺跡のほか伊勢：永井遺跡・起A遺跡・北端遺跡、尾張：大渕遺跡、などで出土し、中期3に伴うものと中期4に伴うものがある。前者はやや厚手であり、口縁部直下の紋様も直線紋（横ハケメではない）が主のようである。しかし、後者になると全体に薄手で口縁部もきっちりした受け口状をなす。紋様も直線紋だけでなく刺突紋（列点紋）や波状紋が加わり複雑となる。以上のように大雑把には、A類→B類という変遷を考えることができる。

ところで、甕B類については問題となる点がある。伊勢地方においては近江系甕から受け口状口縁部のみを取り去ったという状況の形態・紋様をもつ甕がかなりの頻度で出土しており、両者の違いをどう考えるかが問われるからである。中期3に属す例は未だ十分ではないが、中期4に属す例は亀井遺跡を始めとする津市周辺の諸遺跡や鈴鹿市周辺においてかなりの資料集積をみているし、散発的には伊勢全域において出土しているという状況である。中期3にあって尾張地方との関係が強いとはいえ近江地方に隣接する伊勢地方であれば散発的に出土することもありうるが、中期4では瀬戸内・畿内系土器群の波及経路からいって近江地方からの流れは主要であろうから、そこにおいて何故受け口状口縁部を持つ甕＝近江系では無くして受け口状口縁部を取り去った〈擬似近江系〉が高頻度に展開するかが問題である。ここで今結論をだすには至らないけれども、近江地方内部か近江・伊勢の境界付近、あるいは伊勢地方内部に近江系と直接しないセクションがあって、そこで甕について独自に情報変換－この場合は消去－が行われそれが広まった。つまり近江系自体に移動を促す要因がなく瀬戸内・畿内系の動きとは同調しなかったのかもしれない。見方を換えるならば、中期4に至り緊密の度を増し情報変換が非常に限定されて部分的にしか行われないほど近い関係を取り結んだ－固定した－ということであろうか。(故に大和地方に繋がらないことだけは確か。)

上記甕分類には加えなかった、単純に外反する口縁部の端面（口唇部）を突起状に拡張するものや口縁部内面に波状ハケメを施すものは、伊勢：東庄内B遺跡、尾張：朝日遺跡、阿弥陀寺遺跡、などで出土しているけれども、私は今これらを（かって私も行ったのであるが）限定的に「近江型」と呼称することには賛成できない。このての特徴をもつものは近江地方に固有かというと決してそうではないようである。口唇部に単独圧痕あるいは2個一対の圧痕を加える例は伊勢湾地方においては中期1から出現するし、さらに口縁部内面に波状紋を施す例も同様、伊勢湾地方との関係で理解する余地がある。

口縁部内面紋の出現は、いわゆる櫛描紋という点でみると、条痕紋系土器とくに水神平式壺や岩滑式深鉢に先行現象がある。しかも、前記内面波状紋は調整具としてのハケ原体によって施紋されるのが通常であり、この点も条痕紋系土器の手法と極めて共通している。また、体部外面の直線紋状の横ハケメも同一原体によることは注目して良い。(とはいっても、甕形としての畿内との共通性は否定できないところであるが。)

壺はよくわからない点も多いが、私がこれまで「伊賀型」としてあつかってきたものの中にあるかもしれない。実際、「伊賀型」と呼称しながらその実態はほとんど不明と言うしかないものであり、その資料的な不十分さからまとまった考察をくわえることのできなかったという否定面がある。従って、今後資料の集積をみて体系だてる必要を感じる。ここでは、そうした現状を鑑みて、若干見通し的に述べておこうと思う。

伊勢地方では、中期2になると貝田町式細頸壺とは別に「伊賀型」と呼称したような受け口状口縁部をもちやや頸部の長い壺(太頸と細頸がある)が目立つようになる。伊勢地方は尾張地方との関係も強く、中期1以来緊密な情報交流のあったことをうかがわせるが、こと壺の一部にあっては独自性を表出し、尾張地方にはない－貝田町式壺とはことなる－受け口状口縁壺を採用するのである(「採用」するといったのは、受け口状口縁壺の成立はいわゆる朝日式土器分布圏ではなく、岩滑式土器分布圏で行われるからである。従って、そこにスムーズな型式変化は認められないのであり、新しい形態の波及あるいは採用というとらえ方になるのである)。この点では、近江地方の受け口状口縁壺も同じであり、伊勢と近江のどちらか一方から一方ということではなく、どちらも同じようにある地域から影響を受けたと考えるのが妥当であろう。すなわち、尾張地方を囲んで三河、伊勢、近江、美濃において類似した特徴をもつ土器が分布することを見れば、である(現れ方にはかなりの差がありとても同じ部類に見えないようなものもあるが、相互に比較すれば内実において近似性の高いことは十分理解できると思う。伊勢でみられる頸部のやや長い壺の肩部の段は重要)。

いずれにしても、類似点は決して表面的ではないので、広範囲に比較検討するなかで近江系の範囲を縮小する必要があろうかと思う。と言うより、近江系についての議論が、その範囲を問題外として進められている現状にあること。換言するなら、現状の拡大しきった近江系土器の範囲に対して、いま一度再検討をする必要があること。このことを抜きにしては議論の深化は望めないと思うのである。さらに重ねて言えば、近江系について検討するのに、その内部にあって行うのと外部にあって行うのとでは、結果の見え方も大きく違ってくるだろうこと。極めて、重要な点と思うが。

III

ここでは、国下多美樹・浜崎悟司両氏の論考に焦点をあて、問題の一端を提示したい。

さて、国下論文であるが、考察の進め方はオーソドックスであり、資料についても比較的細かくあたっているようである。しかし幾つかの問題点がある。

（1）近江型甕の規定方法が曖昧である。『土器集成』の佐原分類を前提とし、全く無批判に範囲を設定している。更には、論述の進行から言って初めにもってくるべき「近江系要素の抽出」を後にもってきている。従って、結論的には従来の近江型甕論を踏襲したものとなっている。

（2）弥生中期～後期の地域間交流を扱っているにしては、近江型甕の型式変化に対する認識及び分類の時間性が不明瞭である。

（3）『近江型甕についての一試論』というテーマに規定されたわけでもあるまいが、壺についての認識が甘い。伊勢湾地方の資料をほとんど参照していない。

それでは、浜崎論文はどうであろうか。国下論文に比べて論点はやや明瞭と言えるけれども、やはり次のような問題がある。

（1）「近江型甕」と「近江的特徴」（口縁端部の押圧、口縁部内面の波状ハケメ、頸部外面の横ハケメ）を区別したことは評価できるとはいえ、「近江的特徴」の位置ずけは依然曖昧となっている。本当に近江を規定する特徴であるのか。

（2）近江型甕口縁部の分類の妥当する空間的範囲がはっきりしない。近江地方内において地域的に限られるのかあるいは一般化できるのかどうか。

（3）（2）に係わり、本稿でも重要な点があるが、井藤暁子の指摘した伊勢納所遺跡出土甕の評価について「近江に一般的にみられるものではなく、ましてその初源的形態をとっているとは考え難いこと」は事実としても、近江系に含まれないのかどうか。

（4）地域的な境界設定にまで論を進めているわりには、様式的な視点に欠けるのではないか。すなわち、壺抜きである。いったい甕のみで区分できる境界とはどういった性格のものなのか。甕のみで地域性を強調することは危ういのではないか。

以上両氏の論点のうち問題となる点の一部を抽出してみたが、通して言えることは、「近江型甕」について語っていながら、その本質把握へのアプローチが不十分である。様式とは切り離された著しく不安定な存在としての「近江型甕」をすでに明白な事実とした上での極めて表面的な土器論に終始していると言わざるをえないのであり、その根底には近江系＝畿内系という意識があるように思える。その点では両氏ともとりあげていないが、遺跡調査紹介の小文ではあるとはいえ、岩崎直也による堤ヶ谷遺跡出土土器の分析を十分評

価すべきであると考える。(研究史も大切ではあるが、尊重しすぎればかえって拘束されることにもなりやすい。)

Ⅳ

近江系の型式的特徴は、個体の移動を考慮するなら、単に分布状況で決まるものではない。時間的な前後の型式組列があるかないかが重要であろう。つまり、ここでは口縁部の形成過程を追うことができるかどうかにかかっている。かかる条件の有無を判断材料として考えるならば、波状及び受け口状口縁部をもつ「近江甕」の生成については近江地方以外にはありえない。多少の境界付近での情報交流があり、当該土器に関する情報が流れたとしても、それは周辺の偏差として処理されるにすぎず、中心を変動させるものとはならない。

しかし、浜崎の区別した「近江的特徴」なるものは、個別的な手法差を除いて内面施紋という点から大局的にみるならば、極めて分布範囲が広く、畿内東部周辺を北（能登・加賀）から南（伊勢・三河・遠江）へ帯状につながっている。そしてこの範囲はまた受け口状口縁部をもつ壺の分布域でもあることは、ともかくも両者の間に少なからず関係のあることを示している。

このことは岩崎直也も指摘しているように水神平式を含めた条痕紋系土器との関係において理解すべきものと考えられるのである。その意味で「近江的特徴」という名称について仮であると断ったとしても、用語の不十分さは拭えない。ではどういった範疇で枠付けしたらよいのか。とくにこれといった用語は用意していないが、敢えて言えば、〈伊勢湾・北陸的特徴〉とでも言ったほうが「近江的」に比べればより妥当性はあるかと思う（あるいは、〈弥生文化中部弧状帯〉という地域的枠組みを設定するのもどうか)。

ところで、私の乏しい知識をもとに近江系を考えても、従来行われてきたような畿内地方との対比（多くの場合は、畿内を基準としてそれに当て嵌めていた）に果たしてどれだけ有効性があったのであろうか、私は疑わしいと思う。つまり、近江系という用語の使われ方からみて明らかなように、そこには畿内様式を大枠とした上での地域区分といった意味があることは否定できない。畿内的認識基準から離れて対等に近江系をとらえるにはどうしたらよいのかといった点は何等考慮されていないといったら言い過ぎであろうか。もちろん、研究の取っ掛かりというのであれば十分に意味はあるが、すでに年月の経過した今、同じように使うことにためらいはあるはずである。

畿内様式は、個性を持たない（あるいは過少評価でしか見ようとしない）からこそ、(ある意味でアプリオリな）地域区分によって一定枠内で個性を浮き彫りにしようとした。それに対し、近江地方の土器は見るからに個性の塊であり、素直に土器と対話すれば自ずか

ら様式の姿を現すはずであった。しかし、研究の方向は畿内の延長であったばかりに個性を見落とした。と言うより個性を背後に隠したと言うべきか。畿内的思考の枠に嵌まらないものを除外したことが、近江地方の土器を分からなくしたのではあるまいか。

V

近江地方の土器の重要性は、指標的にみるならば、こと土器に止まらず、恐らくは歴史的な範疇にまで及ぶものであるかもしれない。土器に限って言えば、中期以来の独自性が古墳時代の初めまで維持されること、その独自性も自己完結することなく周辺に対して何等かの形で影響を与えていること等、地域としての在り方は対畿内のレベルにおいて理解することができると考える。あるいは、畿内を規定するものとしての位置に「近江」があると見るのは肩入れしすぎであろうか。　　(1988．1．10)

引用文献・参考文献

国下多美樹　「近江型甕についての一試論」『長岡京古文化論叢』　中山修一先生古希記念事業会編　1986。

浜崎悟司　「弥生土器甕にみられる地域色」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要1　昭和60年度』　滋賀県埋蔵文化財センター　1987。

岩崎直也　「湖東における高地性集落の調査」『滋賀文化財だより』　No.68　財団法人滋賀県文化財保護協会　1982。

三重県教育委員会　「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　1970。

〃　「亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1973。

〃　「辻の内遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1976。

〃　『納所遺跡』　1980。

〃　「起A遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』　1983。

四日市市教育委員会　『永井遺跡発掘調査報告』　1973。

愛知県教育委員会　『朝日遺跡』　1982。

財団法人愛知県教育サービスセンター　『埋蔵文化財発掘調査年報』　Ⅰ～Ⅲ　1984～1985。

松本洋明　「弥生土器の考察」『末永先生米寿記念献呈論文集』　1985。

拙稿　「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書　'86」『東日本における中期後半の弥生土器』　北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究会・群馬考古学談話会　1986。（時期区分は本稿による）

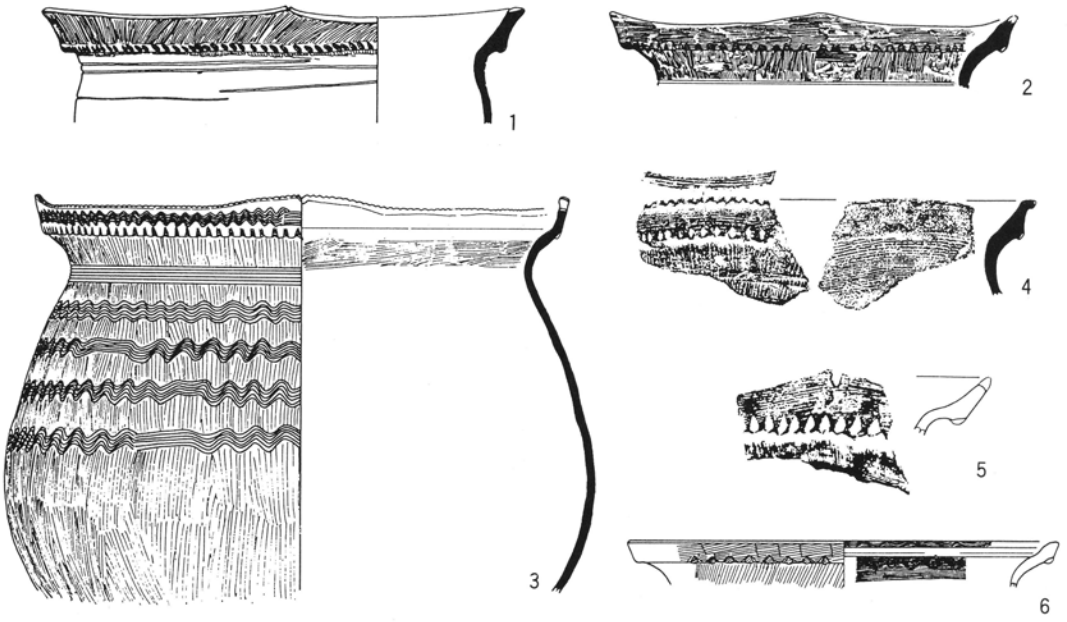


Fig.1　近江系甕A類　12 納所　3・4 亀井　5 朝日　6 阿弥陀寺

資料解説

Fig.1は近江系甕A類、Fig.2は肩部に横ハケメをもつ甕である。6は破片からの復元であるため口縁部が直線的になっているが、他と同じ物であると思われる。口縁部内面へ波状紋を施す例は余り見られない。3を除いて1～6は中期2に属す。3は中期3か。Fig.2の7は中期2、他は中期2～中期3。11・12は肩が丸みを帯びてやや張り出しており、新しい様相を示す（中期3か）。伊勢地方に固有の甕と思われる。口唇部の面が特徴的。

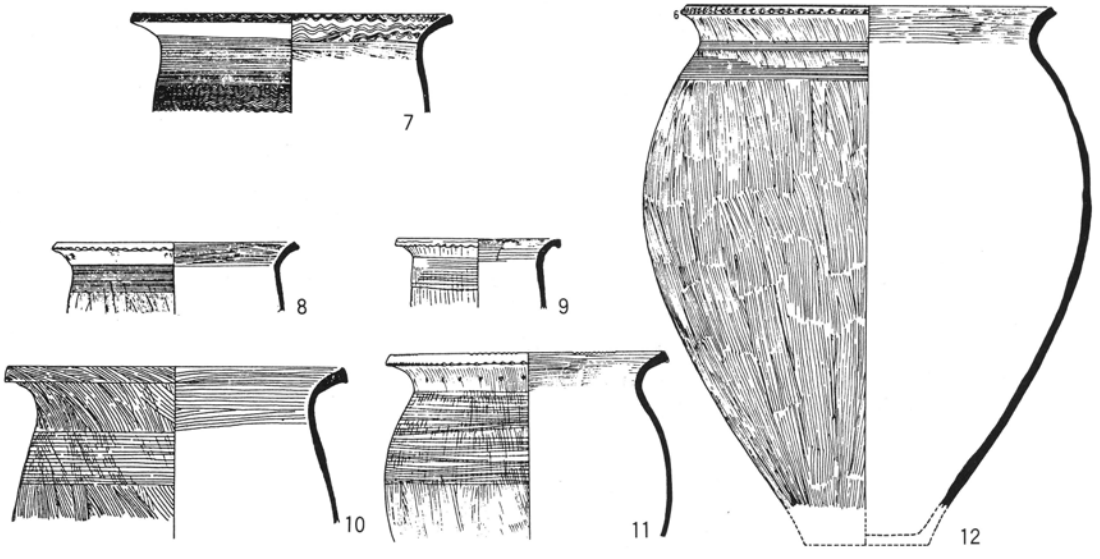


Fig.2 肩部に横ハケメをもつ甕　7・11 東庄内B　8～10 北切　12 地蔵僧

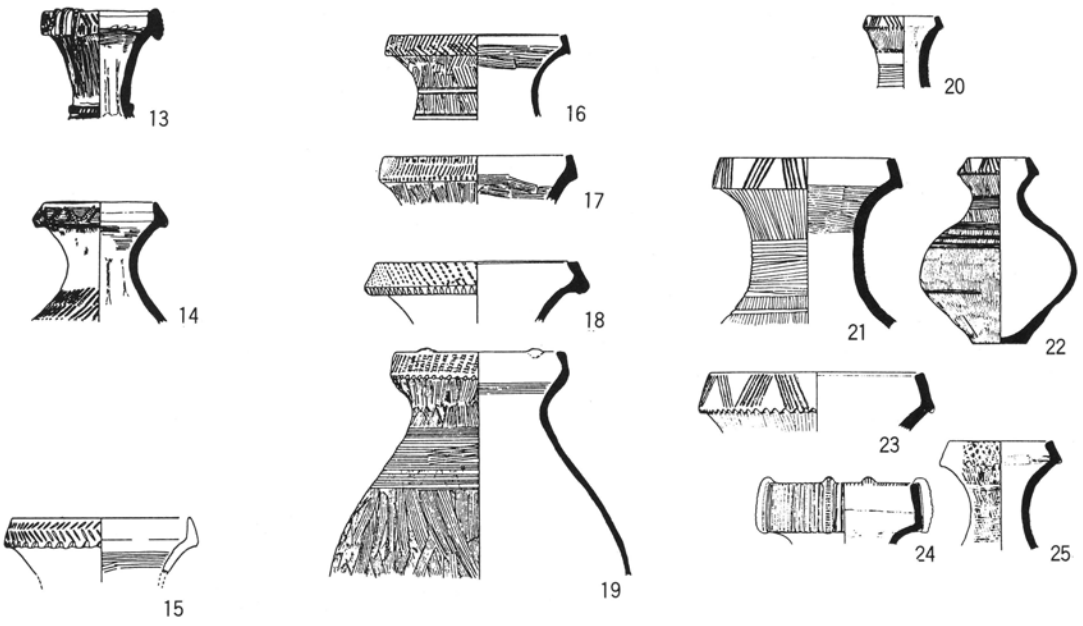


Fig.3　受口状口縁壺　13・14 納所　15 平田　16～19 北切　20～25 東庄内B

Fig.3は中期２の受け口状口縁壺、Fig.4は中期３（～中期４）の受け口状口縁壺。受け口部外面稜に見られる連続した刻みは、岩滑式の刻み突帯に系譜を辿ることができる。棒状浮紋も同様である。19は口唇部が部分的に突出しており、岩崎直也のいう近江系に類似する。13・15・16・18の受け口部外面の列点紋あるいは刺突紋は北陸地方にも類似例がある。
Fig.4の26・27・31は前者の系譜を引くが、28～30は他からの影響を受け部分的に変換している。しかし頸部下の刺突紋は消去されていない。

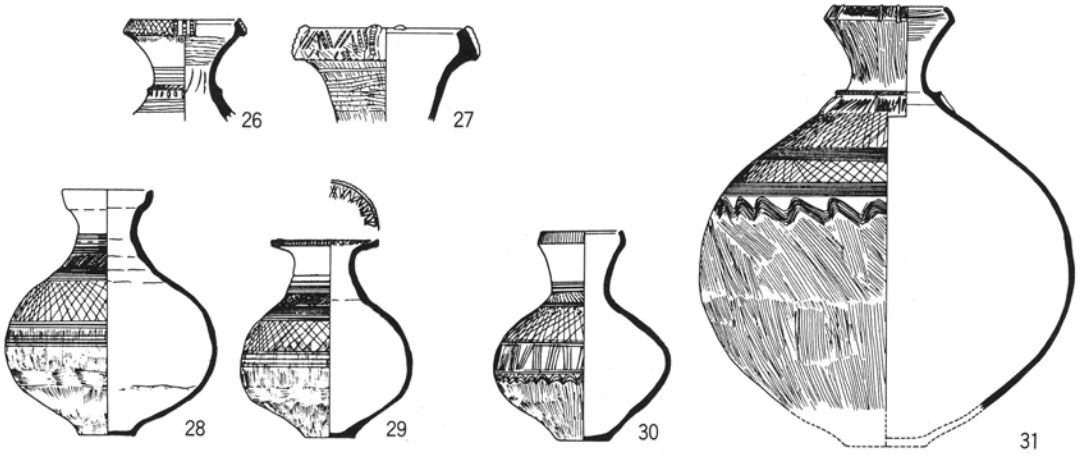


Fig.4　受口状縁壺及びその他　26～31 地蔵僧

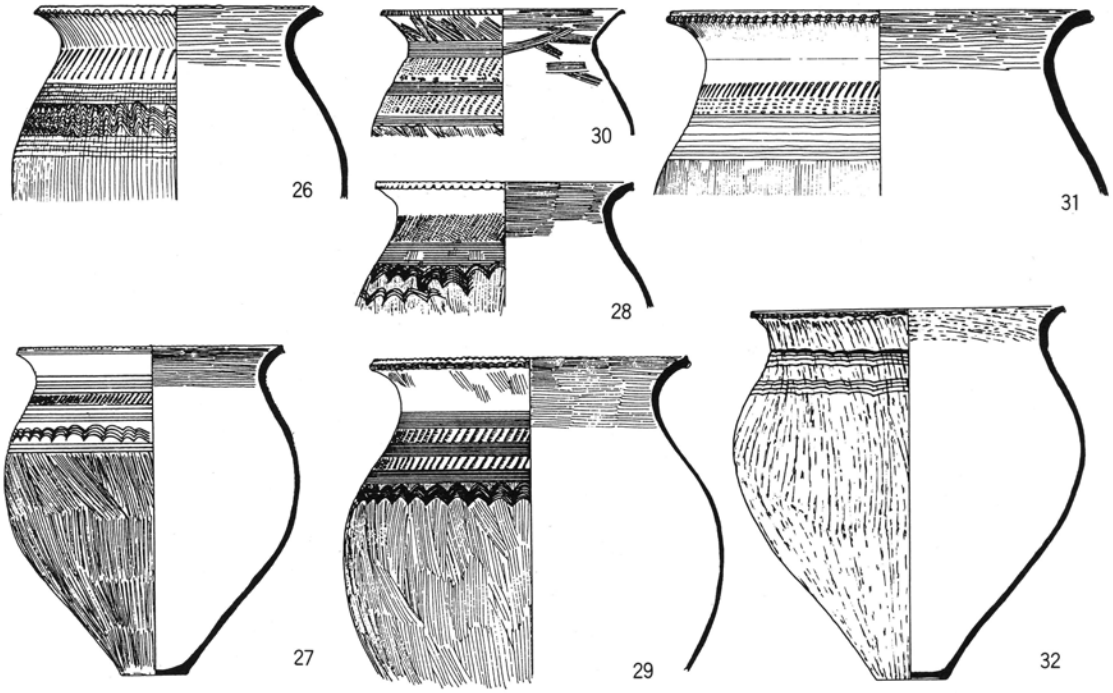


Fig.5　擬似近江系甕　26・31 辻の内　27～30 亀井　32 永井

Fig.5は32が中期３。他は中期４でいずれも擬似近江系甕。肩部の列点・直線（横ハケメと言うよりは紋様）・波状の各紋様の組み合わせのうち、直線と列点は基本となるようだ。口唇部の刻みも同様。Fig.6は33・34が中期２に属し、近江系甕Ｂ類の祖型になる。先に紹介したＡ類とは別系統（地域差）ということになるのであろうか。35～38は近江系甕Ｂ類としたもので、すべて中期４に属す。列点と直線の基本施紋に波状紋を加えるという在り方は、Fig.5・6の両者の系譜的関係が密接なことを物語っている。しかし、筆者の管見に上った限りでは、近江地方において擬似近江系の出土例はなさそうである。とりあえず、源流は近江にあると言うべきか。いずれにしても、甕を賑々しく紋様で飾り立てるのは縄紋的ではないか。

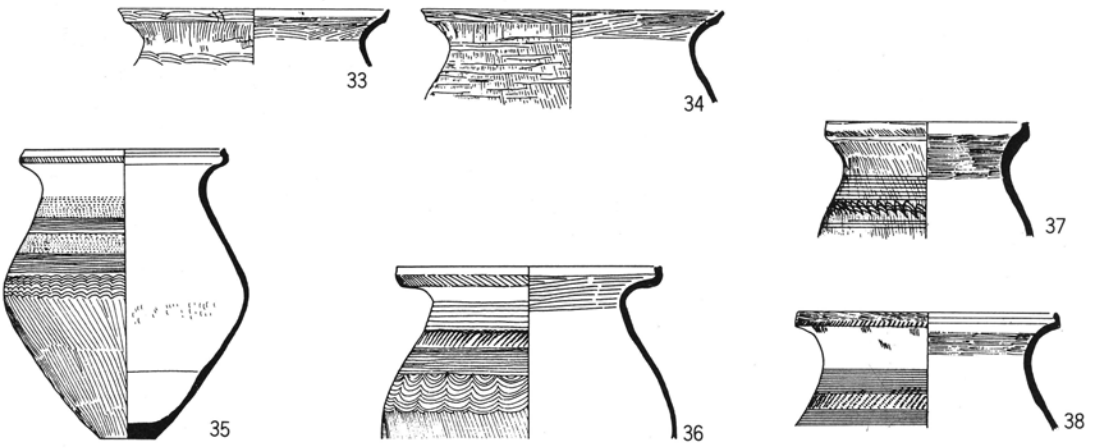


Fig.6　近江系甕Ｂ類　33～36 北切　37・38 亀井

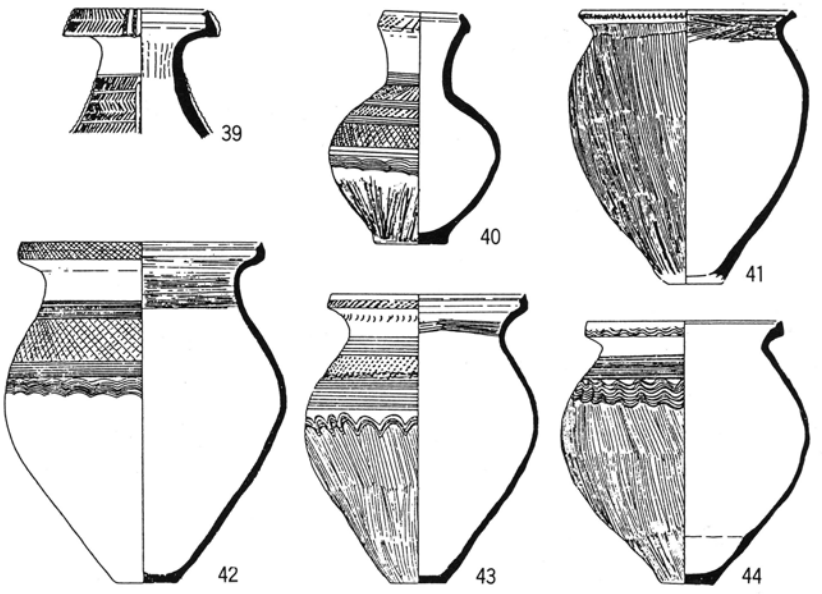


Fig.7　起Ａ遺跡ＳＢ-05出土土器

Fig.7は三重県鈴鹿市起Ａ遺跡SB05出土の土器である。中期４に属す。40はFig.4のグループに近い。42～44は近江系甕Ｂ類である。39はあまり類例のないものであるが、Fig.8の45を参考にすれば、大きくはFig.4のグループに入る。しかし、形態的に見て頸部の長頸傾向は東日本的な特徴と言えるのではないか。特に、頸部から肩部の段に注意が引かれる。Fig.8は全て尾張地方出土の土器である。47は要素がかなり消去されているので近江系甕の範疇から外れるが、受け口状口縁部と肩部の横ハケメ（直線紋というには躊躇する）に見られる共通性はどう見るべきか。あるいは、尾張地方で特徴的な内面ケズリ甕に受け口部を付加したものなのであろうか。

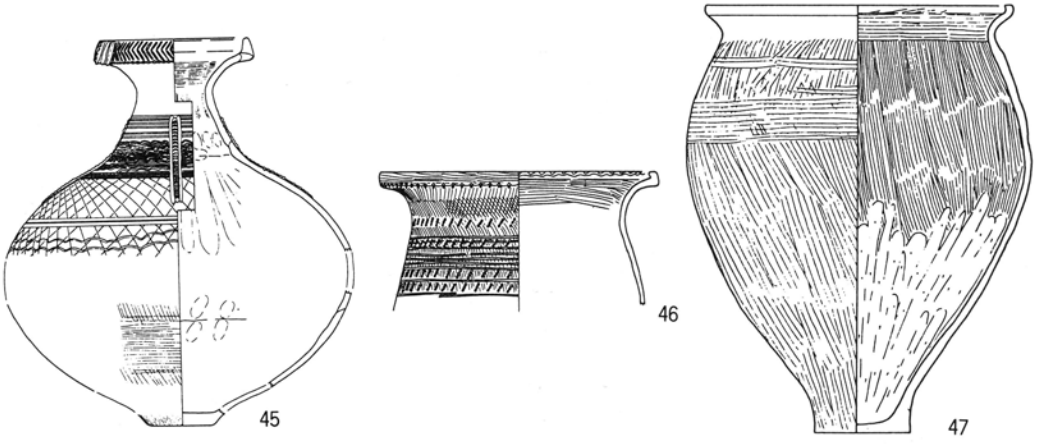


Fig.8　その他　44 阿弥陀寺　45 大渕　46 朝日

朝日遺跡の異形土器について

—鳥形土器を考えるにあたって—

飴谷　一

1．はじめに

本稿は、朝日遺跡から出土した「異形土器」を中心に、弥生時代の幾つかの遺跡から出土例の報告されている「鳥形土器」について若干の考察を試みるものである。

2．朝日遺跡の異形土器

この異形土器（図1）は、下半部が欠損しており、全体の形を知ることは困難である。しかし全体に空洞をなしていること、また下半部に連続する部分の残存状況から、下半部へは壺形土器の体部が続いていたと考えられる。以下、残存部を頭部と呼ぶ。

頭部は皮袋状のふくらみを呈し、その一端に注口をもつ。注口部に相対する尾部には空気孔のような小孔が穿たれ、頂部には刻み目をつけた突帯を付している。

法量は、最大長17cm、最大幅８cm、注口径５cm、である。

頭部は、側部を粘土板によって舟形につくった後、別の粘土紐で頂部をふさいで筒状にしている。

注口部、尾部の両付近は磨耗している。器面は刷毛状工具で調整した後、ナデ調整を施している。

この異形土器の頭部は、その形が従来報告されている弥生時代の「鳥形土器」[(1)]、さらには須恵器の「鳥形瓶」[(2)]にほぼ類似している。また刷毛調整やナデ調整にも、「鳥形土器」同様に鳥の羽を想わせるかのように施されている部分がある。よってこれが「鳥形」をなすものとみる。

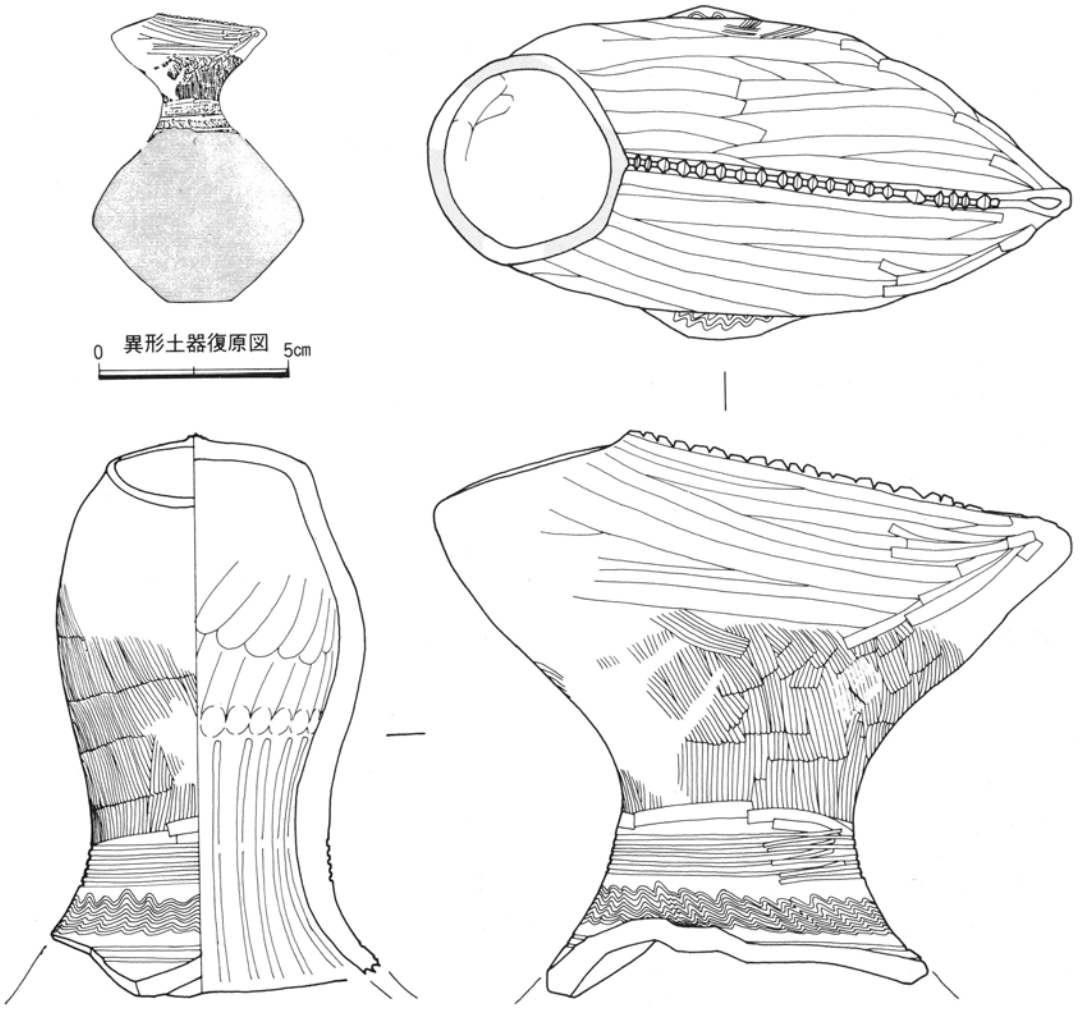
下半部が欠損していること、器形が特殊であることからこの土器の時期を決定することは難しいが、しかし文様構成や共伴遺物からみて弥生時代中期後半の高蔵式期頃に属するものと考える。

この異形土器は朝日遺跡61ＫＬ区で検出した溝（ＳＤ01）から出土した。この溝は、弥生時代中期の朝日遺跡では集落を囲む環濠の外（環濠の南側）に位置している。そしてこの時期には既に溝内に貝層が形成されていたことが調査で確認できた。このことから当時ＳＤ01は集落における廃棄物処理の場としての役割を担っていたと見られる。

3．弥生時代の鳥の表現方法

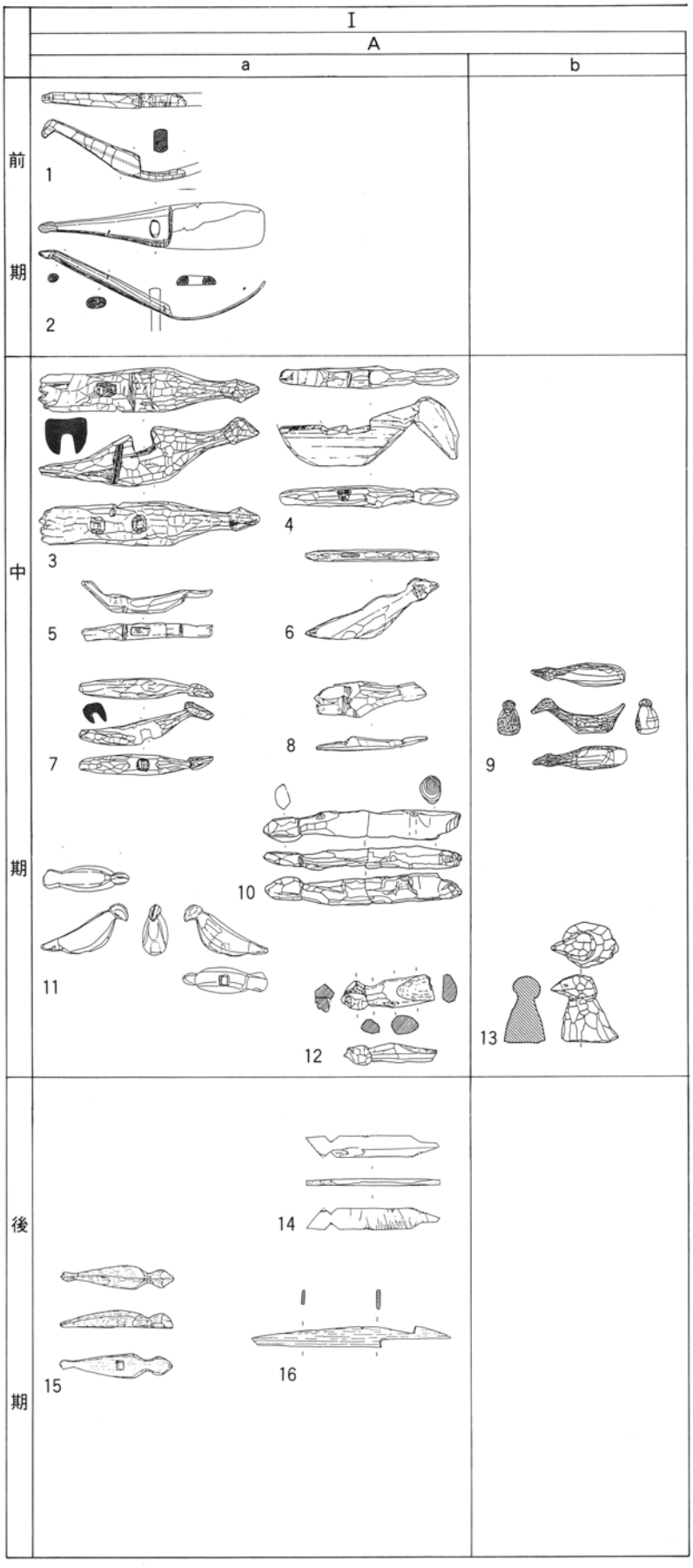
「鳥」のモチーフの多用は弥生時代に始まる。すなわち大陸からの稲作農耕文化の伝播に伴い、鳥は「穀霊を招く」存在[3]として人々に受け入れられたのである。このことは縄文時代の遺跡からは鳥をイメージした遺物は少ないが、稲作文化が基調となる弥生時代に西日本を中心として、それが多くみられる例からも窺うことができる。

弥生時代の遺跡から出土する鳥を表現した遺物は、鳥形木製品、鳥形土製品、鳥形土器がある。また鳥の線刻画やスタンプ文様を施した土器、銅鐸も加えることができる。

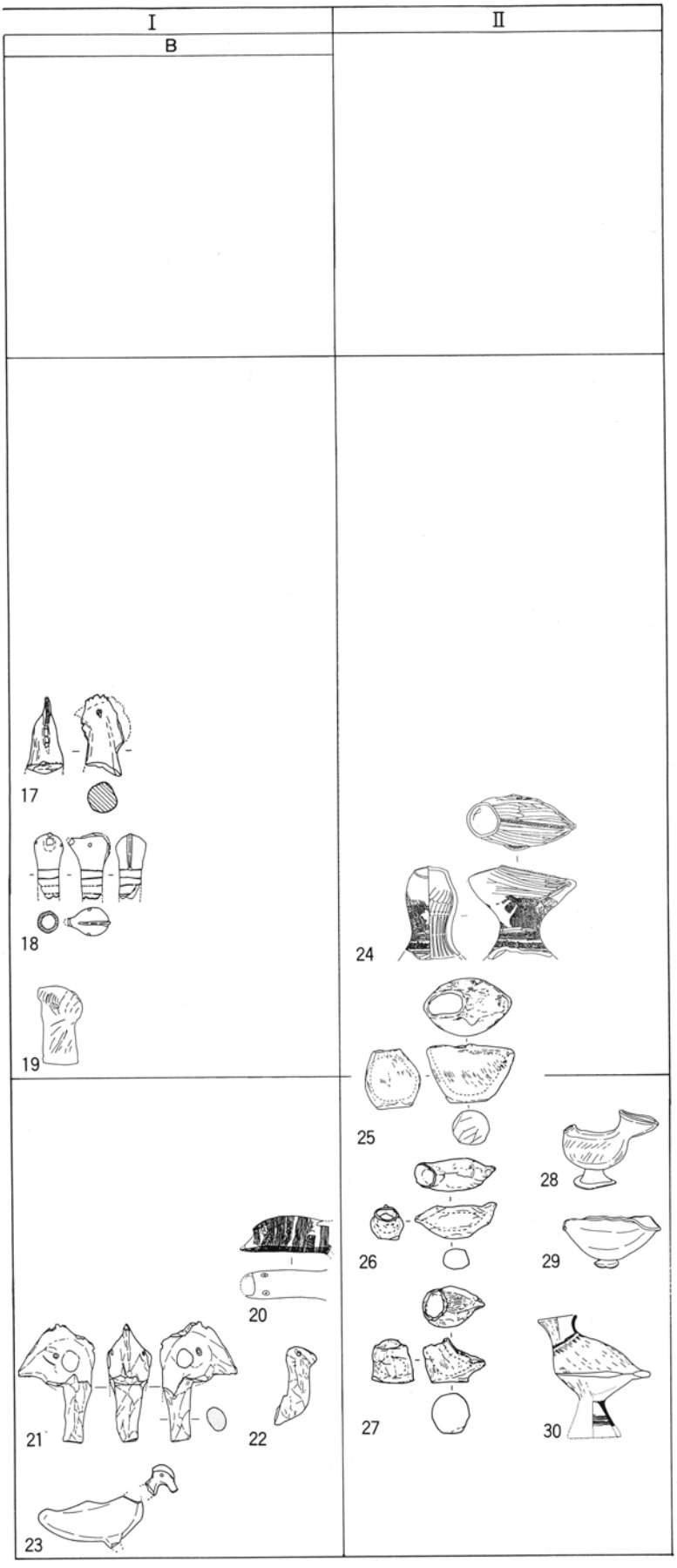


第1図　朝日遺跡61KL区出土異形土器

第2図　弥生時代「鳥形製品」分類図（井上義光氏作成の原図をもとに筆者改編）



第2図 (2)



遺跡名
1 山賀遺跡
2 西川津遺跡
3 ～ 8 池上遺跡
9 詫田西分貝塚
10巨摩廃寺遺跡
11亀井北遺跡
12・14瓜生堂遺跡
13宮ヶ久保遺跡
15・16・24～27
朝日遺跡
17中久世遺跡
18下稗田遺跡
19吉行遺跡
20瑞穂遺跡
21唐古・鍵遺跡
22・28漆町遺跡
23雲山鳥打遺跡
29中村松田遺跡
30蔵平遺跡

ここでは、「鳥」をイメージとして造形されたものを「鳥形製品」とよび、これを「鳥」として完結している鳥形木製品、鳥形土製品をⅠ類（以下両者を合わせて「鳥形模造品」と呼ぶ）、鳥のモチーフを容器に使用した鳥形土器をⅡ類とする。Ⅰ類は木製品と土製品とでは材質が異なっているので、木製品をⅠ—A類、土製品をⅠ—B類に区分する。

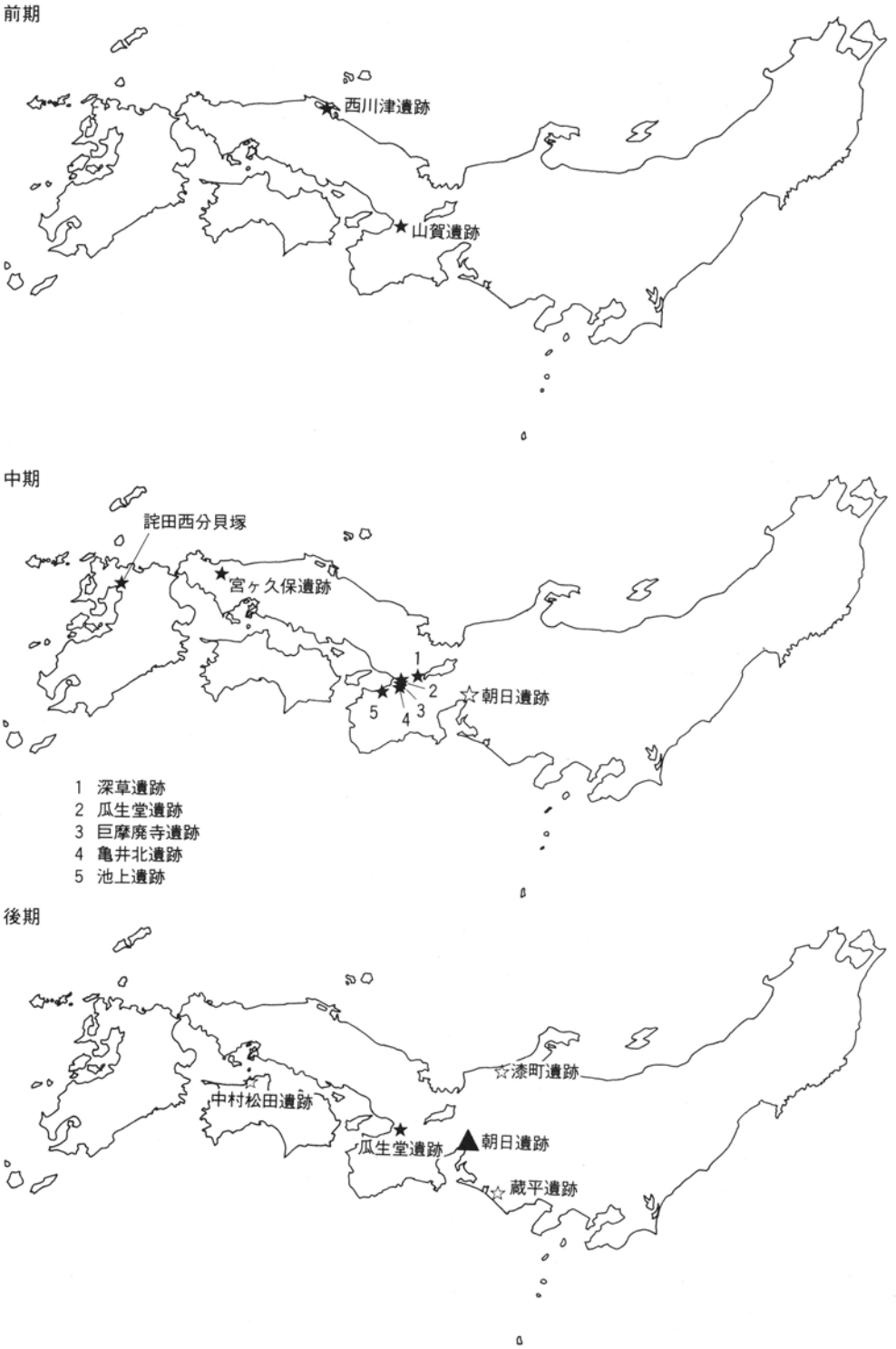
なお鳥の線刻画やスタンプ文様は、鳥を器物として表現したものではないので、この分類から除く。

Ⅰ—A類　井上義光氏の分類を援用[4]し、形態の差異から、「鳥の飛翔を表現したもの（池上遺跡出土例[5]）、「鳥の静止態を表現したもの（宮ヶ久保遺跡出土例[6]）の二種類に細分される。前者をⅠ—Aa類、後者をⅠ—Ab類とする。

Ⅰ—B類　鶏形土製品（唐古・鍵遺跡出土例[7]）と水鳥形土製品（漆町遺跡出土例[8]）の二種類がある。両種ともに全体の形が判るものが少なく、構造形態にも不明な点が多い。従ってここでは、二種類ある、というだけにとどめておく。



第3図　鳥形木製品、鳥形土製品、鳥形土器、鳥の骨出土地分布図



★鳥形木製品 ☆鳥形土器 ▲鳥形木製品と鳥形土器

第4図　弥生時代鳥形木製品と鳥形土器時期別分布図(時期区分は畿内の区分を用いた)

II類　脚部の有無はあるが、いずれも注口をもつ容器である。形態もⅠ—Ａｂ類と同じ鳥の静止態を表している。

今回報告した異形土器は、その形態から、「鳥形」の頭部（口縁部)をもった壺形土器、すなわち「鳥形複合壺」と考えられる。これは抽象化した「鳥」を容器の一部に取り入れたものである。よってここでいう「鳥形土器」の範疇に含むことができる。

以上の分類から、弥生時代の「鳥形製品」は、材質や形態の違いにより、使用形態や場所が異なっていたものと推察される。

4．鳥形土器についての考察

「鳥」の形を写しとった鳥形模造品との関連性をふまえ、弥生時代の鳥形土器について考えていく。

鳥形木製品（Ⅰ—Ａａ類）については、金関恕氏の研究がある[9]。氏はこれを「『魏志東夷伝』馬韓の条に見える蘇塗に関連」させ、「穀霊を招く鳥」としている[10]。

鳥形土製品は、今日までの資料が少なかったことから十分な研究がなされていない。ただ鶏形土製品については、「鶏が農耕儀礼のための犠牲禽であった可能性が強い[11]」ことから、農耕の節目の儀礼の際に「鶏の代役」として用いられたと考えられる。

農耕儀礼[12]の中で「鳥」は人間と「穀霊」との仲介をする重要な位置にあるとされている。鳥形模造品も、(民族例を含めた）民俗事例にみられるように、重要なものであった。さらに「鳥」に注目すれば、鳥をモチーフとした鳥形土器もそれと同等に扱われるものであった可能性が強い。

鳥形模造品が人間と「穀霊」を観念的に媒介する「もの」であるのに対し、鳥形土器は、農耕儀礼の場において人から人へ渡るという行為に伴って、人間と（神聖な液体と化した）「穀霊」とを媒介する「もの」であるといえる[13]。そしてこれらを出土する遺構は、集落を囲む環濠や居住区外の溝、廃棄（特殊）土坑といった生活から除外された場である。従って非日常的行為としての農耕儀礼の後に、そこで使われた鳥形土器は、鳥形模造品と同様、このような場所に投棄されたとみることができる。

最後に弥生時代の鳥形製品の分布状況について少し触れる。

現在まで鳥形木製品、鳥形土製品を出土した遺跡数は、前者が11、後者が８を数える。また鳥形土器の場合は４遺跡から出土している。興味深いのはそれらの多くが伊勢湾地方以西の西日本から出土していることである（鳥形模造品に限ればすべて西日本、図３参照)。この分布の範囲は奇しくも弥生時代前期の「遠賀川式土器」が波及した地域とほぼ重なる。

最近、東日本の弥生時代の遺跡でも水田跡がしばしば発見され、中には前期に遡ると言われているものもある。しかし土器や石器の組成からみて、なお前時代的特徴が色濃く残っているように見受けられる。つまり東日本へは稲作の技術のみが伝播し、西日本的性格を強くもった文化内容は伝播しなかったと考えられる。そのことは稲作農耕儀礼に欠くことのできない「鳥形製品」の分布からも窺われる。(ただ、群馬県御布呂遺跡から出土した鶏の肉塊は、「鳥形製品」に代わる「鳥」が東日本にも存在した可能性を示唆するものかもしれない。しかし、これは後期に下る資料なので、弥生時代の開始に遡ってこの考えをあてはめることは困難である。)

弥生時代の日本列島を概観するとき、西日本と東日本では、明らかに文化内容に差のあることに気がつく。その差異を示す資料は様々であるが、今回とりあげた鳥形土器もそのちがいを知る上で一つの重要な資料を提供したと言える。

今後、弥生時代の「鳥」を考える場合、そのような分布をもたらした要因も併せて考えていかなければならない。資料の増加を期待したい。

5．まとめ

以上の内容を要約すると次のようになる。

1．鳥形模造品が「鳥」を土や木などにうつしかえたものに対し、鳥形土器は鳥のモチーフを容器に採用したものである。

2．今回報告した異形土器は、その形態から鳥形土器の範疇に含むことができる。「鳥形複合壺」である。

3．鳥形模造品は人間と「穀霊」を観念的に媒介する「もの」であるのに対し、鳥形土器は人間の行為に伴い、それらを物理的に媒介する「もの」である。

4．鳥形土器は、その分布状況から、鳥形模造品同様、弥生時代における西日本の特色の1つである。

本稿を作成するにあたり、母校奈良大学の水野正好、酒井龍一両先生より資料の提供や数多くの有益な御教示をいただいた。記して謝意を表する。

1988．2．5

〔注〕

(1) これまで「鳥形土器」を報告している調査例は、朝日遺跡（加藤安信他「土製品」『朝日遺跡』愛知県教育委員会　1982)、蔵平遺跡（柴田稔「静岡県蔵平遺跡発見の鳥形土器」『考古学雑誌』第66巻第1号　1980)、中村松田遺跡（月刊文化財発掘出土情報10　1987)

(2) 原口正三　1979　「須恵器」『日本の原始美術』4　講談社

(3) 金関　恕　1982　「神を招く鳥」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』　平凡社

(4) 井上義光　1985　「祭祀研究の一視点　—鳥形模造品を中心として—」『末永先生米寿記念献呈論文集』明新社

(5) ㈶大阪文化財センター　1978　『池上遺跡』　第4分冊の2「木器編」

(6) 中村徹也　1979　「木製品動物群と土器に装飾された動物文—山口県宮ヶ久保遺跡」『考古学雑誌』第65巻第3号

(7) 寺沢　薫　1980　「唐古・鍵遺跡第10次・11次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』奈良県立橿原考古学研究所編

(8) 石川県立埋蔵文化財センター　1982　『漆町遺跡』

(9) 注③参照

(10) 金関氏とは別に水野正好氏は、「村境にあった鳥居の上に立てられていた」とみている（水野正好　1982「弥生時代のまつり—その成立と展開—」『歴史公論』第8巻第9号

(11) 古代学研究会　1987　「鶏の考古学」〈シンポジウム〉　『古代学研究』114号

(12) 金関　恕氏は鳥取県淀江町稲吉遺跡出土の壺形土器に描かれた線刻画を解釈し、弥生時代の農耕儀礼のあり方を捉えようとした（金関　恕　1985　「考古学から観た古事記歌謡」『天理大学学報』145)

(13) 水野正好氏の御教示によれば、「古代において鳥形土器は水鳥を形どったものであった。それは祭の宴に使われ、そこに注がれた液体（酒）を飲むことにより体の内面が浄められる、と信じられた。また水鳥が「霊の放鳥」と呼ばれていたことから、祖霊を迎える儀式に用いられた」といわれる。

〔引用文献〕

行橋市教育委員会　1983　「下稗田遺跡発掘調査概報Ⅳ」

㈶大阪文化財センター　1981　『巨摩・瓜生堂』

〃　1983　『瓜生堂』

〃　1983　『山賀』その2

〃　1986　『亀井北』その3

瀬川芳則　1983　「稲作農耕の社会と民俗」『稲と鉄』（日本民俗文化大系3）小学館

春成秀爾　1987　「銅鐸のまつり」国立歴史民俗資料館研究報告　第12集

宮腰健司　1986　「祭りと道具」『埋蔵文化財　愛知』No.7

吉田富夫　1937　「尾張国瑞穂発見の動物形土器」『考古学』8・9

月刊文化財発掘出土情報　1983　5月号

〃　1984　6月号

〔追　記〕

「鳥形製品」の分類図に、鳥形土製品（Ⅰ－B類）の追加資料として南東山遺跡（愛知県春日井市）出土例をあげておく。これは「水鳥の特徴をよくとらえている」と報告されている。（宮川芳照「鳥形土器」『南東山遺跡』（春日井市遺跡発掘調査報告第4集）春日井市教育委員会　1970)

朝日遺跡出土の外来系土器について—2—

宮腰健司

I

外来系土器の中には、①直接搬入されたものと、②それらをモデルとして在地で製作されたものがあり、②の受容の仕方としては、Ⓐ新出のものとして在来の器種組成の中に組み入れられたり取って変わったりして、部分的に変容しながらも在地化してしまうもの、Ⓑ模倣はされるが器種組成には組み入れられないもの、Ⓒ部分的なところでの模倣が行なわれ、それが器種組成の中に組み入れられるもの、Ⓓ部分的なところでの模倣が行なわれるが、器種組成の中には組み入れられないものがある。ただそれらの区分は、—1—でも述べられていたとおり、明確にはされておらず、多くの問題が含まれている。また、朝日遺跡が位置する尾張地方においては、外来系土器が進出した次の段階には在地化するという現象が幾度となく生じており、後期にいたると縄文時代又は弥生時代前期からの型式的な連続性を保つ純粋な意味での在地土器はみられなくなってしまい、ますます外来系土器の抽出を困難・複雑なものにしている。今回この文においては、朝日遺跡で出土し、昭和62年度までの整理中にピックアップされた後期以降土器のうち、比較的選出しやすい①、②—Ⓑのみを取り上げることとした。また、外来系の区別は土器型式の上での区分であり、胎土については深く言及し得ていない。

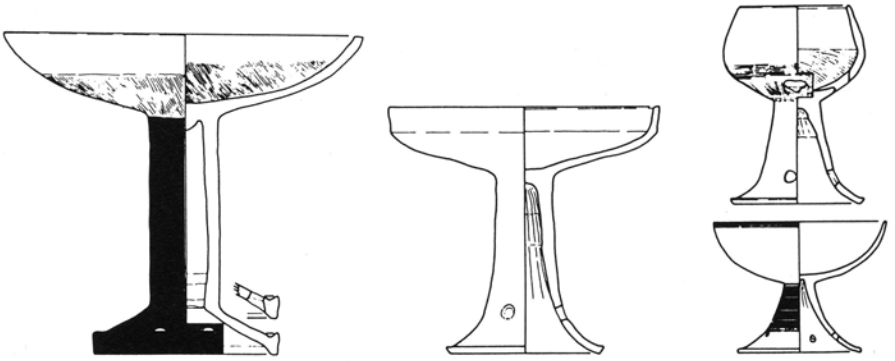
II

現在朝日遺跡で出土している外来系土器を大きく、1—畿内系土器、2—近江系土器、3—北陸・山陰系土器、4—伊勢湾東部系土器の4地域に分ける。また時期区分は弥生時代をⅠ～Ⅵ期に分け、元屋敷古期をⅦ期、中期をⅧ期として記述していきたい。

1．畿内系

Ⅴ期—畿内系の影響が大きく現れるのがⅤ期前半であり、Ⅳ期にみられた大規模な波及の第二波といえる。高杯・長頸壺・器台が大きく変化する器種としてあげられ、搬入土器と思われるものも何点か出土している。そしてそれらの土器はⅤ期後半には在地化し、外来系土器としては扱えなくなってしまい、東海地方に広く分布していく。

Ⅵ期—Ⅵ期後半には、南居住域の内環濠より第1図1のタタキが施されている甕や、第1図2の高坏が出土しているが、量的には極僅かであり、Ⅴ期までの圧倒的な影響はみられなくなる。またこれらは搬入土器であると思われる。



第１図　SX162出土土器(1:6)

Ⅷ期―小型精製土器を始め、畿内系の影響が再び強くなり、柳ヶ坪型壺にと関連づけられる二重口縁壺（第２図１）の出現や、布留式甕（第２図２）が出土している。

２．近江系

尾張に隣接しており、後期以降の当地に多大な影響をもってくる地域として重要な位置を占めているものと考えられる。

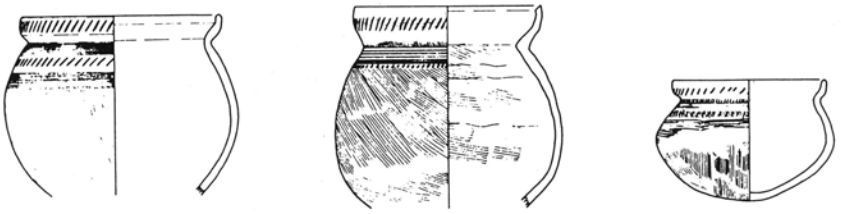
Ⅴ期―近江型の受口鉢がⅤ期に現われてくることは確実であるが、それが前半になるのか後半になるのかは不明である。

Ⅵ期―近江型の受口甕がこの時期に尾張に現われ、Ｓ字状口縁甕の成立を始め大きな影響を与えたものと考えられるが、Ⅵ期のどの時期に流入するのかについては不明である。

３．北陸・山陰系

本来ならば北陸系と山陰系とに分けなければならないところであるが、区別し得ていないので、ここではとりあえず同一地域として取扱う。

Ⅵ期―南居住域の内環濠より出土した台付壺の台（第１図４・５）は、有段をなす台部口縁に擬凹線が廻り、同じ形態の口縁部をもつ壺が上部に付くものと思われる。甕（第１図３）は倒卵形の体部をもち、口縁外面に粘土を貼付し有段口縁状の形状を作り出している。



第２図　朝日遺跡出土の近江系土器(1:6)

Ⅶ～Ⅷ期―外反する杯部をもつ高坏（第２図３）や、有段口縁をもち球形の体部をなす甕（第２図４）があり、双方とも搬入土器かと思われる。

３．伊勢湾東部系

漠然とした地域区分であるが、遠江を中心とした地域を設定し、これに三河地域も加えたい。

Ⅵ期―第１図の６・７は施文方法などに東海東部系の影響を受けているもので、61Ｌ区ＳＺ01より出土している。

Ⅶ～Ⅷ期―下体部が明確に屈折したり、口縁部が折り返されるような壺（第２図５・６・７）をこの地域のものとしてあげたい。

Ⅲ

次に、弥生時代後期以降の朝日遺跡を遺構の推移からたどるとどのような変遷を示すかみてみたい。

Ⅴ期―前半にはⅣ期以来の不安定さが続いており、西及び北墓域に方形周溝墓が築かれるのみである。

後半には、北・南の居住域に環濠が廻らされ、その掘削に前半期の方形周溝墓の溝を利用したり、切断したりしている。当初は１条だけで内側のものより作られており、Ⅴ期末かⅥ期に外側のものが付加されたと考えられる。

Ⅵ期―Ⅵ期前半については不明な点が多く、良好な資料については未検出である。

後半には、北居住域に２条及至５条、南居住域には２条の環濠が廻らされる。南居住域では環濠によって突出部や交錯する出入口が作られており、強固な防禦体制が敷かれていたことが考えられる。しかしこの体制も、Ⅵ期の終りには、環濠への土器の大量廃棄という現象をもって途絶し、61Ｌ区ＳＺ01にみられるように、環濠内にも造墓が行なわれ、環濠の機能停止・集落の縮小を窺わせる。また、弥生時代中期には墓域として用いられていた東微高地に、Ⅵ期の土器が廃棄された溝や井戸状遺構が検出されており、南・北居住域の縮小に伴った集落の分散と考えてよいであろう。

Ⅶ～Ⅷ期―北居住域は不明であるが、南居住域での生活の痕跡はほとんどみられなくなり、Ⅵ期後半に分散した東微高地上に生活の場が続けて営なまれたと思われる。また、弥生時代中期の大型方形周溝墓の周溝が窪地状に残っている場所に土器廃棄を行ったり、周溝を繋げることにより溝を作ったりしている。

以上朝日遺跡の弥生時代後期以降の画期をまとめると下記のようになる。

１．Ⅴ期後半の環濠掘削

２．Ⅵ期後半の環濠への土器廃棄、集落の縮少・分散化

Ⅳ

いままでに外来系土器の推移と遺跡の変遷を述べたが、以下この両者がどのように関連して動いていったか、推定されるところを記してみたい。

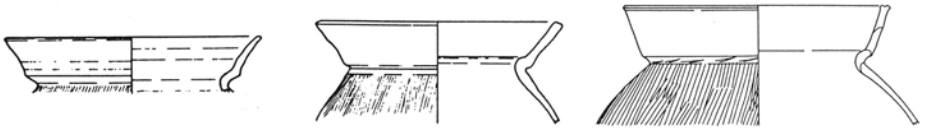
○ＳＸ162より出土した一群に代表される畿内系土器の影響がみられ始めるのはⅤ期前半であり、当初は搬入土器のかたちで朝日遺跡に出現し、その後Ⅴ期後半の土器群を決定づけるのに多大な力をもっていたと考えられる。このことは、Ⅵ期後半に再度構築される〝環濠集落〟に対峙するものが畿内系土器をもつ集団以外であった可能性を示唆しているものと思われる。

○次に外来系土器がみられるのはⅥ期後半である。ただしこれらの一群はⅤ期前半のような衝撃を朝日遺跡の土器には与えておらず、畿内系土器にみられるような搬入土器としてとか、北陸・山陰系土器にみられる折衷土器として採用されるだけで、唯一器種組成の中に影響を与えたものは近江系土器である。このことはⅥ期後半の土器型式が外来系土器の影響を受けず在地の中より生まれてきたことを示しており、その分布から伊勢湾や遠江までの地域に多大な影響力をもっていたことを窺わせている。この在地の力や一体化を作り出したものは、環濠を用した紛争であり、その紛争後Ⅵ期後半土器群が出現してくるものと思われる。逆に言えば、Ⅵ期前半は紛争が生じている混沌の時期とも言える。

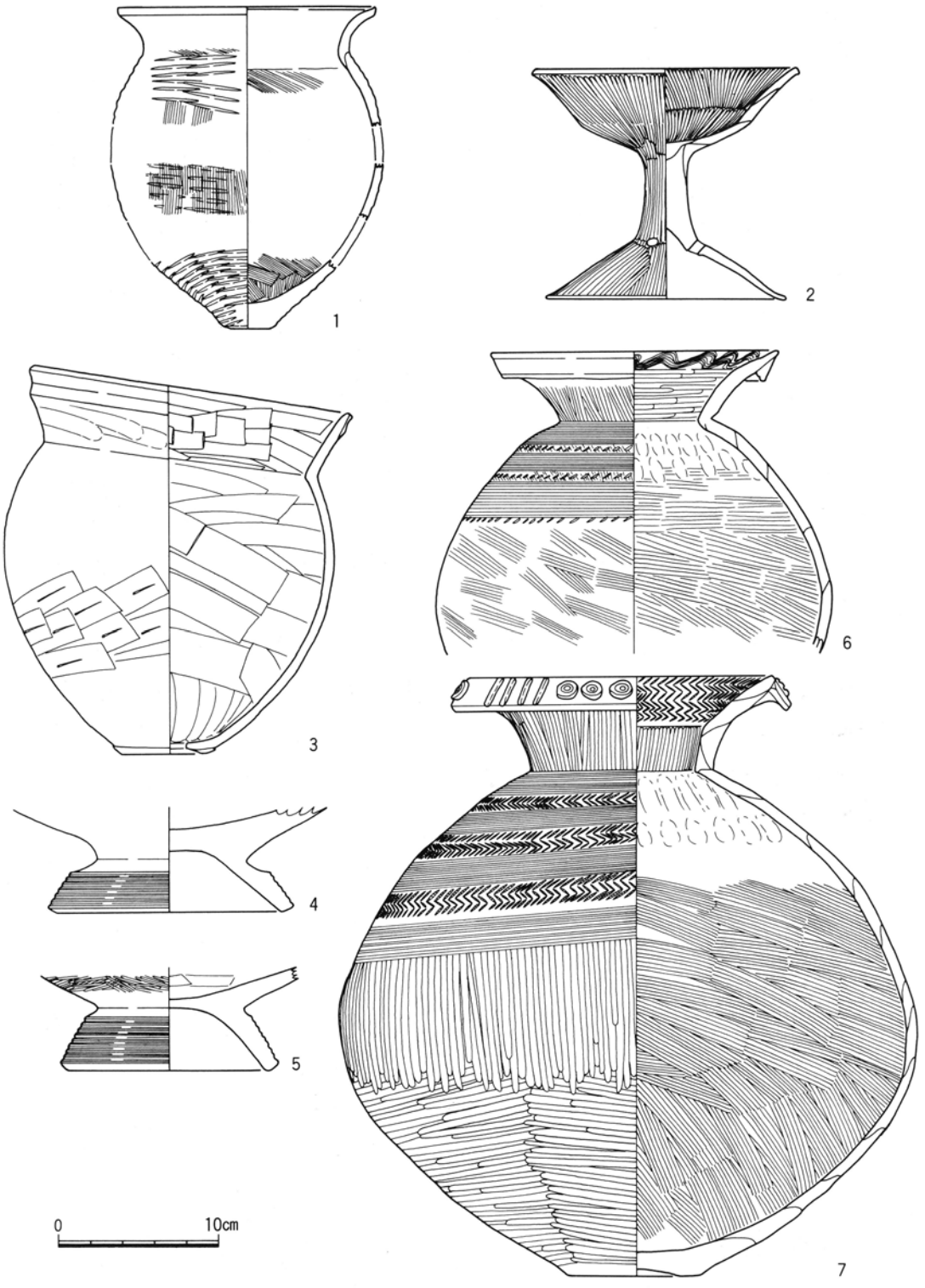
また、Ⅵ期後半の外来系土器は、環濠や周溝墓の周溝への大量廃棄の中より出土しているが、このことは大量廃棄の原因となったものの中に土器の交流によって示される外的な要因があった可能性を示唆しており、この土器交流にみられる広範囲な動向が次のＳ字状口縁甕Ｂ類に代表されるⅦ期に繋がっていくと考えられる。つまり、Ⅵ期後半という時期を生み出した要因と、Ⅶ期を生み出した要因とは質的に相違するものであったことが考えられるのである。

○Ⅷ期には、畿内系土器の二重口縁壺や小型精製土器、及びその影響を受けた柳ヶ坪型土器や、北陸・山陰系土器の影響を受けた有段口縁とＳ字状口縁甕の体部との折衷甕等にみられるように、土器の交流が盛んになり、大きな画期のあったことが窺われる。

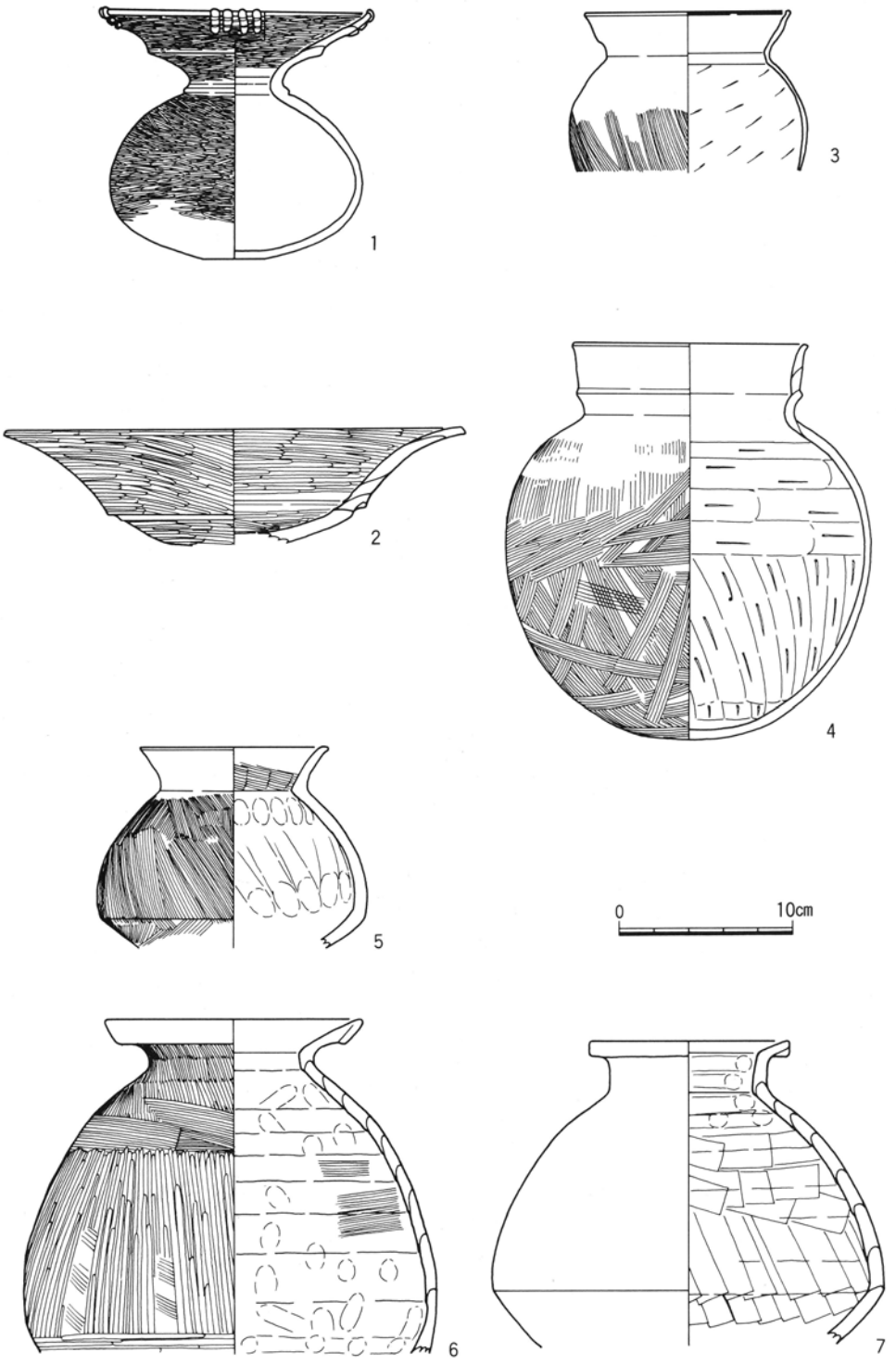
以上、朝日遺跡の後期以降の外来系土器についてまとまりのない記述をしてきた。またこれらのものは整理中であり、点数も少いことから、様相が変わることも多々考えられるし、詳細な器種分類やその消長を追うことによりもっと明確な外来系土器の区分をしなければならない。今後の検討課題として報告書を待ちたいと思う。　(つづく)



第３図　朝日遺跡出土の有段口縁をもつ折衷甕(1:6)



第4図　朝日遺跡出土の外来系土器（Ⅵ期後半）



第5図　朝日遺跡出土の外来系土器(Ⅶ～Ⅷ期)

図版番号	地区・層位	法　量(cm)	口頸部	体　部	底部(脚部)	色調・胎土	残存度
第1図 1	61D SD03上層	口径15.7、器高(19.8) 最大径(16.7)、器厚0.6	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ	外—タタキ後ハケ 内—ハケ又ナデ	外—ナデ 内—ハケ	淡橙褐色 1～2mの砂粒を含む	1/12以下
〃 2	61D SD03上層	口径16.1　器高14.3 底径15　器厚0.4～0.6	外—ナデ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ・ナデ・透し穴3方向 内—ヨコナデ	淡褐色 細かい砂粒・雲母を含む	口縁・体部4/5 脚部欠損
〃 3	61J SD02	口径—　器高— 底径13.7　器厚1.2	—	外—ナデ・ヘラミガキ 内—ナデ	外—擬凹線 内—ヨコナデ・ナデ 底部別粘土貼付	外—丹彩、内—灰褐色 0.5mmの白色・石英砂粒を含む	底部のみ
〃 4	61J SD02	口径—　器高— 底径12.2　器厚1.2	—	外—ナデ・ヘラミガキ 内—板ナデ	外—擬凹線 内—ヨコナデ・ナデ 底部別粘土貼付	外—丹彩、内—灰褐色 1mmの白色砂粒を含む	底部のみ
〃 5	61J SD02	口径19.6　器高22.8 最大径20.4　器厚0.5	外—ヨコナデ 内—板ナデ	外—ケズリ・ナデ 内—板ナデ	別粘土貼付 底部穿孔	淡橙褐色 1mmの白色・黒色・褐色砂粒を含む	完形
〃 6	61L SZ01	口径18　器高— 最大径25　器厚0.7	外—ヨコナデ 内—クシ波状、ヘラミガキ	外—横線後刺突ハケ・丹彩 内—ユビナデ・ハケ	—	淡褐色 1mm以下の砂粒を含む	口縁4/5 体部1/3
〃 7	61L SZ01	口径18.7　器高37.5 最大径35.7　器厚0.7～1	外—ヨコナデ、棒状浮文4、円形浮文4、4対 内—刺突、ヘラミガキ	外—横線後刺突、ヘラミガキ 内—ユビナデ、ハケ	外—ヘラミガキ 内—ハケ	淡褐色 2～4mの砂粒を含む	口縁1/3 体部完形
第2図 1	62I SK01上層	口径15.0　器高14.3 体部最大径14.4 器厚0.4	外—ヘラミガキ後棒状浮文4、4対 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ 内—ナデ	外—ヘラミガキ 内—ナデ	灰橙色 1～3mm白色・黒色・雲母砂粒を含む	口縁3/4 体部完形
〃 2	61U SD02	口径25.9　器高— 最大径—　器厚0.7	外—ヘラミガキ 内—ヘラミガキ	外—ヘラミガキ後屈曲部ナデ、 内—ヘラミガキ後屈曲部ナデ	—	淡黄褐色 2mmの白色砂粒わずかに含む	坏部完形
〃 3	62I SK01上層	口径11.7　器高— 最大径13.6　器厚0.3	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ 端部肥厚	外—ハケ 内—ヘラケズリ	—	灰黄色 1～3mmの白色・黒色・雲母砂粒を含む	口縁1/4 体部3/4
〃 4	61T SD02	口径13.2　器高22.3 最大径20.8　器厚0.4	外—ヨコナデ 内—ヨコナデ	外—細いハケ 内—横位のヘラケズリ	外—細いハケ 内—縦位のヘラケズリ	淡茶褐色 1mm以下の石英、3mm以下のチャートを含む	全体1/6
〃 5	61T SD02	口径10.6　器高— 最大径15.5　器厚0.6	外—ヨコナデ 内—ハケ後ヨコナデ	外—細いハケ 内—ユビナデ	—	灰白色 0.2mmの白色砂粒を多く含む	全体1/3
〃 6	61T SD02	口径14.5　器高— 最大径23.6　器厚0.7	ヨコナデ 粘土折り返し	外—ハケ後ヘラミガキ 内—ユビナデ	—	赤褐色 3mm以下の白色砂粒をわずかに含む	体部のみ
〃 7	61T SD02	口径11.4　器高— 最大径22.4　器厚0.8	ヨコナデ 粘土貼付	外—ハケ後ナデ 内—板ナデ	—	淡褐色 0.1～0.5mmの石英砂粒を多く含む	口縁2/3 体部1/3

第1表　土器観察表

清洲宿についての一考察

中　野　良　法

1．清洲宿の概要

昭和61年から行われた五条川河川改修に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査において、江戸時代以降の遺構・遺物が確認された。この時期の遺構・遺物が検出された調査地点は61A区、62C区、61B区である（第1図）。これらの地区は江戸時代に清洲宿の町並が形成されたところである。

1610年（慶長15年）から行われた清洲城及び城下町の名古屋移転（いわゆる「清須越」）ののち、その故址に1616年（元和2年）、名古屋と大垣を結ぶ美濃街道の宿駅として、清洲宿が桑名町に設置された。1624年（寛永元年）には本成寺を建立し、久証寺を甚目寺から移転させるなど町としての様相を確立していった。1668年（寛文8年）、火災のため宿駅を神明町に移転した。第1図は天保年間に作られた「清洲宿詳細図」(1)及び「清洲町史」を基に作製したものである。当時旅篭は15軒、揚屋・置屋が40軒ほどあった。明治に入り、政治体制が変革するとともに、1871年（明治4年）清洲邑宰所（旧代官所）が廃されるなど清洲宿の政治的な重要性の衰えが窺われる。その後、1886年（明治19年）には東海道線が敷設されると、清洲宿の運輸面の衰退も窺われる。また1891年（明治24年）の濃尾地震により清洲周辺も多大な被害を受け、宿場の衰退に拍車をかけた。



第1図　清洲宿主要施設配置図

2．遺構が語るもの

清洲町では、現在も宿場の町屋が残されていたり、美濃街道が生活道路として重要な位置にあるなど、清洲宿当時の生活面と現代の生活面がほぼ同レベルに存在すること、また土地事情や開発などによる掘削によって、宿場町の遺構の残存状況はあまり良好とはいえない。この2年間の発掘調査では、井戸・廃棄土坑・溝など比較的深く掘り込まれた遺構しか確認しえなかった（第4図）。したがってここでは溝・井戸・廃棄土坑から発掘調査地区での宿場町の地割を想定してみたい。

61A区では4箇所の地割が想定される。いずれも溝によって区画され、井戸または廃棄土坑が配されている（第2図）。それはSD01によって区画され、SE01を含む地区、SD01・03・07・SK33によって区画され、SK01を含む地区、SD03・07によって区画され、SE11を含む地区、SK33・SD06によって区画され、SK02・SE02・03・04を含む地区である。この調査区の地割は、長方形を示す箇所、正方形を示す箇所が組み合わされた不整区割が想定される。

62C区では大きく3箇所の地割が想定される。それはSE04・13・14によって構成された地区、SE06・10・11によって構成された地区、SE05・08・09によって構成された地区である。これらの井戸群はいずれも3基づつの切り合い関係にあり、段階的に南に移行する傾向を示している（第3図）。SE14及びSE11は、現存する美濃街道からの距離がほぼ等しい。SE13及びSE10、SE04及びSE06の位置関係もほぼ等しい。したがって、62C区では、短冊型の地割が少くとも3箇所想定される。

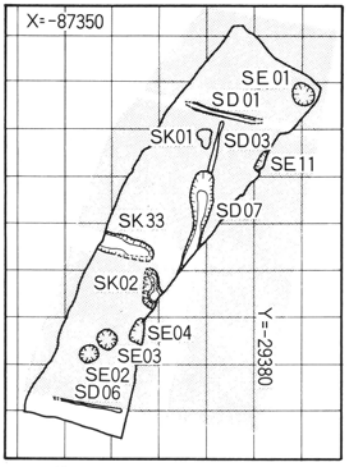
61B区ではSK45のみであるため、この調査区は町屋が展開する区域の外側にあたると思われる。

3．出土遺物

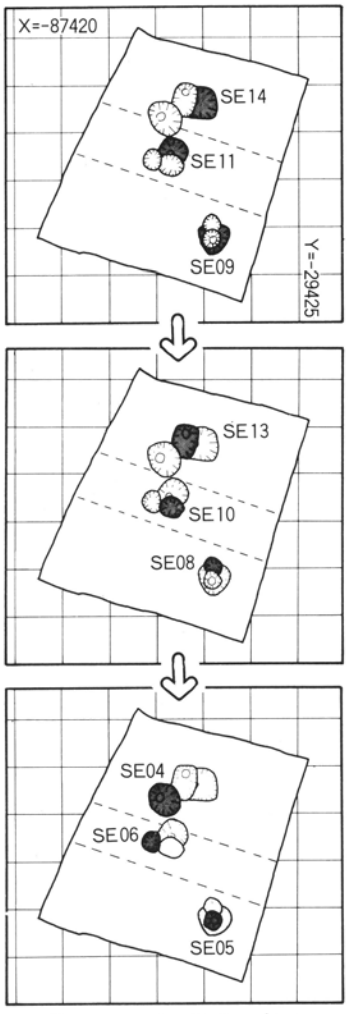
ここでは主な遺構から出土した遺物を紹介する。いずれの遺構も・瀬戸・美濃系の陶磁器が大多数を占める。

61A区SK01からは陶器・磁器ともに椀類（第6図1・2）、皿類（第6図4・5）、瓶類（第6図10・11・12）、灯明具（第6図8・9）、蓋類（第6図6）、蓋物（第6図7）などの日用雑器がほとんどである。いずれも瀬戸・美濃系で、第6図8・12は磁器である。第6図3は産地は不明であるが、文様を全て細い線で描いた、造りの丁寧な磁器である。SK02では陶器の椀類（第6図13・14・15・16）が多くを占める。他には皿類（第6図17・18）、鉢類、灯明具などがあり、この遺構も日用雑器がほとんどである。第6図にあげた遺物はいずれも瀬戸・美濃系の陶器である。

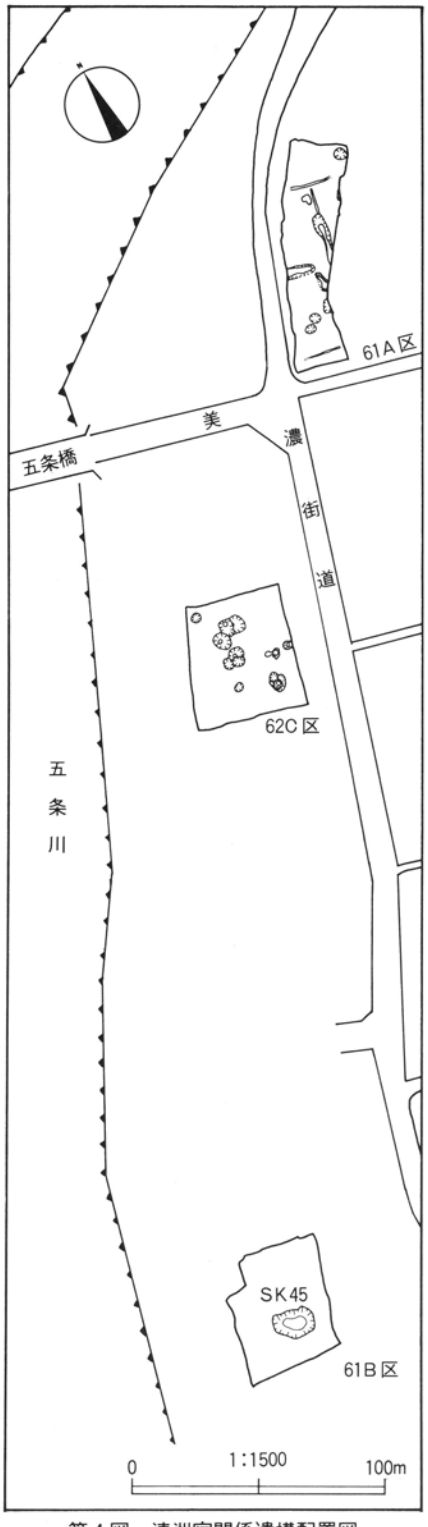
61B区SK45は、61A区SK01・02に比べ遺物がかなり多量に出土した。㈶愛知県埋



第2図　61A区地割想定図



第3図　62C区地割想定図



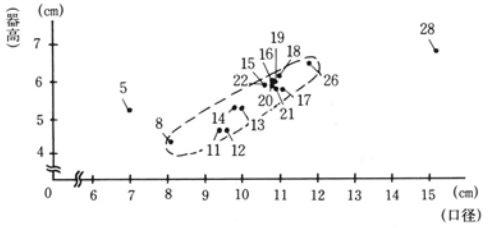
第4図　清洲宿関係遺構配置図

表－1　61A区ＳＫ01出土磁器椀（瀬戸・美濃系）計測値

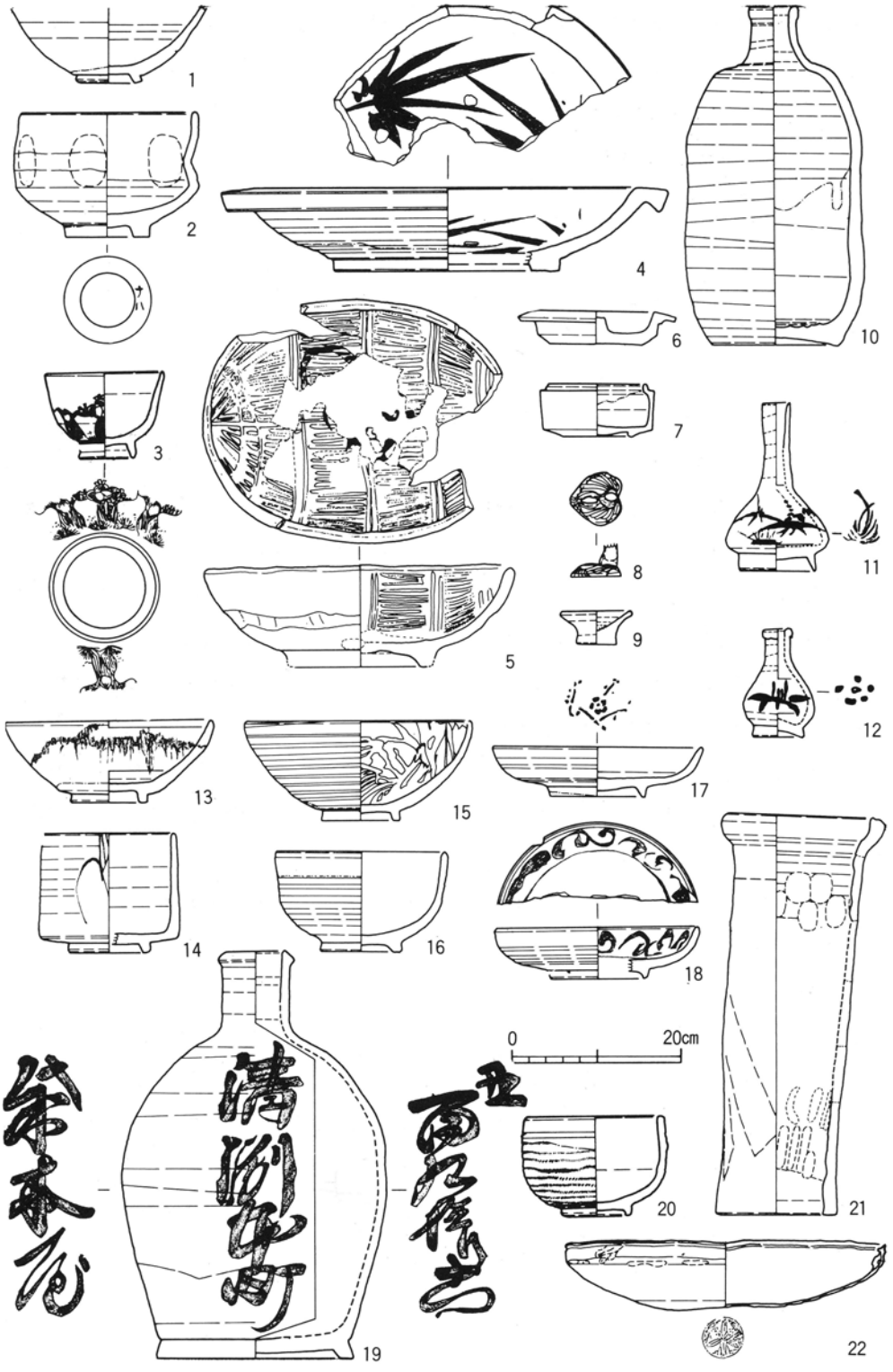
（単位はcm）

遺物番号	口径	底径	器高	文　様	備考
第５図－１		2.0			Ⅰ類
2		2.6		源氏香に植物文	〃
3		2.1			Ⅱ類
4		2.8		花文	〃
5	7.0	3.4	5.15	宝珠文	〃
6	7.6			鳥文	〃
7		6.0		笹文	〃
8	8.1	3.0	4.3	花文	Ⅲ類
9	8.7			渦文	〃
10		3.3			〃
11	9.4	4.0	4.6	蝶文	〃
12	9.6	4.0	4.6	梅花文	〃
13	10.0	3.9	5.2	花に蝶文	〃
14	9.8	3.6	5.2	花文	〃
15	10.6	4.0	5.8	山水と漢詩文	〃
16	10.8	4.1	5.95	芒文	〃
17	11.1	4.0	5.7	菊唐草文	〃
18	11.0	4.0	6.05	植物文	〃
19	10.9	4.2	5.9	菊文	〃
20	10.8	4.4	5.8	笹文	〃
21	10.9	4.3	5.7	丸文	〃

遺物番号	口径	底径	器高	文　様	備考
第５図－22	10.6	4.2	5.8	丸文	Ⅲ類
23		4.2		唐草文	〃
24		4.3			〃
25		4.3		雲に縦線文	〃
26	11.8	5.0	6.4	花文	〃
27		4.7		植物文	〃
28	15.2	5.8	6.7	花と文字文	Ⅳ類
29		3.0		植物文	Ⅴ類
30		3.3		植物文	〃
31		3.0		源氏香に河骨文	Ⅵ類
32		6.0			Ⅶ類



第５図　61A区SK01出土磁器椀（瀬戸・美濃系）（1:4）



第6図　主な遺構の出土遺物(1～20は1:4、21・22は1:8)

蔵文化財センターの「昭和61年度年報」に概要を記してあるため、ここではごく一部を紹介しておく。第6図19にみられるように、比較的法量の大きい瓶類（通称「通い徳利」）には屋号・町名・番号が必ず記されている。第6図19は呉須を使用しているが、他に鉄釉などもみられる。瀬戸・美濃系である。第6図21は、常滑系のいわゆる「アカモノ」と称される非型押しの土管である。第6図22は土師器ナベ（焙烙ナベ）である。

第6図20は、62C区SE04出土の椀（鐙茶椀）で、産地は瀬戸・美濃系である。

次に、清洲宿関係のほとんどの遺構から確認された瀬戸・美濃系の磁器について、61A区SK01出土の碗類を例に紹介する。

この椀類は7分類できる。I類は器高に対して口径が2～3倍ある、いわゆる「小杯」である（第5図1・2）。II類は器高に対して口径が1.4倍あり、胴部がかなり立ち上がるタイプである（第5図3～7）。III類は器高に対して口径が1.8～1.9倍あり、口縁部が外反するタイプである（第5図8～27）。III類の中でも法量により5類に小区分できる。口径9cm以下の器形（第5図8～10）、口径9.5cm前後の器形（第5図11・12）、口径9.9cm前後の器形（第5図13・14）、口径10.6～11.1cmの器形（第5図15～25）、口径11.8cmの器形（第5図26・27）である。IV類は口径が15.2cmと大ぶりの椀である（第5図28）。V類は底径に対して、腰部から胴部にかけて立ち上がりの緩やかなタイプである（第5図29・30）。VI類は高台脇と腰部がほぼ同じ高さを測り、胴部は直立するタイプである（第5図31）。VII類は高台が高く、高台脇から口縁部にかけてほぼ直行する、いわゆる「広東茶椀」である（第5図32）。

器形からは7類に分類できたが、この分類は必ずしも文様[2]には反映されていない[3]（表－1）。

61A区・62C区・61B区で検出された清洲関係の遺構から出土した遺物は、若干18世紀のものがみられるが、そのほとんどは19世紀のもの[4]である。

4．結語

以上述べてきた遺構の展開と出土遺物から考察を加えるならば、五条橋以東（特に発掘調査区付近）において町屋が展開するのは、19世紀に入ってからのことと考えられる。

ところで、筆者の認識不足のためにまとまりのない考察となったが、本稿が、今後清洲宿についてより詳細な考察を行う第1歩となれば幸いである。

最後に、この小稿をまとめるにあたって御教示をえた愛知県陶磁資料館学芸員仲野泰裕氏、㈶愛知県埋蔵文化財センター職員諸氏に記して厚く謝意を表します。

〔注〕

(1)わかりやすく書き改めたものが清洲町民センターに所蔵されている。原図は徳川黎明会所蔵。

(2)文様の名称を記すにあたっては、小川啓司「そば猪口絵柄事典」光芸出版　1987、　東北大学埋蔵文化財調査委員会「東北大学埋蔵文化財調査年報１」1985　を参考にした。

(3)但し、第５図13・15・16・19は口縁部内面に幾何学文を配している。

(4)ここ数年、各遺跡でかなり時期的なところがおさえられているが、19世紀についてはいまだ不確定なところが多いことを考慮して、ここでは19世紀を小区分していない。